昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅九年六月一日発行卅九年六月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通刊四四五号

川柳雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 445

麻生路郎☆画

六月号

川雑

本社六月句会

日時　六月八日（月）午後六時

会場　自安寺（☎211）一四七八番）
大阪市南区千日前電停スグ東北側

兼題「ほろ口」（三句）　麻生路郎選
「黒髪」（三句）　菊沢小松園選
「早合点」（三句）　松江梅里選
「スタイル」（三句）　吉田圭井堂選

席題　三題（当日発表）

句評　清水白柳

呈賞　☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費　百円

幹事　いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂志
清人・すすむ・薫風子・柳安子・舟遊

★投句だけの方は郵券三十円同封
（〆切六月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・大阪（671）六〇八一

7月本社句会
兼題
せせらぎ
肌
ベストセラー
黒

気軽で！朗らかで！新鮮味ある

川雑

川柳ゆかた会

8月9日（日）午後一時

★恒例の「川雑川柳まつり」は一九六三年度で十年間の予定が終了したので、今夏は昨年の優勝者川雑備前支部（支部長水松東岸氏）の優勝楯返還式と十回中二回優勝された最優勝者川雑篠山支部（支部長小西無鬼氏）の優勝楯永久保持への贈呈式を華華しく挙式する。この光彩ある盛典へ柳縁の人々はどなたでも参列されたい。

日時　8月9日（日）午後一時

会場　大阪府信用金庫会館
（市電天王寺西門電停南西角）
電話大阪七一六局八四八一―二
七七一局九九〇四

同会　西田柳安子
開会の辞　辻圭水
挨拶　北川春巣
兼題「神経」（三句）　麻生路郎選
「泳ぎ」（三句）　内藤きさ子選
「滝」（三句）　橋高薫風子選
「部分品」（三句）　菊田いさむ選
「隣り」（三句）　早川清生選

出席者も番傘、各題句箋別紙・裏面に雅号明記七月末日本社着便のこと

席題　当日三題発表（各題三句）

呈賞　★各題天地人・各題天位から路郎選により
不朽洞賞
（次号で発表）

余興　閉会の辞　樋口舟遊

会費　百五十円

懇親宴　会費八百円（同会場において5時半から7時までの予定）

★投句だけの方は郵券五十円同封（〆切7月末日）

▼夫人同伴歓迎・初心者歓迎▲

川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西5丁目25番地
電・大阪（671）6081

不朽洞句帖

麻生路郎

夕日赤けれども　警手無表情

盗られても銀行　残は合わしとく

どうもしないのに老女は身構える

元愛人をエスカレーターから見付け

性器の陳列都おどりとか名ずけ

（病院内にて）

天気晴朗やまがらに養われ

川柳雑誌★六月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎……（3）
題字……麻生路郎・表紙……野尻弘
川柳と社会性……河野春三……（4）
サラリーマンお役人論……東野大八……（7）
明治大正柳誌巡礼……奥津啓一朗……（36）
川傍柳初編研究（一五）……丸十府・岡田市
川端柳風・高須唖三味・前田喜代人……（14）
岡崎重義・清博美・藤井和雄
川柳の周辺（鼎談会）……北川春果・清水白柳・河野春三……（28）
女として人間として……時実新子……（32）
妻を語る……麻生路郎……（18）
★一鶴逝く……（35）
★現代柳人録……（24）
句評ディスカッション……河野春三・早川清生・林夢虹・西川晃・橘高薫風子……（20）
柳志寸言……本多柳志……（37）
★飛燕往来……（44）
弟橘姫……冨士野鞍馬……（31）
選から叙法から……八木摩天郎……（23）
大万川柳「静養」発表……（40）
私の好きな愛欲の一句……六葉・喜由・塊人・甲吉・濤明……（34）
不朽洞の人々……（注盛改め）章雅……（39）
★
川柳塔……麻生路郎選……（8）
同舟近詠……諸家……（23）
近作柳樽……麻生路郎選……（24）
金泥集……北川春巣選……（33）
各地柳壇……麻生葭乃選……（41）
★柳界展望……（38）……下朽洞会から……（39）
一路集「曲り角」……友淵貴山選
「混浴」……後藤梅志選……（36）
「まきぞえ」……小西雄々選
★柳樽室……路郎生……（46）

川柳と社会性

河野春三

一

「川柳は人間諷詠の短詩」であると私は思っています。諷詠という字が嫌いなら人間性探究といいかえてもよいと思います。

然し人間というものは、この世にひとりで生まれて来て、ひとりで死んで行くことは間違いはありませんが、生誕と死滅の間の大切な、生きているというこの時間は、独りであって、而も独りでは生存して行けないのです。そこに社会というものがあり集団の上に必要な社会秩序や規則があってその中の細胞の一つとして生きているという至極分りきった事を先ず、認識することが必要と考えます。毎日私達はこの社会という連環の中で、働いたり遊んだり考えたり論争したりしているのです。国家というもの、民族というもの、世界というものの動きの中で、意識するとしないとに拘らず、何らかの関連があって、生活をしているのです。

だから全くの自分一個ということは実際にあり得ないのです。勿論一日のうち、何時間かは自分独りの時間があって、独りで考えたり本を読んだりすることが少なくとも文芸というジャンルに愛着のある皆さんは、「独りの時間がある」と考えるかも知れませんが、それすら社会の中の個としての束縛からはのがれていません。

戦後は全く自由を取り戻して、戦争中のような強制や弾圧はなく、自分というものの思考を生かし得る時代が来たことは事実ですが、家庭というもの、国家というもの民族というものが存在している以上、そこに政治というものがあり、経済というものがあって、それが個人の生活に自然に大きな影響を与えています。

戦後のいろいろな革命的な変動の嵐の中で大きな生活転換が行なわれ、それがまだまだ過渡期であって、いろいろな歪みや皺寄せが、社会の各方面に起こっていて毎日の新聞やテレビで、いろんな問題点が取り上げられています。

昭和三十四年九月号の「川柳雑誌」に北川春巣さんが「社会病理学」からという大変面白いお話を書かれたのを皆さん覚えていられるでしょうか。

春巣さんはお医者さんですから、「社会病理学」という本を見つけて、それを医学的見地から、社会のひずみを現象的に分類して、巧みに川柳の例句を引用しながら話を進められているのですが、その中で触れられた問題はいろいろあって、精神病者、離婚、未亡人、親子心中、里子、非行少年、混血児、としより、浮浪者、人身売買、スラム、ドヤ街、売春、ヒロポン中毒者、ニコヨン、バタヤ、テキヤ射倖集団、内職という風な戦後に著るしく問題化したものにメスを入れていられるのですが、これらの社会問題は、皆さんも私も決して他所の火事でなくて、身近かに社会人として痛切に傷ついている問題として受取っている筈です。

戦争というものの惨禍のあとで当然起こるいろいろな目まぐるしい変動が毎日毎日世相の中で動きます。

ダイヤルをニュースに廻しますと、画面に表われるものが贋札の横行であったり、誘拐事件であったり、汚職であったり、背番号の選挙事件であったり、暗殺やテロ、列車や飛行機事故の惨劇など呼吸のつまるような中で、生きているのです。

宇宙戦争のことなど考えると、竹槍やバケツリレーのあの当時の竹槍防備が笑止になってくる程の変転です。

二

川柳家も人間である以上、社会人として生活する現代人であることに間違いはありません。ところがこの分かりきったことが案外忘れられているのではないでしょうか。

大体、短詩文芸というものは、その性質上モノローグ（独白性）的な性格がある事は事実であります。

俳句等では殊に昔は社会性というような考え方はなくて、風流というもの、「雪月花」という言葉が現わすような、現実から逃避する、一つの憩いの場であった観があります。「花鳥諷詠」とか自然の讃仰という事が中心になっていたのです。

芭蕉のような優れた人は、より内面的な思考があって、単なる花鳥諷詠ではなくてもっと精神的な、わび、さびというような境地を拓いていますが、これも東洋的な

「無」の精神にかかわるところが多く、その行動も、作品も社会というものの関連性は当然ながら薄いといわねばなりません。

勿論私達日本人にとってこの日本の「風土」というものの重大な密接な問題は精神的にも肉体的にも無視することは不可能ですし、芸術全般についていえることですが日本の風土の特殊な性格の中で、そうして他方には中国文化や宗教の大きい影響の中で、育って来たものが日本の芸術の伝統であり、この事は今日も明日も、私達の血脈に流れていることは事実であります。

話を短詩型の文学だけに限定しても、万葉の昔から日本の風土の中で、はぐくまれて来た独有の性格は、この細長い列島の気象風物自然というものの中でどのようにそれらを讃向し、愛情を傾けて来たかということ、恋愛相聞の歌の間にさえ大きい影響をうけて来たという事も了解出来るのです。

然し明治維新以来、封鎖的な日本人の支配の上に下ろされた西洋との交流による西欧の文化の移入につれて、社会というもののあり方が大きい変動が生じ始めました。

思想の上で、政治の上で、経済生活の上で生活様式の上で、夢想もしなかった変化が、初めは、お先走りや過渡期の状態で受け入れられ、それが次第に融和し国民の思想や感情の上にも著るしい変化を来たしたのです。

科学というものの目まぐるしい進歩は各方面で革命的な変革をもたらせたのです。

私自身は明治の末期に生を享けて、いわゆる三代の変遷を身近く経験しているだけに、私の周辺でどのような大きい変動が起こって、その中でどのように生き抜いて来たかということに切迫に思いあたります。昨日の私は今日の私ではなく、明日の私は昨日の私ではありません。従って、文学する上に於ても、個人として人間性とこの伝統性をうけついでいる個人と、社会の中の個人とが、いろいろな矛盾と摩擦とを見せ乍ら生ま生ましい血を吹くことになるといえます。

この社会組織の一細胞として、実際の毎日の生活が行なわれ、食べているという事実、食べている背後に、「生活」という無限の人間の営みが存在しているといういわば精神的なものが作品の上に感動として表われて来るので、もはや社会というものと絶縁したところで個人だけの生活もありはしないし、雲や霞を食って生きている仙人はこの世ではそう数はあり得ないと思います。

勿論私は過去の短詩の上でそういう社会と関連のない全く孤立した個人である生活をもった作家の作品を知っているし、それらの作品のすぐれたものもまた人間の一つの純粋な、一図な生き方として愛着を覚えないではありません。たとえば皆さん周知の

あすは元日が来る仏とわたくし　尾崎放哉

淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る　同

一日物云はず蝶の影さす　同

入れものがない両手で受ける　同

せきをしてもひとり　同

炎天をいただいて乞ひあるく　種田山頭火

鉄鉢の中へも霰　同

朝からはだかでとんぼがとまる　同

柳ちるそこから乞ひはじめる　同

生死の中の雪ふりしきる　同

こういう作家の句を愛唱している事も虚ではありませんが、今日の経済機構や、生活環境の中の自分自分からこのような孤独な寺守りや、行乞の生活者のような句は、生まれようもないほど、日常が社会という大きな連環の中に生きている事を認識するのです。

よく人は「孤独」ということをいいます」。「孤独を愛する」ということをいいます。人間が人間である限り、そうして少なくとも文芸というようなものに愛着をもつ作家として、この孤独感というものに捕われることは事実であり、そういうところから作品が生まれるということも多分にあり、そういう一切を絶縁した空虚の心境にある時、人は真実の人間につきあたるのです。

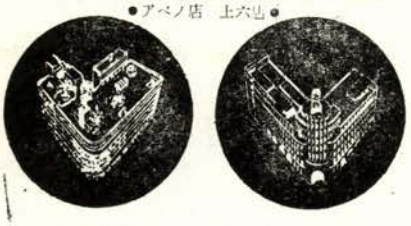
然し乍ら本当の孤独というものは、三木清がいうたように、「孤独は山の中にあるのでなくて却って街の中にある」という言葉の真実をかみしめます。群衆の中にある孤独、歓会の中でしみじみ感じる孤独、今日ではこの複雑怪奇な世相の中で、きびしい生存競争や若いエネルギーの奔騰する交通地獄の舗道で、人はますます、どうにもならぬ孤独感に陥入るものではないでしょうか。社会と絶縁し得ない、社会と遊離し得ない現実の中でこそ、作者の孤独があり作句の契機が見出されると思います。

三

さきに春巣さんが挙げられた戦後のいろいろの問題提起の外にも、私達が瞬目したいろいろな社会現象の中でも流行語となった誰でも知っていそうなものにこんなものがあります。

「隠退蔵物資、乱闘国会、新興宗教、十三階段、ララ、ケア物資、斜陽族、幽霊やトンネル会社、自転車操業、駅弁大学、社用族、逆コース、熊沢天皇、赤線青線、ヤンキーゴーホーム、死の灰、お礼拝り、一億総白痴化、団地族、神風タクシー、所得倍増、緑のおばさん、飼育、不快指数、煙霧、人工衛星、宇宙犬、キンゼイ報告、原子病、勤評、二重構造、職場闘争、潜在失業者、賃金ベース、投資信託、スーパーマーケット、オートメーション、貿易自由化、農地改革、基地、企業の体質改善、数量景気、経済成長率、きれいな水爆、ミサイ

●アベノ店　上六出●



＊お買物はいちばん便利な
キンテツへ!!

アベノ・上六
近鉄
アベノ 621—1231
上六 771—3331
木曜定休

ル、スエズ運河、鉄のカーテン、冷たい戦争」……等々とあげるに暇ない話題がニュースとなって私達の耳目に触れて、どれも自分自身にとって無縁でないところで、私達の体内で、賛成や反対の手をあげたり、いかりや抵抗を感じたりして何かの形で、傷痕をとどめた事と思います。

然しこれは単に題材の問題ではありません。時事川柳という一つの分野があって、そこでこうした日常身辺に行る問題をとりあつかう場がある事は事実であって、そこで話題として、常識的な社会諷刺の形で、それらが取扱われているのですが、大抵の場合第三者的な、自らの傷つくことのない場での諷刺、いわば昔の落首のようなあり方で皮相にとり扱われているというところに問題があると思います。

戦後新聞や週刊誌に「うそ横町」や「うそくらぶ」「片えくぼ」式のコラムが出来て、そこでも寸鉄人を刺す——という目的の、一つのジャンルとして存在しつつあるほどの「諷刺」の分野が育って、人々を苦笑させる機智か、氾濫していますが、ここでも、高所からのせせら笑いで、警句的役割りは果たしていますが、諷刺の真のあり方として、決して本質的なものとはいえません。

諷刺については、前年の本誌に「諷刺の基質」を書きましたし、〝川柳現代〟誌上で松本芳味氏が「重く内部に煮つまるもの」という適切な諷刺論を書いていますので、重ねて説明する必要はないと思いますが、芳味氏がその論の中で、結局は作者の思想の問題であるということを強調しているのを、肯定したいと思います。

四

思想——というと人はすぐ難かしく考えたり、川柳にそんなものをと思う人が多いようですが、これは全くあやまった考えです。

思想というものは、人間誰にでも、あなたにも私にも誰にもあるものです。これは元来哲学的なコトバであるかも知れませんが、決して哲学でいうような浮び上ったものではなくて、「われわれにとってたいせつなのは、できあがった思想ではなくて「思想すること」である。実践が提起する課題との対決、格闘、そしてこれをつうじてみずから難路をきりひらき、みずからの展望をかちとってゆく作業——これこそ思想とよぶのだろう」（古在由重）

とある通り、哲学的な定義や分類でなく、つまり思想の剝製でなく、現実の事象や人物に具体化され行動されているものであります。

「人間は考える葦である」といった有名なパスカルの言葉に

「私は、手もなく足もなく頭すらない人間をかんがえてみることはできる。しかし思想（パンセ）のない人間をかんがえることは出来ない。それは石か野獣かであろう」

といっていますが、人それぞれに思想というものがあればこそ、それによって、日常の触れる事柄や問題に対して、自分の考えで動くのです。芸術一般は勿論でありますがこれを川柳に局限して考えても作品には何らかの作者の思想が沒みとれます。いや沒みとれなくてはなりません。

主観的な句はそれなりに、客観的にもその底に沈潜した思想の支えがあってこそ、人の感動を呼び起こすのだと思います。

ここが問題だと思います。

つまり思想は誰にもあるという間違いのない事実——があり乍ら、無思想の作品が出来上っているとしたら一体それは何でしょうか。

作者不在の川柳が出来たとすれば、一寸考えねばならないと思います。

思想というものは人間の肉体、人間の生活、人間の労働にむすびついていますから、先程挙げた汚職や弾圧や虚偽や不合理や圧制にあえば思想が抵抗となって表われます。

随分人間の永い歴史の間には、人命がいろんな形で、たとえば戦争や革命や鎖国や宗教の迫害のようなことで圧制されたり焚殺されたりしました。きびしい弾圧のためにはいわれのない獄死を遂げた人々もありました。

然し思想は弾圧のたびにかためられ、何かの形で再び次の誰かに受けつがれて亡びてしまうものではありません。

私達は社会性川柳を考える場合、社会的題材そのものを扱ったからといって社会性川柳という事はどうかと思います。勿論それも広い意味での社会性をもっていないとはいえませんが、本当の社会性とは作家の社会性、作家の社会思想が底にどのような形で、うごめいているかということで決定されるのではないでしょうか。

諷刺についていわれる批判精神とはそういうところから出発すると思います。

五

再びここで、皆さんの生活が、決して自分一個の仙人の生活でないこと、家庭があり肉親があり、食べてゆくための職業があり、階級があり、貧富の差があり、国家があり民族があり、そうして全人類を包含する世界というものを形成しているのですから、この中の一点である自分というものをよく考えねばなりません。

週刊朝日（三月十三日号）に谷川俊太郎氏の詩がのっているので、御読みになった方も多いと思いますが、再録して見ます。

「かも知れぬ」　谷川俊太郎

西独の州教育文化相怪死・
産業スパイ逮捕
昨日会った外人は実は旧ナチであり
隣家の青年は実は暗殺者である
初恋の女は実は魔女であり
教師は実は忍者である
課長は実はスパイであり
首相は実は革命家
減税は実は大陰謀の一端であり
テレビは実は集団催眠
月は実は空飛ぶ円盤の母胎である
地球は実は無限の平面であり
歴史は実は逆行している
現代は実は中世であり
現実は実はちっとも散文的でなく
おおいに波瀾万丈なのである
詩の出来栄えのよし悪しは別としてもこの逆説的な批評精神にふれて「かも知れぬ」とあなたも瞬間思われなかったでしょうか。社会のひずみが毎日押寄せる中で生きている私達の頭をよぎるこの抵抗は、ほんとうに「かも知れぬ」のです。

この詩をもって社会性の問題の結びとします。

—一九六四、五、四—

サラリーマン お役人論

東野大八

早いもので、僕がサラリーマンに転業してから丸一年が経った。

出勤退社はお好み次第、仕事さえしていれば上にも下にも天下泰平、といった新聞社勤めとは雲泥の相違というのがいまのサラリーマン勤めだ。タイムレコーダーがあって、会社の行き帰りにはガチーン、ガチーンとこれを叩かねばならない。遅刻を三回やると一日欠勤となり、三日休むと通勤手当が消えるという仕組になっている。はじめはよくこれを忘れて、月給日には〝しまった〟と思うときがあるがどうやら最近では馴れてきた。

ところでこのサラリーマン稼業だが、朝夕二時間のラッシュをくぐり抜けての出勤だけに、へたなことをやつているとてき面に身体にこたえ、生活に影響してくる。そのため、無駄な労力を出来るだけ放出しないことにつとめる。たとへば、一杯いかんに行こうと誘われれば昔は一も二もなくついていつたものだが、このごろではそんな気にトントなれない。一分でも早く家に帰り、一秒でもムダなく身体を休めるように努めるのである。

「見直したワ、とうちゃん」

などと女房がこのごろでは心から絶替してやまないが、このほめられ方は時には気に障る。律義すぎるほどの自分に、自分が腹をたてているからだ。

今東光が、テレビの「一刀両断」というので「いまの若いサラリーマンがプロ野球やプロレスに血道をあげているが、こんなエネルギーがあるのならもっと別の方へふり向けてみてはどうか」

とさも心得顔にいっているが、こんな坊主には、サラリーマンの機微なぞわかりっこないのである。生活が生活だから、そういうものに彼等は走らざるを得ないのだ。仏即色と心得て、妙なエロ小説ばかり書き、法門の利権となると眼の色かえてとびつき、意に満たないと得意の筆でたたきまくる。こういう末法の売僧はしょせんわれわれとはそれこそ縁なき衆生であると私としたことがアタマへきたことだ。とにかく源氏鶏太がベストセラーで、いくく千代かけて売れているのも、要はサラリーマンが世に多すぎるから、その共感のはけ場が彼等に通じるせいで、ついでに目白三平にまで走らざるを得ないのである。

サラリーマンのなかで、一等くそ面白くないのがお役人だろう。〝休まず、遅れず、働かず〟この三ずの最大公約数が彼等なのである。

県庁、市役所などのお役人というものは主体性を持ってはいけないのである。どのいれものにでもあう水みたいな人物でないと勧告（退職）までもたない。能吏は黙して動かずで、出世主義者は絶体役人になってはいけない。役人は権力に弱い、政治家には聖なしだ、というのはこういう本性からきているのである。お役人でキレるとか、お役人には惜しいというのは、結局うちがよくて道楽半分のお役所勤め、という連中に多い。

お役人は例外なく碁、将棋、麻雀には滅法強い。勤めが勤めだからこういうものでウサ晴しをしなけりゃあモタんのだ。上級職になるとこのほかにゴルフがつく。知事の政略や、工場誘致で財界人との接触面が多いからである。

お役人でエラくなって、部課長になるにはどうすればよいか。それは知事とその側近につながることを第一義とする。極端にいえばこの道しかない。

知事は公選である。その知事は中央要路とつながりをもたねば無能知事のそしりをうけ、ついには失脚の憂き目をみる。その知事と地方首長のつながりだがこれは、直結してないとお互いが大損になる。知事にキラわれるとどういうことになるのか。当然かけるべき橋も、つけるべき道もパアとなってしまう。キレるお役というものは、こういう中央―知事―地方首長の関連性をよく見極めた人間のことをいうのである。

ある地方から橋なり、道なりを作ってもらいたいと陳情が出ると（市町村長）が、現知事とどういうつながりにあるのかを調査する。それは、細かい部落の投票数にまで眼がおよぶ。仮にそれによって現知事とその地域が選挙では固い結びつきにあるとわかれば、橋がいくつあろうと道が何本あろうとたちまちOKしてしまう。ところがそれが反対の場合だと、彼は社会公益上当然必要と認める橋、道路でもスだ、コンニャクだといって行方不明にしてしまうのである。

お役所の企画、立案は原則として係長以上はノータッチだ。主に主任級がやる。係長以上が判をつくつかないという段どりは、係り主任の説明によって左右される。係長以上か部長以上の上級職に叱られるかホメられるかの岐路に立つのは、一重に企案、文書化した係り主任にすべてのポイントがあるわけだ。係長、課長は有能なそうした部下を持つことによって自己のポストが重くもなれば軽くもなる。随って人事異動の場合、そうした「有能」な部下を持つか持たないかということで万事きまるわけだから、このときこそ本当の顔でハッスルする。お役所の最も罪深い「めくら判」の根源は実に主任級にそのすべてがにぎられている。そのめくら判の是否をにぎるキーポイントは「選挙」であり「政治」そのものである。選挙によく叫ばれる言葉に「現職の強味」とか「中央につながる政治」ということが口にされるのは実にこの点に起因する。

こういうわけなので、衆議院、参議院選挙には「知事」が主役である。「○○県政の成るも成らぬも実にこのときにあり」というわけで、知事は旗本の各部長に対し、その職権を通じて選挙戦を断乎戦い抜くべし、と撒せんする代議士当選へとハッパをかける。それをトチると部長たるものたちまち鞍替へはおろかサの台が飛ぶのでクカクカしてはおれない。各部長はその職務上、一番真剣かつ必死になるのはげにもこのときだけなのである。

選挙で誕生した政治家肌の知事は、二選三選となるにしたがい、庁内の行政を政治的カルテで診断し、旗本部長を侍らせ選挙地盤が基本的県政の裏打ちとして表面化し、知事派首長第一主義で徘徊去る。「わが党にあらざるものは人に非ず」とそれは非情きわまりないものとなる。

こうした知事にとって、県議会の野党派はなくてはならない存在である。与党が保守で野党が革新の場合、野党が闘志をかりたて青筋を立ててくれるほど有難いのである。彼等がいなければ県政のPRの足がかりがなくなり、アナふさぎができなくなるからである。

反知事勢力があればこそ陣情戦術が生まれ、その是非によってますます選挙地盤の地固めに根を生やすことができるのだから……。

日教組などは地方においてはまことにウルサイ存在だが、専従三役は離職してもチャンと道はたっている。県教組の委員長でも三百万円はカタイ。こうした金は彼が九十歳近くも教壇に立っても手にできない。「これを知っていなくてなんで教育長がつとまるか」といった私の友人の教育長までいる。

「酒飲んで話せばわかるお役人」

という言い川柳があるが、この酒こそは大いに彼等は飲む。しかし飲むその酒はあくまでその場限りの酒として飲まなければもはやお役人とはいえないのである。甲、乙双方からよばれても、どっちの側にもつくべからずなのである。

「お役人らしくない」といわれるご仁は、朋輩や地方民に愛されても、もはや官庁の職場の人間ではあり得ない。こういう人間を上役は決して部下にはしたがらない。生活がキッチリしていてハラには一物もなく、きわだって勉強もしない、こういう人間が水持ちのきく人間で、年期が入れば万年係長、停年課長となり恩給の計算で日を過ごし、将棋、碁、マージャンの名取りとなって一生を終わるのである。

一酌巷のサラリーマンたる私だが、つい以上の通りサラリーマンとしてのお役人の正体をケナしたが、一面彼等ほど気の毒なサラリーマンはないのである。出世してもしなくても、味気ないそのお役所勤めが結局はその体臭をお役人風にとってかわりわれわれに吹きつけてくるというわけである。その風の裏打ちとなるものは親方日の丸というくだらないエリート意識である。

川柳塔

大阪市　市場没食子

校歌もろくに覚えんづくで卒業し
退職金割いた出資の社がつぶれ
阿呆になりきれず職場がまた代り
大阪へ呼んでも父は田を売らず
妓が唄とた歌湯に浸りつゝさらえ

大阪市　土井文蝶

これやこの掏摸も着ている紳士服
利殖するつもりがおかし株下がる
金貯めて冷たき人の離れゆく
飛び降りる人は防げぬ百貨店

大阪市　正本水客

出雲日御崎

灯台の白さに雲が突きささり

出雲路の夜桜

花のしろ夜空に深くうごかない

湯村温泉（出雲）

さくら透く陽が湯槽までこぼれてき

高槻市　若柳湖花

麻生路郎選

呼び止めてくれる人あり春の宵
生活へ五尺のからだ背伸びする
吹き込んだ花掃除機に吸いこまれ
つくし摘む子の影ながく陽がしずむ
三階の風粉薬を吹き飛ばし

兵庫県　小西無鬼

臍出して孫寒空を飯って来
ガスライターうかつに髭をこがしたり

大阪府　西いわを

土筆摘む受験の後の気の軽ろく

大阪市　北川春巣

カラ出張できる役人羨みぬ
墮す気へ婦人科お目出度ですという

陶器の町信楽へ吟行

チト世帯じみて土鍋の値も尋ね

ハワイ　羽佐間柳薬

同情の裏に魔の手が覗いてる
凋落の余生頑固が世をせばめ

堺市　吉田圭井堂

仮縫いの真ッ只中へ来た税吏
信仰が常識さえも疑わせ
着物着た社長で今日は物が云え
すねかじり海外旅行も企画する

防府市　長野井蛙

生字引いつも貧乏くじを引き
痛痒のないオルグのハッパに社がつぶれ

岡山県　直原七面山

アロハの下に竜のイレズミ
蜘蛛の糸のように搦んだ妓の色気
送別会の主はサイダーばかり飲み
母の屍体と一緒に寝るとむずがる児
転んだ子を起して女中叱られる
飲みたいのが寄って歓迎会開く

鳥取市　河村日満

輪になってあそこも安来花の下
よその課に昨日の花見うらやまれ
笑顔まで父母に似てきた初節句

豊中市　足立春雄

お役所も案内係だけはおき
正義感空しく説いて隅に生き
衆生済度とかで教団だけ太り
制服を着せて方々つれ廻り

箕面市　安岡珊枝郎

パパ帰る疲れたような顔をして
大切な客へ合理化言うなかれ
仮及も思い出にする意気が欲し
がめつさにあきれまともにみておれず
手も足もでず六十の女のヒス

大阪市　木村水洞

旧婚旅行　二句

肥えている妻へ砂丘は広すぎる
せわしない旅も楽しい夫婦づれ

倉敷市　田垣方大

おこらせて帰すも社長策のうち
ベレー帽案外固い頭なり
武器になることもあるらん横坐り
六月の太陽団地はオシメ展

米子市　小西雄々

善悪がネオンの下で入り乱れ
神聖という労働に貧富の差
勇退を終着駅というとれず

大阪市　山川阿茶

眼鏡を拭いて心を拭き忘れ
ダイヤ洗ってわが心恥し
劣等感持つ商売がやめられず

加賀市　那谷光郎

仕来りの行事見下ろす鬼瓦
宝くじ当って日雇今日限り

大阪市　福井野迷路

まあこんなもんやでと孫を評価する

岡山県　浜田久米雄

あくせくの世を新聞とテレビで見
花嵐花見の金が浮いてくれ
退職のその後血圧など云わず

出雲市　尼緑之助

ここも見ておくれと菜種花盛り
スト騒ぎまだ下に下がありフンと云へり

大阪市　水谷竹荘

無理をして買ったピアノと子は知らず
金のない二人顔のきくとこで呑み

京都市　大鵜喜由

年甲斐もないお色気をあわれがり
子が使う額だけケチる市場籠
闘魂に燃えて不快指数の子

奈良県　飯降白香

栄転へ傘下の者のおべんちゃら

門真市　福島鉄児

税務署で妻の強さを見付けたり
ラッシュアワー僕も押してる一人なり

岡山市　服部十九平

オーバーな愛語を少女不潔がり

岡山県　大森娯句楽

宿の無い雀に似たり雨の旅
自由行動面子のことに一寸触れ
先見の新平さんの路迫し

西宮市　若林草右

賞品の時計が巻いたまゝ止り
栄転のとたんにばれた使い込み
税務署が金を返すと通知が来

一足飛びの夏に喘いだ鯉のぼり
高槻市　山田季賛

機関車の窓へ京都の風は春
岡山県　田村藤波

一筋の髪も貴重な鑑識課
ガンでないと母の偽りきくベッド
愛煙家肺ガンぐらいで驚かず
児島市　本田恵二朗

窮すれば通じるやろとこせつかず
待つ心燕の巣板打ち換える
鳥取市　森本法泉子

案内は鳥の子紙に京四条
屋上の稲荷社島津製作所
引返す意見がまけた山の小屋
病院食故郷は魚のうまいとこ
堺市　高崎雄声

夢よ今一度下った様をしかと抱き
何が人づくり中学生の事故続く
鑑賞用として女を見るも齢
岡山県　永松東岸

人作り等と標語が出来ただけ
結婚を近くしますと羨ませ
口説かれりゃ困り口説れねば淋し
チリ紙のうすさはかなさ見てる昼
倉敷市　野田素身郎

花に遠くふたアりきりの場をみつけ
はじめての子供を照れ臭そうに抱き
芦屋市　丸川初甫

若死の父の齢を通り越し
ハイヒール古都をたづねる顔でなし
居眠りを肘鉄砲で下車される
峠越の春

石仏九百年の色を出し
佇めばなこそのせきの碑があった
岡山県　池田古心

泣く一つ手だから女は嫌いです
この借金あの借金がと不眠症
大阪府　早川清生

夫婦仲無断中絶以来冷え
式あげたときの写真がない党人
入社さすまでは御をつけ様をつけ
女工寮農半生の脚を恥ず

台韓へいつまで敗戦国の卑下
堺市　辻圭水

スト中止解決してるわけでなく
決算のための数字もある不思議
上役に趣味まであわすあほらしさ
岡山県　野々口美舟

釣書の折り目が切れて帰って来
心なき四季の異変を気にすまい
大阪市　橘高薫風子

韓人の服に最も風薫る
膝に手を置いて井上八千代かな
ボート漕ぐ恋は四十を過ぎて来ず
下関市　中村九呂平

ぼろかすの私立へ裏から礼参り
先方の出方を探ぐる煙草つけ
奈良市　宮口笛生

旅が好き隣へ一ぱいどうだっせ
通過する駅の桜も見頃なり
波の音海岸沿いの宿をとり
神戸市　仲どんたく

開業医株の相場も診にゃならず

このままで別れさせない春の罪
東京も鉄板の道歩かされ
誘惑を待機しているアイシャドー
平田市　久家代仕男

税務署を出ればのどかな春霞
入学を告げる仏壇寂として
グラビヤは花の四月へもう水着
出雲市　原　独　仙

何事ぞ毛虫如きへ娘等騒ぎ
オリンピックこれでもよいか交通禍
社長来る部長陣頭指揮で掃き
世の移り札所巡りもオートバイ
岡山市　江　国　幽　谷

将校で威張った服を乞食が着
乳母車までが出て来た農繁期
飲んで飲んで飲んで死んだに仏様
西宮市　野　呂　鵜　汀

盲にも見ゆるが如き美人の香
新妻の未だ真ッ白き足袋の裏
キリで突く如き痛さよ愛の愛
無利子なる罠にかかった女の身
新潟県　高　野　む　じ　な

社をつぶすつもりかストの容赦なし
足で戸を開けるのも子が真似し
大阪市　石　倉　旅　風

ストやれる身を涙むをたしなめる
幼稚園時が来たから通い出し
大阪市　魚　住　満　潮

続・西成界わい

バックナンバーを示談屋見逃さず
競輪の予想背中に子をくくり
刑満期当座坊主の様な気にもなり
春の日は長し借金取りの声
腹からの悪人でなし臍を出し
拾い屋の親子を春の陽が包む
愛媛県　村　上　旭　童

長女入学

ランドセルやれやれ無事に帰って来
雨の日の葬列十年近うねて
ややこしさ防犯灯の位置でもめ
高槻市　傍　島　静　馬

転入届うちでしますとご用聞き
爪切りがデスク一巡してかえり
弔辞読むこども悲しい顔でなし
大阪市　仲　谷　ハ　ナ　子

ピアノバレー母親としてほこり持ち
バイバイする孫へ負けずにバイ〳〵し
布施市　森　下　愛　論

口数の少ない娘にある坐りダコ
散る花を感傷的に嫁き遅れ
春惜しむひとときボートの手を休め
大阪市　河　井　庸　佑

実力で通ったことにして通い
これ以上トコロテンでは進まれず
めだかのよう時の流れに逆えど
大阪府　谷　沢　好　祐

公立へはいった鯛は安いもの
年功序列掃除の外は出来ずとも
青森市　工　藤　甲　吉

切手買う親馬鹿列の中にいる
レストランよりも屋台が性に合い
デパートの火事女房の気をもませ
暴風雨警報発令中も飲み

松江市　小林孤呂二

春風にとばされそうプロレタリヤの歌
春の雨黄色ずくめの児と出掛け
金ボタンゆめ見る父に相すまず
弱き名のなかの臨時雇なり

豊中市　林　夢虹

絶壁の花を太郎は摘んできた
決闘で恋が得られるものならば
片思いベレーをかむってみたとても
天地沈黙二人がキスをしています
春ならむ若き乙女の脛長し

大阪市　今西章雅（生蓋改め）

愚に還り呑もう四月の花の下
上に上あると受験にさとらされ
云いたい事云える人間にも成れず

京都市　室井八九寸

文化財近過ぎボヤが四段抜き
ふろしきの古きも持って里帰り

岡山県　横山一声

予備校の桜も同じ様に咲き
ほんとうのどん底創価学会も振りむかず

小松市　関戸宗太郎

自分だけ若いつもりでいる社長
停年がなくて重役の石頭
集団就職君に召されてゆく如し

石川県　高山凉髪

裁判のある日の庭の花が散る
駅員と冗談とばすむかえ湯女
眼るふりしてとしよりに席あけず
ゴルフしているのも只今出張中

美祢市　安平次弘道

春うらら空巣が空巣におどかされ
役人でいばり天下ってもいばり
生存者叙勲長生きをするか
消えるまで尾灯見送るも恋心

宇部市　平田実男

トゲトゲしいものにライバルとの握手

諫早市　川岡霊眼子

風致地に住んで政治を気にもせず
名刺出す憶病さで票を貰いに来
集金に行って香奠やって来た
貧乏をテレビに取られ暮してる

修身がないので刃物持ちあるき
韓国の児に裕仁とあんまりな

貝塚市　杉本一鶴

かしこさが顔へぬけてるひややかさ
洗面所でもうやっている四月馬鹿
金だけが魅力の女の肌の荒れ
クコまで飲んで女の機嫌とり
細い腕出すなと弟に笑われる

岸和田市　内藤きさ子

もろて来たつつじバケツで花が咲き
取柄ないどころかペテンのうまいひと
思いきって赤を着たけど似合わない
朝からの電話花見のことばかり

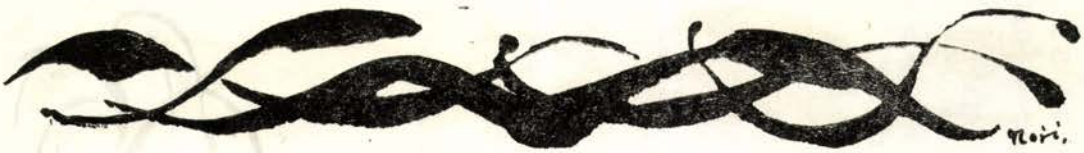
青森県　木村凉人

ピースくわえて春斗の別に居る
建国の日も無くニホンだニッポンだ
借りに来た動作玄関から違い
降ればハネ照ればホコリの町に慣れ

世界の聖地詣でと欧洲の旅へ

芦屋市　唐崎専翁

年がさせ鮴で押される夢の旅



年輪のこころ無を追うようになり
倉吉市　奥谷弘朗

小役人あせらず休まず仕事せず
折角の花見を流した検査院
兵庫県　遠山可住

サロンパスとりかえさして寝給いぬ
親の死へ泣き泣きバーマへ走るなり
警官よ貧しいものをなぜ叱る
兵庫県　河原みのる

玉地山ささ山荘にて

論吉にはすまん見くだす本能が
ライシャワー刺傷

あやまると云わず遺憾の意を表し
し尿処理汚職なるほどきたならし
三、二七誰れか殺されそうな雪
いい気味と口には出さぬ見舞客
姫路市　隠岐不酔

親にさえ言へぬ浪人のその気持
停年の今日は淋しい認印をつく
大阪市　田中敏行

末席であっても会議休まれず

石切さんたのんまっせと手術受け
廻診にお守りそっとかくしとき
鳥取県　清水一保

観光もかねて古仏に手を合せ
出雲市　中川晃男

信号を守った方がはねられる
手も足もかくれる服で入学す
春風に押されて歩くランドセル
浪人の俺には癪な花吹雪
若い肩揃えて春の風を切る
恋をせぬ女がおごる喫茶代
菜色で由緒ある寺持ちこたえ
松江市　柳楽鶴丸

一大事妻の誕生日を忘れ
君原の栄冠たたへる花吹雪
京都市　都倉求女

幼稚園豆が掃き出されるように子等
白鳥も水の温んだ泳ぎ方
どの腹もつき出て名士座談会
家計簿の算盤ポソポソポソと済み
兵庫県　大江秋月

親戚の慶弔家計くるわせる
昼飯もぬいてパチンコ屋ですられ
大阪府　松田半月

育児書を棚に子供をほっておき
孫の目は甘いとこよう知っている
今治市　越智一水

母在りて十薬の花まだ咲かせ
卒業の娘が食堂を春にする
風邪の妓へ電話しつこくかかりくる
瑞穂の国田んぼなくする政治をし
竹原市　山内静水

だれも手をださぬお菓子の蠅を追い
長女もう酒の匂いを不潔がり
加賀市　細呂木魯木

一つ違いでも姉顔してのおせっかい
晩酌で多弁な父を持て余し
新居浜市　小林孝正

逆境へ妻の信仰笑われず
母子して生きる金とはスリ知らず
聖書読むあいまに娘恋をする
景色だけほめて女の寄り添わず

川傍柳初篇研究（一五）

丸十府　高須啞三味
岡田甫　前田喜代人
○　岡崎重義
川端柳風　清博美
藤井和雄

168　**手前でくふのだと瓜を安く付ケ**　一甫

岡崎＝八百屋が、商売ものなら、それだけ儲けるからよいが、自家で食う分だからと、真桑瓜を安く仕入れる、という句。

清＝この場合、「瓜」を「真桑瓜」と限定しなくてもよいと思う。

高須＝商売人でも、商売ものと自家用品とは、別に仕入れることもあろう。判りやすい、平凡な句。

有りったけ買ってハンパをまけさせるなんてもある。

前田＝この「付ケ」は「仕入れる」のでなく「値段を付けた」ことである。

丸＝実は子供にせがまれて買うのだろうが、そういってはふっかけられるので、自分が食うのだといって、値切った値段を付けたのであろう。

岡田＝果物の種類の少なかった江戸時代には、夏則の瓜はよく食べられた。「よそへ土産にするのではない、内で食べるのだから、安くしておけよ」と、値切ったわけであろう。

169　**座頭のむねをたちわると金が出る**　一甫

岡崎＝「座頭」は、剃髪して琵琶、琴、あんまなどを業とした盲人の総称だが、金貸しを内職として、一般に内福でありながら、その金貸しぶりは高利で、催促が執拗で、仮借しなかったので、世間から憎まれていた。そんな座頭だから、胸の中は人間並みの五臓六腑のかわりに、金が詰まっているだろう、との句意である。

清＝「座頭」に対する人々の評判は、いちじるしく悪かった。そのために、こんな句が出来たのであろう。

高須＝胸を立ち割って見たら、血なんか一滴も出ないで、金がざくざくと出るだろうと、座頭の無血ぶりを、痛烈に諷刺したつもりだろうが、実にうまくない句。

丸＝胸中ただ「金」の一念のみの座頭を評して、寸鉄人を刺すていの皮肉。

岡田＝座頭は金をため、千両（実はもう少し安いが、俗にそういった）の官金を納めると、検校の位をさずけられ、紫衣が着られた。そのため金貸しをするもの多く、それを「座頭金」といった。それが悪どく苛酷だったが、不具者なのと、官金ということで、黙許の状態だったのである。

170　**のどぶへをねらいそふなへ巷分遣り**　鼠弓

岡崎＝のど笛に食らいつきそうな――化け猫みたいな、というのは遣手婆である。だいたい女郎上がりの老女で、役目がら憎しい人相とされていた。165（10才九）参照。三会目の登楼に、いまいましいにしろ一分の花をやったのは、それがクルワのシキタリだからである。

清＝一分遣らずば剝ぎそうなばばあなり（タル一七）と、その人相あくまでも悪く遊客の印象もよほど強かったらしい。とにかく遣手をほめた句がない。

藤井＝礎解通り、いまいましさと、一分でその面を張ってやりたい意味が、十分にとれる。

高須＝ノドモトへとびつきそうな面も、「一分」で、とにかく柔和になる（165）と、表裏に遣手の句とは、恐れ入った。

丸＝どうも〳〵。

岡田＝同。

171　**すばしりの魚でん桟敷への馳走**　桝水

岡崎＝「すばしり」はボラの稚魚で、六月十五日（日枝神社の山王祭の日）まで禁漁であった。江戸では、その日芝浦で初網おろしが行なわれ、翌十六日から一般に売り出された、というが、

すばしりハ神輿の跡を追って行き　（タル七26）

すばしりを桟敷で見たがはじめ也　（タル一〇6）

などの句があるように、山王祭当日（十五日）にも、多少市中へ出たらしい。で、その「すばしりの魚田」とは、魚を串にさし、味噌を塗って焼いた田楽料理で、山王祭の神輿渡御を拝むのに通路に、当たる家家では、二階から見下すことは出来ないので、店先へ桟敷をかけ、その手摺りに緋毛センをかけ、親類縁者を招いて見物した。その招待客に「すばしりの魚田」を御馳走した、という句であるが、真に「初物七十五日」の馳走であったわけ。

高須＝「すばしり」は「淵走」で、もっと小さい時は「おぼこ」または「くちめ」といわれ、大きくなって「ぼら」になるので「出世魚」と呼ばれている。

象の後から珍しく売って来る
すばしりを添えて金屏風を返し
（タル一二18）

等は、山王祭とすばしりとを詠んだ句であることというまでもない。

丸＝「淵走」とは、川と海の潮境を往来する頃を賞美しての名と言い、江戸では六月十五日からの呼称で、十四日までは「いな」と言ったと「物類称呼」に見える。

岡田＝賛。

172　**不器用なやつが柏の葉へくるみ**　葉十

岡崎＝「柏の葉」は清元の定紋。清元をいくら習っても上達しない不器用な奴は、稽古本もゾンザイに扱っている不心得者でもあり、また袖の下を贈って、名義だけでも免許を貰おうとするのだろうか？

清＝実際に奴餅を作っているのだろう。

藤井＝その通り、家中で柏餅を作っている句で、一番不器用なのが、ただ柏の葉へ餅を包む役を、させられているのである。

川端＝初節句に、父親が不器用な手つきで手伝っている句と思う。

高須＝飯や餅を、柏の葉へ包むなんてことを考え出したのは、不器用な奴だろう、という句だと思っていたが？

前田＝「くるむ」が問題。（1）物を包む（2）人をあざむく、即ちまるめ込む等の意があるが、1では平凡で面白くない。私はやはり2の説で、礎稿をとる。

丸＝五月節句の柏餅づくり。不器用なのは、餅を柏の葉へ包み、器用なのは茅巻きを作る、という句である。

岡田＝藤井説でよい。シンコ餅にアンを包むのはむずかしいから、不器用な奴は、それを柏の葉に包む、簡単な役にまわされる、というだけの句。

173　**藁をうつ音で生酔目を覚し**　亀遊

岡崎＝生酔の一般的な生態を詠んだとしたら「ワラ打つ音」と結びつかぬ。そこで「徒然草」の吉田兼好が、摂州阿倍野に閑居したとき、弟子の寂閑と童の命松丸に、毎夜ワラ細工をさせたということから、この生酔を兼好と解してみたが……？

藤井＝岡崎氏の博学には敬服するが、どうも、吉田兼好とはとれぬ。

川端＝「生酔」は二日酔ではないか？前出52朝顔を親仁見ているには困り（3ウ九）と同意句と思う。

高須＝その句は、朝帰りの息子と、治定ずみだが「ワラを打つ音」は、父親とは思えぬ。誰がワラを打っているのであろう。

前田＝この句、農村の祭で、祭酒に酔った翌朝の生態であろう。

丸＝酔っぱらって辻番小屋に保護されたか、或いは自ら転がりこんだ者が、酔って寝ていて、番太郎がワラジを作るためにワラを打つ、その音で目が覚めた、という句である。辻番小屋とは、町の辻々にあった番小屋で「ばんた」「番太郎」と呼ばれる番人（多くは廃人同様の梅毒患者とか老人）がいて、自警または回覧板の役目をした。番小屋では、駄菓子や自作のワラジ（また冬は焼芋、夏は金魚）などを売った。

辻番は二百がワラにうずめられ
（タル一〇34）
辻番へあくる日ヘドの礼に行き
（タル二27）

岡田＝丸先生説正解。昔の辻番所は、酔っぱらいの留置センターにも利用された。

岡崎＝辻番小屋に気づかなかったのは失敗。礎稿のコジツケを恥ず。

174　**鋲打の供明店を二軒かり**　魚交

岡崎＝「鋲打ち」とは、青漆、押縁、黒銅具および鋲を打つ（守貞漫稿）た女駕の一種で、大家の奥方か、大奥女中の乗物。そこで、そのお供が空家を二軒借りた、ということは、どういうことか？

藤井＝駕カキは二人だから、二人で隣同士に長家を借りて住み、奥女中が外出して来て臨時密会場所として、一軒を提供する時は、二人一緒に住み、用が済めば二人で御殿へ送り届け、また二人別々に住む、のではなかろうか？

高須＝いくら江戸時代でも、そんなことは考えられない。「鋲打ちの供」ともなれば、町カゴカキでもあるまい。何か他に意味があろう。

前田＝「二軒借り」が問題だが、この二軒に深い意味はなく、深川八幡に隣合って二軒の茶屋があり、二軒茶屋と呼ばれて、密会場所に使われていたそれで、明店の密会を、それに利かして二軒と言った、のではあるまいか？

丸＝いろいろ説が出たが、小生は字句そのままに解している。即ち代参でも花見遊山でもよい、目的地の近く、便宜な所に休憩所を設営するのに、供の者が多いので、一軒では足りず、空家を二軒借りた、というだけのことであるが、それだけで奥女中などの物々しい行列が目に浮かぼう。

岡田＝大奥の女中には、武家の娘でないと入れなかった。それで、大名屋敷か高禄の武家屋敷あたりに奉公に入った娘が、殿様の手がついて一躍立身。里帰りにも鋲打ちカゴで、お供も沢山で、明いている長屋の二軒をとりあえず借りて、お供衆の休憩所に使用したのである。即ち、その娘の実家は貧しく、手狭なのである。そういう家から出た娘なのだが、キリョウよしが幸いして、お殿様の目についたのであろう。

（11オ）

175　**人立の中からしゃぼんふいととび**　鼠弓

清＝石鹸玉を売り歩く石鹸売りという大道商人があった。石鹸玉とは、石鹸を水に溶かし、細い管で吹いて玉をつくる、子供の遊びで、その石鹸売りを囲んだ多勢の人の中から、石鹸玉が不意にとんだという句である。――多勢人が集まっているが、何だろうと思った矢先に、シャボン玉が飛び出した、という意外性を詠んだもの。なお蛇足ながら「シャボン」はスペイン語あるいはポルトガル語から転化したものといわれている。

藤井＝難解の句の多い中から、こういう

平明な句を見ると、ホッとする。「シャボン玉ふいにとび」そのままの気がする。無心なシャボン玉、有心の作者。

高須＝それほど平明な句とは思えないが「人垣の中から、フイとシャボン玉が飛んだ」というのが、見つけどころとして、面白く思われる。

因みに「シャボン」は、スペイン語、フランス語（言海）ポルトガル語（広辞苑）と、数説あるが、みな同じような発音をしているヨーロッパ語だから、それの日本渡来がハッキリしないことには、何とも言えない。――後考。

丸＝賛。

岡田＝当時シャボン玉は珍しく、子供どころか大人までが好奇の目を見張って、立ち止り、それを囲んで眺めていたことが、この句でよくわかる。

176　**わるい持遊び赤絵を子に預**ク　五　鳥

清＝「赤絵」には、二通りある。一つは赤擢絵といって、江戸時代疱瘡除けに、赤一色に刷られた縁起もの。他の一つは、めくり骨牌の赤札だが、この句ではめくり骨牌の赤札であろう。これは、誰が見たっていいおもちゃではない。「預け」は「持たせ」と解せばいいであろう。例句を一つ。

邪魔をする子には赤絵をやっておき　（タル三）

藤井＝もちろんカルタ。今ならさしづめ坊主の二十か。この子の母親は、今から苦労の種というところ。

川端＝礎稿賛。「もちあそび」は「持って遊び」の訛語で「玩具」のこと。

高須＝「赤絵」が骨牌であることに間違いないが、幼児と赤の取り合わせも、見逃がしてはいけない。藤井説通り、教育上には困りもの。ボクの家の孫たちは、積木をガラガラとかきまわして「ポン」だの「チイ」だのと言って、苦笑させられる。

前田＝諸説に賛。但し「預け」は、単に「持たせ」だけでなく、勝負の最中に赤札を、そばの子にそっと渡して、インチキをするのであろう。それでないと「悪い」が生きない。

岡崎＝子供のシッケに「悪い持遊び」というわけだろうから、礎稿でよい。

丸＝賛。

岡田＝「遊び」だから、インチキとまで考える必要はなかろう。

177　**樽底になったと下戸ハ腕を入**　三　朝

清＝飲んべえの飲みっぷりに、驚きあきれている下戸を詠んだ句。なみなみと入っていた酒樽も、いつの間にか飲みつくされて、もう「樽底」になってしまった。「よく飲んだものだ」と、下戸はあきれ顔。

藤井＝小生には不解句であった。

前田＝礎稿に賛。下戸ならずとも、上戸でも腕を入れる。

丸＝正月の餅を貯えるのに、カビを生やさないように、当時はあいた酒樽を利用した。下戸は餅好き、その酒樽の餅もたちまち食べて、残り少なくなってしまった。そこで「あれもう樽底になってしまった」といかにもまだ食べ足りぬ思いで、その樽底の餅を取り出す下戸。「樽底になった」と上戸の言葉を、下戸が使ったのがミソ。

酒樽へ下戸は四角に口をつけ　（タル六32）

酒樽へ四角に穴を下戸はあけ　（タル一二20）

岡田＝酒がなくなったからといって、樽の中へ手を入れるなんてことは、絶対にない。丸先生の御説正解。敬服。

清＝酒樽が餅の入れものになるとは、少しも知りませんでした。丸先生に脱帽。

高須＝ボクは下戸だが、この解には驚いた。従って、例句もわからぬ句であった。

178　**ふり袖を四ッ目殺しにして仕廻ひ**　眠　孤

清＝「四ッ目殺し」は、四ッ目屋の淫薬「長命丸」を用いて、女性を悩殺することだが、さて「ふり袖」には「踊り子」「振袖新造」「おぼこ娘」とあり、ここでは、その「振袖新造」を買った老人客が、ひそかに「長命丸」を使って、彼女を征服した、という句と見たい。薬は違うが「泣かずんば泣かして見しょう女悦丸」というのが、老人の心理ではなかろうか。

藤井＝老人客と限定せず、娘をおかす男性の悪趣味と解し、泣いていやがる娘を、薬の効能で改めて泣かせてしまった、では如何？　サジスチックな男の本性。栄ヨウのうわぬりと見たい。

川端＝踊り子を淫薬で征服した句と、簡単に解していた。

高須＝この時代「振袖」というと「踊り子」と、大体きまっていたのではないか。それで、解は礎稿プラス川端説で、相手は「お留守居」の中老人と見たいが、それでは余り常識的すぎるか？

前田＝「振袖」は振袖新造ととる。老人客と限定しなくてもよいが、新造と老人客との組合わせは、常識である。

丸＝「ふり袖」はおぼこ娘。「四ッ目殺し」は、川柳辞典でも礎稿の如く解しているが、これは囲碁の用語で、四方から相手の石を取り囲んで、それを殺す、基本の形を言うので、句意は大事な娘を「四ッ目殺し」のように、周囲から取り囲んで、外との交際もさせずに養い育て、春機発動の頃になって労咳を病ませ、とうとう殺してしまった、というので、後出の「193深窓に十有九年やしなわれ」と、同意句である。

岡田＝小生は囲碁をやらぬので、この用語を知らず、この丸先生の解に敬服。

清＝礎稿は自信をもって書いたのだが、丸先生の説はショックであった。

高須＝これは驚き。予想外もいいところであった——。

179 **大日如来の尻を水くミつめり**　泉河

清＝「大日如来」は、真言密教の本尊。但し、武江年表によると、大伝馬町佐久間家の下女「於竹」が、この大日如来の化身であった、という俗説が記されていて、この俗説を扱った句はかなり多い。句意は明瞭で、水汲みがお竹の尻をつめったが、お竹は大日如来の化身だから、それは大日如来の尻をつめったことになるというわけ。例句を一つ。

お竹殿どうだと凡夫尻をぶち　（タル一五）

川端＝贊。お竹を大日如来の化身とも知らず、その尻をつめったのは、同じ水汲みに来た女中か？　例句には、対照にしたのが多いが……。

高須＝礎稿よし。川端氏は「同じ水汲みに来た女中か」と言っているが、その時代の水汲みは、相当の労働だったので、男の仕事であった。だから、その水汲みに来た男が、何か他の仕事をしていたお竹の尻をつめったので、男女のタツムレでなくては面白くない。

後生だと口説かれお竹こまる也　（末　三）

お竹どん拝むからとは口説きあて　（タル三六）

させ相でさせない下女はお竹なり　（末　二）

岡崎＝その通り、お竹をただの女中だと思って、水汲み男がちょっかいを出した、おかしみの句。

丸＝諸説に尽く。

岡田＝同。

180 **どっどっと笑った跡へ猿が来る**　一甫

清＝正月の句。「どっどっと笑った」は万才。その後へ猿回しが来た、という句。面白さおかしさを重ねて、正月風景を出したもの。——なお、猿回しは猿曳きともいわれ、大名屋敷では、馬の疫を除くというので厩で、舞わしたと言われる。

藤井＝小生は、猿を猿田彦と解して、山王祭の句と思っていた。

高須＝万才の後へ猿回しとは、清氏よく解したり、異議なし。

岡田＝「猿が来る」は、大道の人垣へ、猿が金集めに回って来たものと解していたが、礎稿の「正月風景」ではっきりした。

丸＝贊。

岡田＝贊。正月には欠くべからざるものだった万才も、そして猿回しも、もう都会地では、ほとんど見られなくなってしまった。今の子供達には、もうこういう正月風景は理解できまい。

181 **かんざしでかくのがそうだと仲人いい**　一甫

清＝見合いの句。当時の見合いには、御講や芝居などがよく利用されたが、現代のように若い男女が憶面もなく見合うのと違って、当時は遠くから眺め合うだけの見合いが多かったのである。

藤井＝昔の見合い風景。娘は知らずにいるが、遠くから「あれがそうだ」と仲人にささやかれる。

高須＝「かんざしで掻く」というしぐさが、何か伝法な感じで、娘の気がしないのだが、仲人がいるのだから、見合いよりほか解しようがない。

岡崎＝贊。しかし、高須説の如く、これは恐らく「娘」の見合いではなく、世話する人が、芝居か何かで、男に「あれが、その女だ」と、下見させているのであろう。

丸＝見合い説贊。高須説の疑問は

かんざしでかきやと山出し叱られる　（タル一一）

かんざしは痒い所へすぐにさし　（タル二）

のような句もあるから、女性の普通の所作と見て、しいて「伝法な感じ」にこだわる必要はないと思う。

岡田＝昔の見合いは、水茶屋と芝居が最も多く使用された。この句は、芝居の桟敷での見合いであろう。大体近くの桟敷を予約しておき、親・姉妹などを交じえて芝居見物に出かけ、双方それとなくチラリチラリと見る。かんざしで頭をかくのは、女性は上気すると頭が痒くなり、それで行なう場合が多い。

かんざしでかきかき車いいこめる　（タル二一）

という句があるが、女をからかった車力を言いこめる、女の興奮状態を、この句でもかんざしで表現している。

なお、礎稿の「お講」というのは、同宗派の寄り合いでこれは見合いではなく、もっぱら聟えらび・嫁えらびの場である。

バック・ミラー

本研究に関する御発言何でもどしどしお寄せ下さい。＝係

150 **貳尺長ひで女房とみへぬ也**　冨士野鞍馬　葉十

この句、みなさんは振袖説でしたが、これは、明和の頃、両国で評判の大女の見世物があって、その大女は身長七尺三寸で、享主という男は五尺一寸であった。それで「二尺長い」で「女房と見えぬ」と言ったのであります。（外骨説）

高須＝そういう事実があったとすれば、もちろんそれが正解でしょう。それで、前田さんも、丸先生も釈然とされたと思います。御高教を感謝いたします。

色紙短冊
書画用品
大阪式びし筆
丹青堂
電話 七三一・七三三

妻を語る（三）

麻生路郎

麻生路乃女史と長女純子・野口雨情氏（詩人）
—大正十二年阪神塩尾時代—

○

前号に発表した虔乃のカット写真が、前々号のものと、同じ写真だったので、読者の方から、もっと違った写真を見せて欲しいという注文があった。編集部の手落ちのように思われたのであろう。

虔乃はどうしたわけか、古い写真を一枚も持っていない。あれば私が保存しているぐらいのものだが、私のアルバムにあるものと言えば鳴尾時代以後のもので、比較的後年のものである。幼時のものや、女学生時代のものがあるといいのだが一枚もない、結婚の記念写真すら撮っていない。世の常の娘さんなら、自分の花嫁姿を記念にというところだが、写真を撮ろうという話さえも出なかった。別に写真ぎらいというわけでもなかったろうが、無関心というか、物臭さなのか、そこのところはハッキリしないが、記念写真は撮らなかった。そんなところにも、彼の女らしい個性が出ているように思う。

昭和三十年に、虔乃の句集「福寿草」が刊行された時にも、適当な写真がなかったので、その前年に刊行された私の句集「旅人の」出版記念祝賀会の時に、私と共にその席上で撮ったものと、大正十二年（鳴尾時代）に野口雨情氏が拙宅へ来られた時に黒木英豆君が撮ってくれた写真から虔乃と長女だけを抜いて掲載したのであった。本号のカット写真は縦長の関係から、雨情氏も入れておいた。大たいこの写真の原画には、向って左側に、樹木を隔てて、私と長男のロンドンもいるのだが、それではカットにならないので、私とロンドンとは省いたのである。虔乃は自発的に写真を撮らないので、一人写しの写真も稀れである。そんなこんなで、カット写真も二度の勤めをさせたのである。

○

よその奥さんたちは、宿六のポケットを探って、女性の名刺があったり、広告マッチがあると、すぐに根掘り葉掘り訊問されるそうだが、虔乃は幾ら名刺が這入っていようが、あっちこっちのマッチでポケットをふくらませていようが、そんなものには眼もくれない。キモが太いというのか、その方面の神経が少し足りないのか。彼の女のいうしようがない哲学没法子（メーファーツー）の実現に徹しているのであろうか。では嫉妬心のカケラも持ち合わさないのかと思うと、

お帰りにならず刺身も色変わる

という句を創っている。この句には、妻の折角の心ずくしも、夫の帰宅が遅いので変色して、「もったいないわ」という経済観念から詠んでいるのではサラサラないし、料理の変色をなげいて報告しているのでもない。句意は嫉妬の炎を婉曲に燃やしたものと解すべきである。

若いサラリーマンを夫に持つ時代の妻が夫の帰宅が一刻も早くありたいという共通の悩みは、この句に巧みに表現されていると見ていい。しかし句の底に潜んでいる嫉妬心を見逃してはこの句の価値は半減してしまう。

ある夏の朝だった。出勤前の食膳に、掻き氷を載せただけで何一つ運んで来ないので、

「飯は？」と言ったら、

「これで」と氷を指さしたから、

「オレは出勤するんだぜ。朝ッぱらから氷を喰べて働けるか」

「暑いやろ…思って」と、さしうつむいた。

「オレは今後、よそで飯を食うことにする。」

と宣言した時、虔乃のアタマには閃めくものがあった。それは私が給仕なしには食事をしないし、お酌なしには盃を手にしないことを知っていたからである。

そして、彼の女の膝にパラリと冷たいものの落ちたのを見て、私もそれ以上を言わず、あわてて出勤してしまった。今でも暑がり屋で有名で、首のあたり一面にアセモを出し、家では殆んど裸に等しい薄着をしているし、ルームクーラーをしてやる資格のない夫は彼の女が毎日のように昼日中をデパートに進駐して、日舞を鑑賞し、午後五時ごろにご帰館あそばすのを寛容するより手がないのである。若妻の頃すでに、そんな暑がり屋であったらしい。自分が暑いので、夫も暑いだろうと、食事の代りに氷を喰べさせようとして、一トもんちゃくが起きたのであった。今でも、これを延長したような自分本位の親切さは持ち合せている。

○

虔乃は若い頃から喰べることに非常な興味を持っているらしい。国か人一倍強健なのも原因しているのであろう。女学生仕込みの料理だけではない。一緒に飲みに行っても、味つけまで覚えて来て、それを再現して呉れる点は一トかどの料理人だ。しかし、カロリーがどうだとか、ビタミンがどうだとか言って、それを適当に摂取させるらしいが、種類が多くなると勢い量が

多くなるので、それにはヘキエキする。料理の名にしても、鯛ちりとか、わけぎのヌタとかいう従来の呼び名だと喰べる気がするが、これにはCが多いから是非喰べなさいとか、何とか薬でも喰べさされるような説明を聞かされると食欲が一度にケシ飛んでしまうのである。私が酒ばかり飲んで、物を喰べないのは遠い昔からのことだ。私の酒は気分で飲むのだが葭乃の酒は味がうまいから飲むんだと言っている。

○

葭乃は無口のせいもあるが、若い奥さんが、よくやるように、他人に宿六ののろけを言ったりしなかった。私が「商業之大日本」の主幹をしていたころに、葭乃は次のような歌を詠んだ。

ヘルメット冠れる君の年少し
老けて見ゆるも頼もしきかな

これが彼の女の紙の上でののろけだと言ってもいいだろう。クリスチャンの彼の女は鳴かぬ蟬のような存在だった。

○

母が死に、祖母が亡くなってからの葭乃は父との二人暮らしだった。兄弟が無かったので遊び友達も無かった。いつもおかたさんなんかを並べて一人で遊んでいたそうだ。

結婚して自分にこどもが出来るまでは、こどもに接する機会すらなかったので、子どもは嫌いだったそうだ。それが四男五女の母となったのであるから、容易ならぬ労働であった。こども等が次ぎ次ぎに病気すると、一ト月でも着たきり雀で看病を続けていたが愚痴一つ言わなかった。彼の女が少し猫背となったのも看護の時の添乳の姿勢が原因だと言えよう。私が川柳の旅から帰ると、こどもが病気していて、家の中が暗くされ酸素吸入をさせているのにブッかったものだ。葭乃はこどもに対しては放任主義だった。自分が父によって自由に育てられたので、こどもたちへも自由の道を歩ませたのであった。大抵のこどもが教会の門をくぐっていたことを思うと、宗教による人づくりは彼の女の理想だったのであろう。こどもの面倒は見て来たが、孫の世話まではご免だと言っているのを思うと、これ以上を彼の女に求めないことにしたい。曽て、

浴槽へずらり立ったは皆わが子

という句を詠んでいる。

○

葭乃は金銭に執着を持たない。浪費癖と言うのでもないが、どっちかと言えばありずかいの方である。なければないで平気だ。その昔、電車に乗ったが、財布に金がなかったので、四ッ橋で市電から降ろされ、車掌の集合所へ連れて行かれた。幸い車掌の中に川柳家が居て、証明してくれたので、キップを借りて帰ったことがあった。市場へ出かけても、エエ海老があったと予算外の買いものをすることはあるが、しゃれの方へはカネを捨てない。

スフにしてあとは梯子で消える金

という句がそれを証明している。芝居へ行っても帰りに料理屋へ寄らぬと、行った気がしないというのである。それも小さいこどもを荷物のように横抱きにしてのれんをくぐったものだ。これも見ようによっては私に打ってつけのペターハーフだったのである。

○

出そう出そうと思っても容易に出せないのが句集である。ところが句集を刊行したいとも、刊行しようとも思わないし、そのため金の心配もせずに出たのが葭乃の句集「福寿草」である。

私の句集「旅人」が出た以上、順序として奥さんの句集を出さなければ私達門下の句集が出せないと、フォアボールで押し出されたように刊行されたものだ。私はこの句集の序の中で、次のようなことを書いている。

……葭乃の性格は内剛外柔である。だから誰にも一応よい奥さんとして認識されている。従って敵というものがない。時にはキリスト教の殉教者のように、彼の女の持ち味だと思われる内剛すら、教養の力で抑圧しているようである。このあらわれが、私に対しては「福寿草松に従いそろかしこ」になったのかも知れない。しかし、民主主義がどうの折うのとも言わないし、男女同権も振り廻わさない。ただ牡蠣の如く黙りこくって我が道を行く彼の女はそれで充分に幸福を感じているらしい。一見東洋的な諦観的ななげやり的な態度にも見えるが、それは彼の女の無口のせいであって、彼の女自身の創造する神様への忠実な奉仕者であることは、彼の女の句に親しく接したら氷解するであろう。（中略）彼の女の生活は私を防波堤として、港の中の静的な日日に安住し切っていて、社会に対する抗議とか公憤とか言ったものを持ち合わさない。従って句の上に、そうした厳びしさ、激しさと言うものはない。その点、すべてに於て私と対蹠的である。私が彼の女と、私の人生の大半を共に歩むことの出来る根がそこにあるのかも知れない（以下略）

この句集の句の一部をご覧に入れよう。

ちょぼちょぼちょぼちょぼと咲く女郎花
飲んで欲しやめても欲しい酒をつぎ
一生に自分の部屋というが欲し
帆立貝人手貝など子に教え
改札を出るも先輩者たらんとす
行末はハムとなる声のどかにて
ワンステップのテンポで茶碗洗うかな
嘘嘘嘘木魚の音もそうひびく
ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

○

この外、一号さんの二号生活だと言われた疎開地生活のことや、花卉栽培のこと、新聞を読まないこと、英語教授のこと、日本舞踊のことなどいくらでも話題はあるが一応これで打ち切ることにする。

句評 ディスカッション

――四四三号川柳塔より――

出席者

早川清生
西川晃
林夢虹
橘高薫風子
河野春三

芸者一代私生児だけ遺し　好郎

晃＝恐縮だが、句評にはいる前にちょっと弁明させておいてほしい。実は今度の句評にとりあげられた作品が、残念なことに全部私には佳作と思えないのだ。理由は、三月号の川柳塔の大江秋月氏の作品「巡回の線路に人形落ちていた」のような巧まない素直さがなくて、川柳をつくるためにつくった句というふうに私には受取られることである。従ってこれからの私の句評も辛辣なものになるだろうと思うが、これは決して私が批評と非難を混同しているわけではなく―或いは偏見かも知れぬが―自分の気持をいつわらず発表するだけで、本当は思いきり称讃出来るような句評がしたいと心から願っているのだということを断っておきたい。

さて、この句、新派悲劇というところだろうか。諷刺の対象になっている芸者という存在が、現代では一握りの人間を除いてすでに過去のものであり、現実の生活に無縁であるがために、この句を観るものの胸をうたないで、つくりごとのそらぞらしさを感じさせるのではなかろうか。然し、口誦する句として、ことばはよく吟味されていると思う。

げいしゃいちだい　しせいじだけ
のこし

同音の繰返しと音の強弱が巧みに配置されていると思う。

夢虹＝芸者一代というからには名の売れた名妓なのであろう。ある時には、大臣、貴族をも袖にしたかも知れぬ。年老いてもその芸と権勢は少しも衰えず、政界のもめ事にも一役買った事もあるかも知れぬ。

その芸者が死んだ。生前の華やかな生活に似合わず、いや、華やかな生活であったが故にか、残したものとてもなく、ただ若き日の愛人の忘れ形見だけが残されていた。今はただ数少ない知己の人の脳裏に時折り浮かぶだけとなってしまった。人間の存在の虚しさを感じさせる句だ。私がその遺児を女と見、また母に似た一生を送ると想像するのは少し想像過多だろうか。テーマも古く戦前の郷愁の句といえるかも知れない。しかし、この句は戦後派の私としては作品の中へ招き入れる魅力を充分にそなえている。

薫風子＝辛辣な句だ。人生の裏街道を歩み通した女のはかなさを「私生児だけ遺し」としぼりつめたことは、或る程度句を深くした。芸者一代と上句に据え、私生児だけ残しと従わせた七、九の破調二節の構成は歯切れがよく、辛辣な内容にふさわしく効果的だが、内容の概念的なことが、この句の根本的な欠陥になっているようだ。

清生＝簡潔な表現がよい。大臣や将軍を手玉にとった傾国の美妓も、死んでしまえば残ったものは私生児だけ、もちろん、この句からは一途の愛に生きた芸者か、金に身を売った芸者かはわからないが、物語性をもたせた構成は作者の凡手でないことを思わせる。芸者に限らず人生とはこのようにはかないものではないかと考えさせる句だ。私など死んでも遺すべき何物もない。

春三＝晃君の発言と薫風子君のいうところとを比較してみる時、結果は、晃君のいう意味は薫風子君のいう概念的なものというのに含まれていると思う。併し、この句が、やはり一つの諷刺というか批判精神というものが皆無とはいえない。何々一代という新派悲劇が人生には多多ある訳だが、この句を見て直ちに新派悲劇ということや、芸者というものの存在が、私たちには遠いものの存在ではあるが…、だからといって芸者そのものを扱うことは決していけないことではないと思う。むしろ、この作者の句として、とり上げてよい句であると思う。

夢虹＝晃さんの発言の、芸者というものは現代の私たちには無縁のものだが、その素材を捉えて、自分の問題を表現しようとすることは否定すべきでないと思う。

晃＝過去のものを表現するのを決して悪いというのではない。それが、現実の生活の中に生きてどのような密接な関係があるかということを私は問題としているのである。諷刺の作品としては先にいったように、現実の生々しい対象を選ぶべきだと思う。

春三＝素材と主題ということはやや異る。素材は芸者であるが、この作品の主題は作者にある。その意味で如何なる素材であっても、そこに人間としての発見もあり抵抗も、主観もあることは大切なことであると思う。

ニュースとは不快指数へつっかかる　緑之助

傷口にふれるニュースはふせておき　庸佑

薫風子＝終戦後は世情人心が荒廃し、ほほえましいニュースは少なく、痛ましく悲しい出来事が数多いのでこういう句が生まれてくる。

世の中が安定し始めても、経済成長に由来する交通事故やら、道徳教育の欠陥からの青少年の犯罪など、別な方面に暗いニュースが生まれて来て、不快指数は尽きな

い。前者の句の、「ニュースとは」とニュースを不快指数の方面のみに断定してしまったことは誇張が強すぎはしないか。「ニュースまた」位にしておいてはどうだろうか。それでは曲が無さすぎるか。又、後者の句は作者の暖い思いやりの心情がうかがわれて好感が持てるが、句境の浅いことは如何ともし難い。それ故、題詠ではなかろうかとの感じを抱かせた。

清生＝同じニュースという言葉もこの場合は互いに異なる意味を持つ。前句は勿論、報道という意味、後句は、知らせ或は風説などの意であろう。ともに常識的な内容のもので、苦心の無さが、残念であるが前句の前提としてニュースとは暗いもの、或は陰険な何かを内蔵しているかも知れない警戒を要するものとして身構えなければならない現代人のかなしさを痛感する。後句については作品面における川柳人の相かわらぬ善良さは今どき珍重に値するのではないかと思った。

夢虹＝前の句について、去年あたりから不快指数という言葉が使われ出したが、もうこの言葉は私たちのものとなってしまったようだ。

私はこの句は失敗作だと思う。何故ならば、上五「ニュースとは」というからには、このニュースはある特定のニュースを指しているのではなくニュース一般を指していると思われる。とすると中には不快指数をやわらげるニュースもある筈である。不快指数が増すという普遍的な表現に対して、それが事実でないところにこの句の欠点があると思う。またこの句は具象化されていない。総ての作品が具象化されていなければいけないというのではないが、この作品からはどの様なニュースが作者の不快指数へつっかかったのか、鑑賞者には分からない。

後の句について、最近、殺人鬼西口彰の映画化が阻止されたということがあったが、報道、言論の自由を叫ぶあまり、個人のプライバシーまでを犯すことが、ままあるようだ。この句のような事が実際にあるかどうかは別として心温まる句である。報道関係にたずさわる人々に対する私たちの願いとしてこの句をみたいと思います。同じニュースをテーマにした作品であるが、後の句に淡々たる叙法のうちに作者の心がにじみ出ていて私はこの句に軍配を上げたいと思います。

晃＝殺人鬼西口彰といわれたのでどきりとした。残念だが夢虹さんの説には同調し切れない。前の句の概念的だということには異論はないが……。後の句は平凡なことを平凡に安易に叙しただけで、特別取り上げていうことはないと思う。後の句に較べると前の句の方が句の調子からして作者の不快感を読者に伝えようとする意気込みがよく感じられる。併し、これも水準以上に抜んでた作品とは考えられない。

春三＝僕は大体晃説に賛成。後の句は所謂川柳的な句で、殊に下五の「ふせておき」が常套的な感じがする。その点前の句の方が、「つっかかる」という下五がよい。唯、薫風子、夢虹説の如く、「ニュースとは」の上五に概念的な限定がある。もう一応作者が再考すればよい批判句になったと思う。今回は比較的批判性のあるものをとり上げて見た、がその意味では、どの作品もやや底が浅いということは僕も感じ、晃君の不満もそこに根ざしているのだろう。

声帯模写自分の声を見失ない

春雄

清生＝いくら声帯模写をやっても自分の自然な声というものはなくならないだろうが、舞台の中やブラウン管の上の演技者がいろいろ声を使いわけると、一体あいつの本当の声はどんなんだろうと思うことはある。教育の本質を忘れた現代の学校、ひいては自分の声だけでは通用しない社会生活のある面などを思わせておもしろい句だ。

晃＝模倣や受売りばかりで個性のないはなしに声帯模写という比喩はなかなか面白いが、「自分の声を見失い」がいささか不自然で真実感に乏しいと思う。春三氏の言葉を借りると〃作者の内部精神からの批評や腸底からの怒りから発したものではなく、第三者的なくすぐりに過ぎないところに浅さを露呈している〃ということになるだろう。

夢虹＝新聞、ラジオ、テレビ等々マスコミの攻勢の中に立たされている私たちは知らず知らずのうちに流行を追い自分を見失っているのに気付き愕然とすることがある。そのような私たちにとっては共感を呼ぶ句ではある。が、このようなテーマは誰もが一度は考えるものであって独自性がないと思う。

薫風子＝声帯模写という特技を捉え、何か人生の深層にある哀愁を把握しようとした作者の意図は分かるが、理に陥ちすぎていることで句に余韻余性を無くした。惜しいと思う。声帯模写に情熱を注ぎ込んで、果たして自分の声を見失うだろうかと思っても見たり、自分の声を忘れる程、精魂を打ち込まねば、数々の声帯模写など思いもよらぬことだろうとも思って見たりするのも、私が声帯模写には縁のない人間だからであろう。

春三＝大体皆さんの意見で尽きているが、薫風子説の余情云々は少し当らない。この句もやはり、自己批判の句と見れば面白いのだが「見失い」という言葉が軽いので「見失う」とすると自己批判的なものになると思うが、夢虹君どう思いますか。

夢虹＝春三先生の説に同感です。「見失う」とすれば声帯模写の中に自分が移し植えられて、自分自身の感情にまで亙る程度深めることが出来ると思います。そのように、従来の川柳の如き批判的な発想方法……。自分が対象の外に立って発想するのでなく、対象の中に自分を置いて発想作句することが必要なことと思います。

春三＝結局自ら傷つくということが、この場合必要であるまいか。

晃＝川柳では従来、主観を客観的に捉写する場合が多かった。それで、鑑賞者も客観句を主観的に屈折せしめて味わうべきなのではなかろうか。つまり、作者が傷ついても平静な第三者の如き表現法を用いている句が川柳には多多あるので、鑑賞者もその意、つまり真実傷ついているところまで没んで味わうべきではなかろうか。

夢虹＝確かに晃さんのいわれるような作品も多くあります。併し、それらの場合は作者が意識的にそのように仕立てたものでなければ、その作品は無意味となります。

春三＝晃説はよく分かるが、現実に「川柳雑誌」の句を見て晃説のような客観句があれば夢虹君とともに喜ぶが、必ずしも現実はそうともいえない。晃説のごとき客観作品であれば、それはそれとして私たちも必ず共鳴出来る筈である。結果は作家精神の問題になってくるものと思う。

渇くとき飲む女をば多情とす

清生

夢虹＝日本に於ては忍従を女の美徳とした。自己否定の中に生きる事をしいられた日本の女性は歴史の中にも幾多ある。それに死を以って抵抗した女性もあった。近松の世界にも、小かん、お七、小春等々渇くときに水を飲む女、自分の感情に忠実な女、その女を多情と人はいう。それを多情というなら私はその多情を愛する。男はその女に多情を見るが、それは男心にひそむ多情性であるのであろうか。キリストは、「色情を以って女を見ればその人はもう心の中で姦通したのだ。」といったが、この句四月号川柳塔中第一の佳作と思う。

晃＝「渇しても盗泉の水を飲まず」という封建道徳に対して、人間の本能を尊重する作者の抵抗精神をあらわしたものと思うが、現代では逆に性の紊乱が甚しいので、作者の批判は時代迎合的であり、批判の底が浅いのではないか。

薫風子＝渇くとき何のためらいもなく飲む、そのことを多情と表現して、セックスをさりげなく、しかも辛辣に匂わせた作者の手腕には敬服する。性を飲み物に間接的に表現したことで、句の品位を失わず余情を蔵すこととなった。何の変哲もない字句を駆使して常凡でない効果を出させる作者の力量はすばらしいが、唯、発想の素材そのもの自体がありきたりであることが致命的であるようだ。表現力の卓抜さで高められた句だといえる。

晃＝この句は「飲む女」に対して否定とも肯定ともとれる。夢虹さんは「飲む女」を多情と非難する一般社会に対する作者の批判として捉えたものであり、薫風子さんは作者が「飲む女」を多情と断定したと見たことになるのだが、私は夢虹君の説に賛成したい。併し夢虹さんが賞める程よい作品だとは思わない。

夢虹＝渇くときに飲むという行為はそれ以上に深い意味を持つ。ただこの句の表現方法として、「女をば」の「ば」が気になる。口調がよいのでつい「をば」としてしまったのだろうが、私なら「ば」を省略する。

薫風子＝「ば」は必要だ。夢虹さんと私の鑑賞の意味合いが根本的に異なるかも知れぬが、この「ば」は意味を非常に強める役割を果たしている。

清生＝いくら強くなったといっても渇くとき飲めないのが女の宿命、男ならひそかな感嘆を受けるようなことも、女故に多情放逸とさげすまれる。中には勇敢な女性が現われても遂に本質的な男女の平等などあり得ないのではなかろうか。もっとも、こういった道徳的なかせを作ることも男のエゴイズムかもしれない。晃さんの発言の通り新しい発見とはいえないありきたりの句だ。勿論、一時的にはセックスを念頭に置いて作句した訳だ。この句は或る海外の女優に関する新聞記事から作句したものだが、記事の通俗的な興味以上の人間（女）の深層心理を追求したかった。その場合、多情という言葉がセックスのみならず、深い意味合いを含んで来ることにはなるのだが……。

夢虹＝この句を単に感情のままに動く女ととれば余り意味がない。これは個我と既成秩序との戦いと見た時にこの句の意味が深まる。

清生さんの話で作句の動機は海外の女優にあったことを知ったが、この女は日本の女でなければならない。女性の個我を認めなかった日本の歴史が背景にあってこそ意味のある句になる。

晃＝それは、イブセンの「人形の家」が尊重された時代の見方で、現代的でないよ。

春三＝作者が底を割って話されたので、いう言葉もないが、夢虹発言の歴史云々を除いた外は総べて同感である。「渇くとき飲む女」は文字通りの解釈ではあるが、作者のいうように文字だけでないものを持っていると僕は思う。表現の問題だが、「をば」というのは確かに腐い。

併し、「ば」を除いてしまっただけでは絶対強調の感じが出ない。「多情とす」の語勢に対応するためにも、作者の推敲を願いたい。四月号の清生君の三句は総て方向は違っていながら、いい句であったと僕は率直に思う。

政治家の顔を自然は相容れず　**薫風子**

清生＝たとえ保守的な政見をもつ人でも現在の政治や政党のあり方に無条件な賛意は示さないであろうし、進歩的な思想をもつ人も自民党はもちろん、野党の既成政治家にもあきたらなさを感じているであろう。自然を最も美しくかつ完全なものと理解するとき清浄な自然は絶対に汚濁の顔と共存し得ないものであろう。夢の美しさをさぐり、自分の内部にある清純なエレメントを深める作者の句風からすると、作者にとっては比較的数少ない社会批判の作品で、日常誰しもが感じる印象を常凡でなくまとめ上げた手腕に敬意を表する。ただ私たちなら政治家たちの権謀術数の日々も自然の大きな焦みの中の一つの現象だという見方をしたいようにも思う。

晃＝政治家というものは権力欲に汚れた救いようのない俗物だという、一般社会の通念を、けがれのない自然と対立させて諷したまでで、物々しい表現のわりに内容は至極陳腐である。相容れずの「相」はこの句の場合、無意味の接頭語であるが、「相」本来の意味である「互いに」という意味も感じられて、焦点がぼやけるように思われる。

夢虹＝一口でいえば平均点の作品だと思う。自然、この自然は孤独な岩肌に囲まれた絶壁でもあろうか。また、冬の剣でもあろうか。

自然は人間を寄せつけぬきびしさを持っている。政治家の顔、それは、すべてを名声と権力、そして金に換算してしまうもっとも人間臭い顔であろうか。その顔を自然は拒絶したのである。しかし、この着想は平凡であり独自性がないが表現技巧は優れている。又、この句には一つの弱味があると思う。それは、私が誌上で見た時、ついうっかりと、「政治家の顔は自然を相容れず」と読み違えた。これによって、この句の主客が自然と人間とに置き変えられた訳だが、どちらでも句として一応まとまっていると思う。とするとこの句は絶対性が欠けているということになる。

薫風子＝或る雑誌の中の詩人の写真がふと私の目に止まった。小さな、やや不鮮明な写真だったが、山の湖を背景にした詩人の横顔がそこにあった訳だ。詩人の名前はとくと知っていたのだったが、写真を見るのはその時が初めてだった。その時、背景にある大きな自然には余りふさわしからぬ顔だなあと直感した。

そしてその瞬時の後に、それでも、政治家である池田首相や佐藤栄作氏等よりは自然を背景にしても少しはふさわしいものを持っている顔だなと思った。詩人や画家と違って政治家の顔は、金ピカの椅子が背景にあるのが一番ふさわしいように出来ているようだ。人の顔には恐ろしい程の妙味があるものだ。

晃＝残念ながら薫風子さんの純粋な衝動が充分に表現し切れてないと思う。

春三＝大体清生君の意見で句意は分かる筈だ。夢虹君の発言にあった、「政治家の顔は自然を相容れず」としても勿論意味は通ずるが、作者は、この句の場合、社会批判ではあるが自然というものを主体に置いているところにこの句のよさがあって、「政治家の顔は自然を相容れず」の場合には案外つまらぬ句になると僕は思う。

（五月三日　薫風子清記）

酒
清
金露
灘・魚崎
金露酒造株式会社醸

選から敍法から

――感じたまま――

八木摩天郎

百人一首で、誰でも知っている、壬生忠見の秀歌、

恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしが

と、平兼盛の名作

忍ぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで

とは、村上天皇が天徳四年（九六〇）に、内裏で催された結びの一番で、満座の人々に手に汗握らせた好勝負の歌合の和歌であるが、この「歌合」は、言うまでもなく共通な歌題の下に、左右一首ずつの和歌を比較して、作品の優劣を競い、創作力の向上と、興味をそそる文学上のゲームである。恰度、川柳の忘年句会なんかに、よく行なわれる川柳の「角力吟」と同じで、一番勝負の相撲のように、柔剣道の一本勝負のように、対抗意識で、多くの人々注視の下に、判者（選者）と言う行司に依って、優劣を判定し、判者は良識に依って何びとにも納得される公正な判定で、軍配を挙げるとなると、一見誰でもたやすいように見えるが、歌や句を選ぶとなると中々むつかしい事である。

角力の行司が、軍配を左右のどちらかに挙げねばならない、掟でも、同体の時は、軍配を上に挙げたくなるような場面もあるように、満座の人々注視の中で、その句の優劣を判定するとなると、角力吟の選者も、亦、中々むつかしい役であると思う。それは、一点を争う野球のタッチアウトの判定以上であるかも知れない。心すべき事であると思う。

◇

私の家とは特別に昵懇であった日野家のその草城の句碑が、客年十一月三日の文化の日に、大阪の郊外、服部緑地の小高き丘に建碑された。路郎先生からも当日祝電を寄せられ誠に盛大であった。其後、伊丹三樹彦先生からも、記念特集「俳句研究」を私に贈られ、草城の愛子夫人からも、記念特大号俳誌「青玄」を送られたので繙いた。その句碑に刻まれた五句の内、

見えぬ眼の方の眼鏡の玉も
拭く

の句に対し、山口誓子先生は、見える眼の眼鏡の玉と見えぬ眼の眼鏡の玉との衝撃。つまり見える眼と見えぬ眼との、完全と不完全との衝撃「見える眼の眼鏡の玉」と「見えぬ眼の眼鏡の玉」とは一見相反する物である。そのままでは合体して一にはならぬ物である。ところが、同じ「拭く」という行為によって、両者は一になる。一見相反する物にすばやく共通点を見出すことを詩学では、「機智」（ウィット）と呼んでいる。と教示されている。又草城句碑五句の内の句、

秋の道日かげに入りて日に
出でて

の、句に対し、田村木国先生は「日かげ」「日向」の対句的の描写のよろしさは、草城の青年時代からの持ち味であると激賞されている。川柳に於いても、

俺に似よ俺に似るなと子を思い

路郎先生の名句として、人に愛唱せらるる句、「俺に似よ」「俺に似るな」の対句的平行線が、「子を思い」という下五句に依って、両者は一になり、又、霞乃先生の

のんで欲し止めてもし欲しい酒を酌ぎ

の名句のこの句法、流石、川柳家ご夫妻で、川柳に依って結ばれて、金婚五十年にゴールインされる程あって、単なる下五句、或は上五句の措字によって、一見相反する物の間にすばやく共通点を見出す詩学上の「機智」（ウィット）又は、その五句の措字の如何に依って、名句ともなり、名句ともならない其の分岐点の重心を見せられたこの句を、思えば、中々、短歌、俳句、詩、川柳の短詩文学の社会は、むつかしい業であると言わねばならないと、此頃つくづく私は思うのである。

同舟近詠

名古屋市　長谷川鮮山

別荘はスイス遙かな夢をもつ
もうわしもこれで見おさめ二重橋
物云わぬそれが怒っている証拠

須坂市　高峰柳児

数だけにされて派閥の底にいる
重役の堅さ赤鉛筆で構え
ききあきた愚痴を知性がはねかえし
袖カバー適材適所にされている

大阪市　橋本緑雨

「蛍の光」ビルの窓から見送られ

九州の旅神話の中をゆく

今治市　月原宵明

豊かなる乳房育児の苦を知らず
浪人が春の光りを避けて行き
陸軍のなれの果なる歌があり
総評との話料亭ではすまず

和歌山市　秋月宏方

喫茶店節電してるわけでなし
太陽であった彼女ももう白髪
学位まであるとは見えずカルテの字
ハッスルしてもたかが小店の儲け高

近作柳樽

麻生路郎選

北川春巣選

ライバルと子の進学をも競い　仙台市　平野　光道
花曇りおごられながら愚痴語る　同
ベレー帽今日も読まない本持参　同
甘納豆好きな夫で花も見ず　同
新知識得て意気あらた眸を塗る　同
国旗ゆるるな忘れて子どもの日を出かけ　同
忘れ物して来た宿の名も忘れ　同
貸ビルを建てて一番端に住み　岐阜市　日東里
一度是非ゆっくり来やと追払い　同
見送りに名うてのボスの顔も見え　同
移り香を気に病む仲に成り下がり　同
借りて来た猫だと酒乱醒めている　同
碁を勝らせ見て活け花の出来を賞め　同
船台が一ぱい島は花ざかり　竹原市　杉原　愛鳩
姑とはなれていたい勤めに出　同
お花見は歩いてゆけとバスのスト　同
花の雨どうせ出られぬ職を持ち　同
境内の広さ浮世のセチ辛さ　同
貧乏へ同情された腹がたち　同
信心は金落しても感謝させ　枚方市　宮川　珠笑
黙殺に馴れて姑の独り言　同

母の急死　四句

安らかな臨終悔みの云い馴れる　同
幸福な母でした義姉への世辞　同
焼香の涙で見ても笑む写真　同
保険掛けていたらしい証書探す通夜　同
居合抜きの如く母親だまされる　高知市　須藤　俊江
手を切って養子の口へ乗りかえる　同
誕生は子に祝われて高うつき　同
ハイヤーがあるわとおしゃべり続けられ　同
女から逃れるストがしてみたし　同
勧誘員良縁とかをもって来る　七尾市　松高　秀峰
P・T・A会発言もなく隅の席　同
肩書がとれて世の中面白し　同
本当に聞きあきました予算難　同
駅前の支店の方がよく稼ぎ　同

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（260）早川右近

（一）早川貞次郎（二）右近（三）朧字亭（四）横浜市保土ヶ谷区上星川町六三（五）明治二十九年三月十八日（六）東京都四谷（七）会社役員（八）横浜（20）二五三七（九）**辛かった事をきのうの敵に言い**（一〇）将棋（一一）有（一二）大正八年三月

（261）軽部日東里

（一）軽部武（二）日東里（三）——（四）岐阜市長良城西町二の三三（五）明治四十一年十月十八日（六）宇都宮市（七）公僕（八）②〇八七六（九）**月三更男冥利に盡きて酔い**（一〇）碁（一一）有（一二）学生時代

田植唄うっかり嫁をほめちまい　陸中国　永宗　宗義
花鋏恋のきずながたち切れず　同
チャンネルをきって叱言かえ　同
麦の青近づく春を知らす青　同
ジェット機のように飛び去る片思い　同
憎しみと愛の落差にひとりっ子　西宮市　末沢　花美
同情のされっぱなしも気が疲れ　同
愛のレッテル貼って親切押つける　同
一床を城に療養ボスとなる　同
怠惰の指にブランディーの香が妖し　同
家出の子芝居にされて戻される　鳥取県　鈴木村諷子
売り牛のそれから後はもう撫でず　同
米作る年寄がまた一人死に　同
公憤は血税ひとり出したよう　同
死刑判決人間性に欠けていた　同
くるくりやきんくみ取りちゃんと主婦に受け　倉敷市　水谷　谷水
しゃっくりをとめてもらっといて妬き　同
戦前のタイで息子についていき　同
おきわがせさまたモーニングが合わず　同
墓の山父が子が住む姿して　同
ホルモンを喰って来たぐち子に言わせ　奈良市　村上　春巳
気紛れな気候へ丹前カムバック　同
育児法無慈悲な親とうらむなよ　同

花の山日曜出勤の記者が来る　同
菜の花が売却済みの土地で咲き　同
菜畑と鶏舎がはさむ恋の道　碧鬼野市　古川　静波
うつむいて帰る女よ並木路の続く　同
上の子はパパに入れさす家族風呂　同
遠ネオン恋の過失の冷たかり　同
もうズボンないぞと辻台の子へ　同
歩いても寝てゝも都会金が要り　金沢市　根上　杏花
シャンゼリゼでパパのカメラへランドセル　同
着かざった母と手をひくランドセル　同
高いびきかく老妻のしわがふえ　同
牡丹植え晶子の昼の夢をみる　香川県　三井　酔夢
宮島は霧ラブシーンにつき当り　同
扶養家族死ぬまで籠の中で鳴き　同
折角のロープウエイも視界ゼロ　同
春の夜の話題にしては不粋すぎ　鳥取市　近藤　秋星
信心をするにも天気の日を選び　同
一年生もう給食を嫌い出し　同
おたまじやくしがうようよ春も半ば過ぎ　同
人間が実印にふり回われている　兵庫県　常岡　孝風
親養うことは嫌いと云う見合　同
教育が何だ見返す意地を持ち　同
血統がどうのと犬の如く言う　同

(262) **西村梨里**

(一) 西村りり (二) 梨里 (三) ―― (四) 河内市本庄一二二三 (五) 大正十四年四月四日 (六) 兵庫県鳴尾 (七) 無職 (八) ―― (九) **女なる悲しみおんな酌をする** (一〇) 舞踊・観劇 (一一) 有 (一二) 昭和七・八年頃

(263) **津秋六花**

(一) 津秋雪夫 (二) 六花 (三) 紫雲 (四) 山口県宇部市東区恩田長沢三 (五) 明治四十三年一月八日 (六) 山口県防府市富海東町 (七) 養鶏 (八) 宇部②四六三八 (九) **借金と違う人情の借りが出来** (一〇) 盆栽 (一一) 有 (一二) 昭和十六年八月

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL (271) 6684
御集会には階上を御利用下さい

はちまきをする度増える電気器具　大阪市　山田　李鳥
自家用車使わず地下で急ぐ用　同
金とひま出来ると桜散っている　同
北枕知らず団体寝かされる　同
訪えばなんや母ちゃんかと　大阪市　宮尾あいき
集金を女客やと喜ばし　同
えんどうをむく爪先に初夏があり　同
本物を造花ですかとうたがわれ　同
純血を誇っても雀雀なり　大阪市　川口　弘村
満三十九才不遇なれども家平和　同
プレゼントと小遣いせびられる　同
生きのびて女神の像にも訪ねられ　同
死人に口なし遺産のことでもめ　宮崎市　野口卯之助
子が育つだけが残りと欲もなし　同
いでたちもマンボズボンに赤いシャツ　同
なにひとつしないばかりか口答え　同
末席で花輪の値ぶみしてる声　パロアルト　斉藤　流路
流れ木の終点草月流の副え　同
BONSAIに曲松を見せ　同
ゴマふったようにニグロの混って居　同
慰めるつもりが喧嘩して戻り　新居浜市　賀本　昇
公平に分けてもひがむ反抗期　同
相棒を呼んで駅弁釣りが出来　同
老眼と伊達と眼鏡は二つ持ち　同
牧師には天国医者に死者に死るのみ　静岡市　多々良英舟
清濁の濁でふくらむ太っ腹　同
教育の淵源に酒肴　同
建設的意見すぐさま飲むとなり　同
生木さくように家柄固執され　新居浜市　安藤　桂仙
お買上げの光栄で売る串だんご　同
料理屋と並び蛸焼よく儲け　同
内弁慶会社の不満持ち帰り　同
やりくりを嫁に任せてよい姑　松原市　守屋　万竿
計らずも不肖は予定の椅子に着き　同
独り住む庭にも開く花があり　同
野に咲いている倖せを手折られず　玉島市　水粉　千翁
まともから拒む瞳のきれいすぎ　同
アルバムのうわさ一枚ずつめくり　同
独身の最後を母と湯につかり　大阪市　稲本　凡子
女なる故に不倫のうしろゆび　同
明日からは家族でない娘にっぃでやり　同
だまされて来年を待つ四月馬鹿　児島市　伊丹柳瓢子
口先に乗せて気になる四月馬鹿　同
日溜りへシャボテン一鉢持ち歩き　同
予算の無い旅で温泉素通りし　大阪市　西本　保夫
保育所へ預ける朝のシームレス　同

---

(264) **佐藤曙光**

(一) 佐藤大吉 (二) 曙光 (三) ―(四) 長野市栗田吉原 (五) 昭和二年一月十八日 (六) 長野県小諸市与良 (七) 国鉄職員 (八) 国鉄 (長野) 二一四七 (九) **表から駈け込んで来るいい話** (一〇) 読書・書道 (一一) 有 (一二) 昭和二十三年四月

(265) **吾郷玲人**

(一) 吾郷元三 (二) 玲人 (三) ―(四) 大阪市住吉区南加賀屋町四二一 (五) 大正元年九月九日 (六) 出雲市塩治町一四〇一 (七) 洋服業 (八) (六七一) 八七一一 (九) **行先きも言はず笑って出る浴衣** (一〇) カメラ・旅 (一一) 有 (一二) 昭和四年頃

(266) **村上春巳**

(一) 村上春巳 (二) 春巳 (三) ―(四) 奈良市雑司町五四 (五) 昭和四年二月十一日 (六) 大阪市港区八幡屋新道 (七) 関西電力社員 (八) ―(九) **二十年添うて覚えた燭のこつ** (一〇) 木工細工 (一一) 有 (一二) 昭和二十四年一月

(267) **森紫苑荘**

乗車駅下車駅同じビラをくれ　同
悪い事した後人形も恐く見え　綾市　青山慶之助
ただ食べる見舞客でも有難し　同
計算通りにいかぬ世間の有難さ　同
これ以上ないあばら家が犬を飼い　兵庫県　斉藤たけを
帝王切開また三度目の子をはらみ　同
ヒールスマン今日も二人でくどきに来　同
禄高も書いてしのばす天守閣　神戸市　吉田　隆史
御近所がみな歯痒がる妻孝行　同
衣がえ定期に気づき戻る家　同
初孫の保育器あわれ裸ン坊　出雲市　和泉　松風
婚約が出来て晴れてのデート持ち　同
其事は忘れましょうと誓い合い　同
老いて子に従い椅子で食う住居　京都市　大久保　和三郎
陽に稼ぐ顔に女をあきらめる　同
盲愛が少年Aとなる答え　同
花だよりこちらは今日もぼたん雪　山梨県　赤池　五朗
昼食は何にしますとまわるメモ　同
合掌の右に左にホーホケキョ　同
嘘つきの辻褄合わす感のよさ　岡山県　阿部　良江
病人の世辞を背中に医者は立ち　同
文なしの啖呵は後尾が消えかかり　同
桜咲く日を凡人になり切れず　玉島市　井上　旭峯
使うこと知らぬ男で屋根が漏り　同
汐時はよしと先輩詫びてくれ　同
誰も居ぬ所はやはり貝も居ず　今治市　八塚三五島
待合室に来るテレビのボタン押し　同
からかわ見れば満更でない手相　柯内長野市　森本黒天子
目を皿にむかいの新聞読み下し　同
二次会で左遷の愚痴をうんときき　羽咋市　三宅　ろ亭
花見酒山に来ぬ間に半分売れ　同
キリストのようにパパのない赤ちゃん　八戸市　川村　映輝
レッテルを変えて老舗の近代化　同
ドライヤーかぶれば子供はっとかれ　宿毛市　渡辺伊津志
叩かれた肩の余いんの仕事する　同
欲求不満か時計もストップし　大阪市　山地　判志
カウンターに造花展示で釣るバンク　茨木市　高木繁太郎
労賃は抑え手盛りは天知らず　笠岡市　谷本鈍愚坊
小都市の空気も同じごみの味　松江市　岡崎　祥月
恋情の詮方も無し小唄弾く　大阪市　和田　旋鳳
むつかえるといっては抱きたがり　大阪市　武居寿美司
入試すみ何が何でもねるとする　薬師寺市　伊藤　歌子
おそいのは待てんと桜サット散り　神戸市　友国　ゑつ
恋をしたメモもしてある備忘録　丸亀市　馬場　天目
俺ももう齢だと思う物忘れ　岐阜市　名和　春子
混浴を伏せて湯泉場へ連れ　京都府　西村句楽坊

（一）森鼎（もりかなえ）（二）紫苑荘（しおんそう）（三）吟風園（四）北九州市小倉区城野九四九官舎二号（五）明治四十一年五月三日（六）山口県下関市（七）法務事務官（八）（五二）三八四八（九）**藤棚の下でコップが藤の色**（一〇）篆刻・孔版・カメラ（一一）有（一二）昭和九年七月

（268）米子映月

（一）米子正信（よなこまさのぶ）（二）映月（えいげつ）（三）静史・椎果・緇衣花（四）今治市風早町四丁目正法寺（五）大正三年四月二十日（六）今治市風早町四丁目（七）住職（八）——（九）**青空が見え弁当を慌てさせ**（一〇）書道・俳画・俳句・読書（一一）有（一二）昭和八年頃

川柳の周邊

鼎談会

北川春巣
清水白柳
河野春三

春三　今日はあんまり肩のこらぬところで、川柳の問題にも触れながら、気軽に話合いましょう。春巣さんはお医者さんだと聞いておりますが……。

春巣　私は大阪交通局病院の内科医長をしております。

春三　戦後病気の種類も変って来ましたねェ。平均寿命が延びたという事ですし、成人病などが特に問題になったようですが。

春巣　平均寿命はだんだん延びていますが、新薬や環境衛生の方が進んだこと、それに新生児の死亡率がうんと減りましたから。

春三　低血圧の人間は長生きするというのは本当でしょうか。

春巣　そういう傾向はありまして、医学の本も沢山出しておりますが、文豪としても有名です。

短詩文学の方でも短歌の斉藤茂吉、俳句の水原秋桜子、横山白虹中村若沙、平畑静塔など挙げればきりがありませんが、医者と文学とは、本質的には何の関係がないのに、因縁は深いようです。

昭和初期だったと思いますが、「医文学」という、医者で文筆家の随筆を主とした雑誌が一般書店に出た事があって私も買った記憶がありますが、たしか編集者は信州の高原療養所所長の正木不如丘でなかったかと思います。この療養所では抒情画家の竹久夢二が最後の生涯を閉じたところです。

春巣　その雑誌は知りませんが「医学ペン」というのも出ていました。それから今式場隆三郎氏の編集で「医家芸術」というのが発刊されていますよ。

春三　「医者と文学」この両者の密接な関係の原因はどういうことでしょうか。

春巣　第一に医者は暇があるということですね。それに何時患者が来るか判らぬので外出は出来ない。勢い机に向って思索をしたり読書をしたりする。そんな事から文筆に親しみを覚えるということになるのだと思います。

白柳　そういえば川柳界でも、阪大川柳会の長崎柳秀、笠原路生氏ら、また中島生々庵、山川阿茶川村伊知呂、太田佳凡氏ら数えればお医者さんが沢山ありますねェ

春巣　医者は一般的にいって教養もあり、科学専攻の息抜きの意味もあって短詩文芸が最も適切と思われます。

白柳　暇の一番あるのは春巣先生ということで……いや失礼なことをいうてしまいました。

療養者と川柳

春三　医者の話が出たついでにこんどは療養者の例から考えて見たいのですが、療養川柳の歴史は浅いけれど可成りの人口があるようですね。

春巣　長期療養の結核患者に多いです。特効薬がなかった時代、安静していて時に短歌、俳句、川柳などの短詩を作って気をまぎらせるということです。

路郎先生も刀根山療養所に永らく指導に行っておられたし、今は川村好郎氏が羽曳野病院へ毎月指導に行っておられます。又大阪逓信病院では職員の川柳グループが活発です。療養者も現在では特効薬と手術が進歩しましたので、手術後三ヵ月程で退院するという風になったので、短期間になったというところに指導のむつかしさもあります。

春三　富山県に礦波というところで中島鬼水という川柳家が自らも片肺をとってしまうという療養者でありましたが、病院の中で〝貌〟という新しい川柳誌をかなわゆるメヌエル氏病らしいです。

春巣　ベートーベンがメヌエル氏病でして耳が聞えなくなってからも作曲していたといいますね。

白柳　それでは春三さんは芸術家の病気ですな（笑）

春三　精神的疲労の積み重なりが原因らしいです。

医学と文学

春三　ところで、医者の話が出たので春巣さんに「医学と文学」ということについておたずねしたいのですが、お医者さんで文学者という人は大変多いと思いますが、何か理由があるんでしょうか。

筆頭は森鷗外ですが、軍医総監

り長く指導して句集まで出した事がありまして、随分優秀な作家を輩出しましたが、死に直面して人生の重大時に対決すると真剣な気持になるものですね。

白柳　「川柳雑誌」の早川清生、橘高薫風子、林夢虹の諸君らも療養川柳の出身者の異色ですよ。

春巣　療養中は作句していても退院するとやらなくなるというのが通常です。惜しいことですが、俗事に追われ精神統一が出来ぬようになると止めてしまいます。

白柳　止めるのは一つは川柳にそれだけの魅力がないという事も一因になっているんじゃないですか、レジャー時代で娯楽には事欠かぬ世の中ですから。

春三　療養川柳の句会などはやはり課題吟が多いんでしょう。

春巣　そうですねェ。殆んど課題吟です。

課題吟について

春三　課題吟のことが出たのでここらで白柳さんの課題吟とか題詠についての意見を伺いましょうか。

白柳　題詠の功罪については川柳界でもよく論じられています。

勿論雑詠（作品）を根本としなければならぬとは私も考えますが、新人の場合は課題から入るというのが自然で、大まかで摑み難い雑詠より、題によって作句する方が作り易く、ある程度の作句力が出来るまでの過程としての題詠は認めねばならぬと思います。

春巣　柳樽時代から川柳は題詠だったと私は思います。「個体発生は系統発生を繰り返えす」という自然界の原則がありますが、川柳の作句力の進歩の過程にも課題があって然るべきでしょう。

春三　白柳さん、題詠の功罪といわれましたが、今度は罪の方を話して見てくれませんか。

白柳、課題にしばられて作者の思想が出て来ないというような事もありますし……。

春巣　題詠で賞品が出るような時に、盗作というような問題も挙げるべきでしょう。春三さんは題詠についてどう御考えですか。

春三　そうですね、私は句会などにも殆んど出ませんし、課題吟を作るという事もしませんが、課題吟の歴史を振りかえって見ますと、大体初めは大抵雑詠でなく題詠ですね。「ホトトギス」の初め頃の雑誌を見ましても雑詠とか創作が出て来たのは大分後のことで最初は全部課題吟です。大体雑詠とか雑吟とかいう「雑」というのは課題のないものを整理するときに最後に「雑の部」を作ったところから始まったらしく、課題から発生しているし、俳句には殊に季題という必須条件があったので尚更そうなったのでしょう。

その点川柳の方が早く創作として態度をもったといってよろしく、麻生路郎、川上日車、木村半文銭等の先覚が早くから「創作」又は「作品」として題詠でないところで「一家吟」というよう名で雑吟を示したことは、「雪」や「土団子」等を見ても分ります。

課題吟の問題は私は句会の場合と、雑誌の場合と二つに考えるのですが。

向って左から
白柳・春巣・春三の三氏

白柳　確かにそうです。句会の場合と、雑誌の場合は違います。私は「川柳雑誌」で「入門講座」を受けもっていますが、雑誌の場合は何分後に残るものですから、質問を受けるという事もありますし、選評にも随分神経を使います。

句会の場合は、作家の交流の場としては存在価値はありますが、どうしても即吟のお座なりで、悪くいえば入選本位で選者あて込み等もあります。ここらにも罪の方が多分にありますよ。

春三　題の出し方にも大きい問題はあるんじゃないですか。

白柳　ありますね。課題でも大きい範囲の「男」「女」「世相」とかいった場合は雑詠に近い発想が出来ると思います。小さい末稍的な題は感心しませんね。

春巣　新奇な流行語なども生命が短いと思います。

春三　課題というものを。主題だと作者が考えて、出された課題をヒントとして自分の生活や人生観を出すようにすれば救われると思いますがねェ。課題の詠み込みでは弊害の方が多いでしょう。

白柳　勿論そういう考えの作家もいますが、これは選者の問題ですが、選者にも考えるべきところがあると思います。それにさっきいわれた題の吟味は是非考えたいですねェ。

春三　岩井三窓君らで出している「蘗（ひこばえ）」という雑誌など、それに載っている作品は、創作欄のような感じで、よい句も沢山ありますが、後記を読むと全部課題吟なので、考えさせられる事があります。課題そのものの選択がうまいともいえます。

白柳　それは結局作家その人の問題で、つまり作家精神につながるのだと思います。

私も入門講座で題を出すのは困ります。入門ですから作り易い題の考慮もいるし、雑吟に近い題なども試みたりします。一度「ナイター」というのを出したら、自分は作れないといって来た人がありました。ナイターを見たことのない、テレビもない地方の作家もあるのですから。

春三　入門講座は地方の方が多いのですか。

白柳　地方が多いですね、

春三　入門講座からぐんぐん伸びて行くといった人はありますか。

白柳　入門講座で育って「近作柳樽」へ投句し出すというようになられるのが私の役目だと思っています。その人が近作柳樽の巻頭をとられたりすると「おめでとう」と祝福の手紙を出して共に喜んでいます。

春巣　私考えるのですが、古川柳の前句附の題（前句）は一年に数題出して、他に題はないという意味のことがあったと思いますが、川柳の句会でも、同じ題で同じ選者が毎月つづけて見るというのはどうでしょうか。そうすると一応作って、他人の作品も見た上で又考え直し更に練って考えを深めてゆくということになり、よい習

練にもなり、作者としては即吟だけで通過せずに、再考していろいろに内容も表現も深くして行くということになりはしませんか。広い題を選んで作ることにするのですから、素材は尽きない筈です。

春三　面白い案です。それは一度是非実行して下さい。きっと収獲があると思います。

白柳　面白いが選者泣かせですね。

選者として

春三　課題にも関連して選者のことに触れましたので、春巣さん近作柳樽の選をしておられて、どうお感じですか。何かご註文なども。

春巣　近作柳樽の投句者を多くするために早く白柳さんの入門講座の作家達が続々投句して下さるように期待しています。知らぬ作者をいろいろ句の傾向から推量するのも選者の楽しみの一つで、地方の句会などで当人とお会いしたりすると、想像通りの方であったり、イメージは少し違っていたりで興味があります。尤も中には自分のランキングを試すために半年位投句してさっとやめるというような人もあります。

春三　毛色の変った難解なものなど投句する作家はありませんか。

春巣　ありませんね。やはり川雑向きという傾向です。

春三　没にした場合何故没にしたという質問など寄せられませんか。

春巣　まあありませんね。

白柳　私の方はありますよ、類句があることを知らなかったり、入門講座の作者の作句道程には無理からぬ理由が多いのです。一字一句違わぬ句があったり（これは同じ題で作句する新人にありがちのことですが）古句をそのまま書いて来て選者が試されているようなこともあるので困ります。

春三　課題吟には類想句は多々あるでしょう。これも題詠の一つの罪の方に入れられるものでしょう。

白柳　それから大会のことですが、ある大会で私も選者として課題の選をしたのですが、何と集句が千句程もあって、それを一時間足らずで選をするのですからとても人間業ではありません。撰んだ句をもう一度見直すというような余裕もなく、唯もう機械のように第六感で次々とふるいにかけているのですから佳句を見落すということにもなっていたと思いますが、これは句会の罪の中に入ります。

春三　私もずっと前のことですが京都の句会に呼ばれて、そこの社では選者が二人づつ共選をする習慣らしいので私もある選者と同じ課題の選をしたのでしたが、二人が共通に撰んだ句は数句足らずでした。勿論各選者には選者としての主観があって必ずしも一致しなくとも構いません、それで当然といえますが、句会の席上での共選の場合などは時間的にも十分の鑑賞は困難で、それが雑誌に発表されてから見るともう一人の選者のえらんだ句で私が見落している句を発見した事があります。向うも同じような事をいっていました。権威のない選者だと思われるかも知れませんが、雑誌上の選なればとも角、句会のあの混雑の中で、限られた時間で十分の鑑賞が出来るなんて、真剣に考える程難かしいと思いますね。

よく句会でしゃべり乍ら何句でもちゃんと作っている人を見ますが私などにはそんな真似は出来ません。

白柳　こんな事もありますよ。家でゆっくり作句した句が抜けず句会場で時間に追われて作句したのが抜けたりするのはどうしてですかと質問されることがあるのですが、それは、時間をかけて、推敲を重ねると却って素直さを失ったり、自分よがりの句におち入り易く、句会の雰囲気にふっと句想が燃焼されて良い句が出来るのだとお答えしたのですが、そういう事だってあると思います。

春三　選ということに就て、話が少し飛躍しますけれども、戦後に「太陽系」で日野草城が、選という言葉を審査という言葉にかえてその理由を書いたのを読んだ記憶があります。

それは選者としていろんな作家の作品を見て行くと、初心の人は別として一家をなしている作家の作品になると、作家個人の個性が打出されていて、選者自身としては自分の考え方や方向や嗜好と違った句に出会わす場合があります。

その場合、一応の水準に達しているものは、自分の好みに拘らずこれを発表して世間の眼に触れさせる機会を与える1その作品の批判は、責任は作者がもつものとして発表の場を与えるというような考えで審査という言葉を用いた事もありました。

青年作家へ

春三　話が飛びますが、今の若い人は少し活気がないというか、遠慮がちなのか、もう少し川柳界で、よい意味での野心や、活動力があってよいと思いますがどうでしょうか。川柳年令の老化という事が一部で取沙汰されているようですが、川柳はもっと青年のものであってよく、老人の手なぐさみ的なものでないと同時に、作家自体も若い作家がもっと第一線で働いて欲しいと思いますね。

白柳　入門講座でも案外若い人が少くて年配の方がかなり多いことは私も感じています。若い作家が数多く輩出して川柳界を下から盛り上げるといった気運に向つて欲しいと念願しています。

春巣　川柳というものの魅力がなくて、今のレジャー時代には他に楽しむことが多いのですから、若い作家が川柳に激しい情熱を賭けるということが少くなったのではありませんか。

春三　勿論そういうことも言えますが、さてそのレジャー時代に川柳を自分の道として選んだ作家だけに限って考えても昔と今とでは相当の開きがあると思います。

六厘坊などは二十才以下で肩で風を切って、川柳は勿論のこと、俳句でも短歌の会へでも出掛けていってリードして会場の年輩者をあっといわせたそうですが、私や白柳さんが川柳をはじめた頃の、路郎先生や水府先生は三十才代であったと思いますが、句会でお目にかかっても貫禄というか、一種の威厳を感じたものです。これらの先輩はすでにその頃雑誌を主宰して居られ指導にもあたられていて見識もあって今の三十代の作家とは問題にならぬ気がします。

私自身も刀三、松郎、馬行、鵜足氏等と会を作って、三、四十人あった会員の前で、而も年長の人をつかまえて、柳論や句評をやったり雑誌や句集を出したり、勿論今から思えば汗顔もの乍ら、若さと稚気で押通したものですが、近頃の青壮年の作家は利巧なのか、少し覇気がない気がしますね。

白柳　たしかにそんな気がします。時代が違うといえばそれまでですが。然し本誌でも中々若い精鋭がいるようですから、春三さんもうまく引立て役を御願いします。

春巣　ほんとうにそう思いますよ。万事よろしく。

春三　私が出しゃばる場ではありませんが一日も早くそういう人達によって「川柳雑誌」の次代を背負って貰うよう念願します。それではこの辺で。ありがとうご座いました。

（五月二日）　薫風子居にて

弟橘姫

冨士野鞍馬

景行天皇の皇子、日本武尊（やまとたけるのみこと）の妃、弟橘姫（おとたちばなひめ）は、忍山宿禰（おしやまのすくね）の女である。

景行四十年（一一〇）日本武尊が、東征の途次、相模灘で暴風に遭い、その危難を救うため、弟橘姫は犠牲となって、海中に身を投じて、尊の安泰をはかったという悲話がある。それを川柳は、

身を捨て名に橘の御操
（タル一一三25）

お手生の橘海へ身を落し
（〃　一四八19）

と詠んでいる。また、

草薙にまさる千尋にたつ貞操
（タル一一八18）

という句もあり、それより前に、尊は、駿河の国で賊にたばかられ、四方から草を焼きたてて殺されようとした時、所持の叔母倭姫からもらった天の叢雲劔で、草を薙ぎはらい、死地を脱した。それからこの劔を「草薙の劔」と改称され、熱田神宮に祀られてある。それよりも、弟橘姫の犠牲は尊いと詠まれている。「千尋」（ちひろ）は深海のことである。

草を薙ぎしごとく夷賊を切り
靡け
（タル八七15）

妙のあるたび宝剣の名が替り
（タル五三15）

この草薙の劔は、素戔嗚尊が、出雲で八岐の大蛇を退治た時、その尾から出たという天の叢雲の劔であった。

「日本書記」に

「是に日本武尊曰はく、蝦夷の凶首、咸その罪に伏しぬ。唯信濃国越の国、頗る未だ化に従はずと。即ち甲斐より北に転り、武蔵上野を歴て、西碓日坂に至ります。時に日本武尊、毎に弟橘姫をしのびたまふ情有り、故れ碓日の嶺に登りて、東南を望みて三たび歎きて曰はく、「吾妻耶」と。故れ因りて、山の東の諸国を号けて吾妻の国と曰ふ。」

とあり、それをまた、

橘を碓氷の嶺でなつかしみ
（タル一二七19）

峠にて橘姫をなつかしみ
（〃八六17）

海に入るみさをを山で御したい
（〃九九24）

吾妻に縁も碓氷と御嘆き
（〃六三14）

さてさて臼井えにしよなわが妻よ
（〃一〇六29）

白ヲ鳥と化した臼井の放れ鴛鴦
（〃一四〇19）

などと川柳に詠まれている。

日本武うすい峠でしたくなり
（明六亀2）

というつまらぬ句もある。

この碓氷峠は、昔から交通の要衝で、信州北佐久郡と上州碓氷郡とに跨る国境、海抜一二〇〇メートルの嶺であった。それで関所も古くから設けられ、

名は碓氷関の掟は厚い所
（タル八六29）

と詠まれている。

日本武参内右を見てはろり
（タル一五三22）

という句があるが、時代錯誤に作られている。紫宸殿前の右近の橘を見て橘姫を思い出しただろうというのである。その時代に京都御所はない。また「吾妻」に附会して、

日本武様の御作し吾妻形
（タル九七8）

という戯作もある。「吾妻形」は男子用房中器具である。

日本武尊は、こうして凱陣の帰途、伊吹山で大蛇の毒にあてられ、景行四十三年（一一三）三十才で、伊勢の能褒野で薨じられた。そして熱田神宮に祭られてある。

神徳も武威も名にあふ日本武
（タル一〇〇35）

大社武の上座には日本武
（〃七六22）

草薙はめぐみ熱田は御正体
（〃八一35）

と高番句が詠まれている。

（完）

――予　告――

古川柳研究のナンバーワン、冨士野鞍馬先生がウンチクを傾けて、本誌の昭和三十五年四月一日号から執筆し続けられた古川柳女性シリーズも、清少納言を皮切りに、本号の「弟橘姫」に至って一とまず打ち切られることになった。この間四年の歳月が流れ、本誌ならでは見られぬ研究物としての好評裡に終幕を告げられたことは愛読者と共に感謝に堪えない。

引続き、次号からは筆を新らたにして、

〃古俳句と古川柳〃

の何篇かを連載されることとなり、目下研究の筆を進められていられると聞く。これ又、前稿におとらぬ好読物を提供されることと思われるのでご期待を請う。

（編集局）

女として人間として

―句集「新子」をめぐって―

時実新子

「奥さんは何か本を読まれますか？」

唐突な問いに私は驚いた。亡妹の命日。いつもなら姑が接待するのだがあいにくの留守で、粗茶を出してのひとときを対座した若い僧侶からの不意の質問であった。

「ハイ。乱読でございますが読むことは好きです。」

「ご自分でも何かやっておられるのと違いますか。例えば短歌・俳句など……」

「どうしてそれがおわかりになりまして？」

「いや何となくそのような気が致しましただけのこと。いつお伺いしてもお店に居られてついぞお話する機会もなかつたですが、一度たずねてみようと思っていたのです。」

「私は川柳をやっております。少女の頃から何でも書くことが好きで短歌など詠んでおりましたが、十年ほど前ふとしたキッカケで川柳を知りました。人間を自由に詠める。しかも短歌よりも一層短い形で表現する苦しい楽しみにすっかり惹かれまして今日まで川柳一本に打込んでいます。」

「そうでしたか。やっぱりそうでしたか。実は失礼ですが奥さんにはどこか普通の方と違ったところが見えました。文学的な匂いなどと申してはキザに聞こえましょうが、何かやっておられるのではないかと……

しかしお忙しい毎日だからきっと短い形のもの、と想像していた私のカンが当たってうれしいですよ。」

外には青い雨が細く降っていた。私はいつのまにか熱心に川柳を語りつづけていた。若い僧はじっとかみしめるように聞いてくれたあと何か奥さんの書いたものをお貸し願えないかと申されるので、私はたった一冊手許に残している句集「新子」を取りに座を立った。

「はじめて出しました本で、まことに未熟なものですがどうぞごらんになって下さい。但し、お寺さまとしてではなく一人の人間として、あくまでも人間として、この本を見て下さいますように。」

「これは又奇妙なことを言われる。私は坊主ですから坊主として奥さんの句を見せてもらいます。」

「いやです。そんな、お寺さまぶって私の川柳を批判なさるおつもりなら句集をお貸し致したくありません。この一冊はこれまで生きて来た私のすべてと申してもよいのです。今更あなたのお説教などききたくありません。私は地獄へ落ちる女です。心を飾った修身の句は一句もないのです。泥まみれのウソのない私の心、真実をこの本に収めたのです。もうあなたにごらん頂くのは止しましょう。」

若い僧は急に光った眼をまっすぐに私へ向けて坐りなおした。

「奥さん、坊主は人間ではないのですか？　坊主だから、教師だから、ニコヨンだからといってあなたは人間を区別なさるのですか！」

私は一瞬ひるんだ。

「奥さんは実に心ないことを申された。坊主の心でなら句集を見て欲しくないと言われましたが、もう一度だけ答えて下さい。坊主はなぜ人間であってはいけないのですか！」

私たちはしばらく無言でにらみ合っていた。時計の音がいやに高かった。僧の瞳と私の心の中で自問自答が火花した。

ややあって私はぺたりとそこへ手をついた。

「ごめんなさい。私が悪うございました。そうでしたね。お寺さまも一個の人間であることに違いはないのでした。見て頂きます。どうぞ存分に御批判下さい。仏教大学を出られたからといってあなたをおそれることはないのでした。そうね。私たちは同じ人間でしたのね。軽はずみなことを申上げて失礼いたしました。」

やがて戻ってゆく僧の下駄を揃えながら私は彼を見上げて尋ねた。

「あなたはこの世の中の何に一番興味をお持ちですか？」

「現象です。」「え？」

「世の中のすべての現象に興味を持っています。雑草が一番好きですが、人間関係も又ひとつの現象ですから大いに究めてみたく思っています。」

僧の下駄の音が消えて雨あしがしげくなった。毎月々々機械的にやって来て義務としての経をあげお布施を持って帰ってゆく、その人にこのような人間味がかくされていたとは――。私は茶器を片付けるのも忘れて仏間に坐っていた。語れば通じる心がこんなところにもあったよろこびの中で―。

私は先刻からひとつのことを考え続けている。それはあの僧がのこしていった言葉のひとつ。〝奥さんはどこか普通の人とは違ったところが見えました〟なぜだろう？　どこが違って見えたのか？　平凡な主婦である私。その平凡に徹することを常にのぞみながら徹しきれない面がある宙ぶらりんな存在。それをあの人は見破ったのであろうか？

試みに《国文学の解釈と鑑賞》昭37年9月号の女流作家の秘密特集をひもといてみる。中に瀬戸内晴美自らが〝女性作家になる条件〟なるものを書いている。もちろん小説家としての話であるが川柳にも通じて面白い。

①女であること②男性的であること③美人でありすぎぬこと④天賦の才能あること⑤うぬぼれ心の強いこと⑥しっと心の強いこと⑦悪妻となる要素を持っていること⑧ストリップする度胸があること⑨恒産を持つこと⑩孤独に耐える持ち主であること。

さあ、さあ、さあ、と追いつめてゆくとかなりの項目にわたって泥を吐いてしまう私の中の作家条件。それと同じ比重で、いやもっと／＼主婦でありたいと念じる私の中の私。このふたつがぶっかりあって私の川柳は生まれる。幸福の絶頂にある時、人は川柳など見向きもすまい。又、不幸のどん底にある時も人は川柳など作ろうとしないであろう。適当にしあわせで適当に不幸であって……そんな川柳家と称する人々がウヨウヨとおる中で、私の位置は？　と考える時、この中途半端が私にはやりきれないものになる。そこで仕方なく私は現実逃避を企てる。川柳の中で奔放に生きてみる、川柳の中で叫ぶ。川柳の中で自分をみつめ、真実を摑もうとあがく。川柳。それだけが私の救いであった。生きることのすべてともなった。数年間、私の眼は私以外の何も見ず、私の耳は何も聞こうとしなかった。きびしい「個の世界」で私は自分の穴を掘りつづけた。それが美しい泉となるか或は自らの墓穴になるか、そんなことは考えてもみなかった。土は少しずつ、毎日掘られ、私の両手には血マメがつぶれては又血を噴いた。そんな中で私の誇り得る唯一のものはショベルを錆びさせなかったこと、だけである。私は一日として川柳を忘れなかった。忘れなかったというよりも、離れられなかった、と言った方が正しい。そうして更に幾年か過ぎ、穴の中で私が私の手で摑んだ〝心象と具象の一致〟はいつのまにか新子の個性として悪名を高めていった。女性作家の陥りやすい抒情の溺れ、ひとりよがりな主観の押し売りをどうやって阻止するか、一人で考え、一人で苦しんだ末にやっと摑んだ私だけの境地。それが悪名としてはびこるのを喜ぶべきか悲しむべきかは判からないけれど、人の拓いた、人の通った道を楽々と歩むことを拒否した以上、こうするより外にすべがなかったのだと今にして思う私である。

再び亡妹の命日がめぐって来た。朗々と経を読む僧のうしろで、私はふと軽いめまいを覚えた。句集を返して頂く約束の今日である。どのような言葉が添えられるであろうか。川柳には全くの白紙であるという、そして人間であることをあれほど主張したこの人の背に眼を瀞らしながら私はその言葉を待った。若い僧はしばらく姑の世間話に合槌を打っていたがやがて無言のまま沓脱の下駄に足をかけながら、ひょいと思い出したようにふり向いて静かな声でこう申された。

「奥さん、あなたは真実というものの美しさを知っておられる。だからこそ哀れなおひとだと思います。あと一ヵ月次の御命日まで貸しておいて下さい。正直言って川柳がこれほど考えさせられるものを内包しているとは存じなかったことでした。私は坊主を止めたくなりましたよ。イヤ今のは冗談です。失礼。」

だからこそ、だからこそ哀れなおひと……他人事のようにつぶやきながら私は茶器を拭いていた。

人はみな新子を強い女だと言う。先日届いた未知の女性の便りにも句集の読後感として、「あたしの恋を蔑む涙なら　母よ」の一句をあげ、〝おそらくは邪恋であろうがそれを真向から／あたしの恋＼とうたい上げたあなたに同性としての拍手を惜しまない。しんの強い勇敢な人だと思う。つねに周囲をさわがす女性の敵であるやも知れないが、ぜひ一度会いたい〟といった意味のことが書いてあった。一句の真意を読者に正しく理解してもらうことは不可能であるし、万人は万の心で句を鑑賞するのであれば、その句意がどのように受取られようとそれはもう仕方のないこと。私は自句自解はきらいである。したがって、私の句に使われる言葉の抵抗や激しさから、読者が新子は悪女だ、強い女だというイメージを抱かれることはすべて私の未熟のせいであると甘受して来た。

／＼服の色＼／

図太い女狐、地獄の使者
その女は真赤な服を着て

「新子」と名乗っているそうな
あわてた私は鏡を見る
鏡は嘆って、拭いても　拭いても
くもってしまう
あなた　あなた　私の服は何色ですか？

オマエノネゴトノツキアイガデキルカイ

誰にも
見えぬ服の色　さみしさは
地を貫いて地に還り
わたしはじっと坐っている

× × ×

私の川柳はどの一句をとりあげ

金泥集

麻生苞乃選

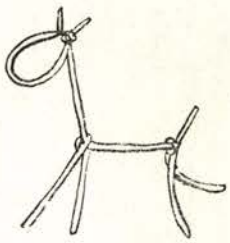
「窓」

クレヨンの電車の窓にボクとママ　阿茶
窓と窓しのび返しを高くつけ　同
アパートの窓それぞれの花さかり　同
手不足の二階の窓は閉めたまま　同
窓越しに月と無言の行をする　同
窓越しにニュースが出入りする社宅　清子
唯一の窓をさえぎるビルが建ち　同
カーテンを替えた窓から初夏の風　同
ビルの窓まだ一ところ灯が消えず　同
窓窓窓団地次々灯がともり　同
男子志を立て学窓にはいらず　一栄
足場ないビルの窓拭く人見上げ　同
闘病の窓へ鉢植並べられ　同
夕立の降りこむ窓を閉め忘れ　同
窓の破れたとこに馴れてる旅役者　きさ子
脱稿へ窓の五月のうるわしく　同
一つ忘れた窓が空巣の感に負け　同
窓をあけたら道行く人の話声　カネ女
窓と窓お早うさんもリズムつけ　同
二度三度開けば窓口おこり出し　徳子
新緑へてるる坊主窓へつり　同
縁のない顔写すだけの飾り窓　酔夢
退院も間近ガラス窓拭いてみる　同
三日月にのぞかれている窓をしめ　すみれ
窓と窓目と目で合図する二人　同
春うらら窓あけに立つ袖カバー　周甫
窓の奥明日は別れる二人住み　みさ子
ランドセル帰る頃かと窓をあけ　トメ子
頬杖の窓に孤独の雨が降り　勝子

次回題「遮断機」　六月末

金泥集への投句は川雑婦人友の会の会員に限る。入会希望者は大阪市南区二ッ井戸町二三山川医院山川阿茶理事長宛に申込まれたし。会則をお知らせする。

（電話大阪二一一局四五四三）



私の好きな愛慾の一句

——到着順——

（下）

○ 石川県　桜井六葉

好きな句は多いが、特に一句をと言われると困るが、柳だる初篇の

やわやわと重みのかかる芥川

などは好きな句の中である。伊勢物語にある「女え逢うまじかりけるを—ぬすみいでて、いとくらきにゐてゆきけり、あくた川という河をいきければ—」と在原業平が二条の后をつれて逃げるところだが、この故事を知っていれば、この句に官能的な匂いが、感得される。

女人をおんぶして川を渡ったであろう、それに夜のとばりが降りて、露にも気をくばる男の背に女の重みがかかる、この句を上代文学の伊勢物語が包んでいる。

この句のずいには階級と時代を超えた愛慾の官能が漂っている、とそのように私には感じられる。

○ 京都市　大鶴喜由

愛慾を分けて、純愛の慾望と性愛の慾望とがある。母が狂気のようにみどり児を頬ずりしたり、男が女にやさしく激しく抱ようしたりするのを見る。この二つの状態は清く美しく決してけがらわしいものではない、しかし、これに愛が伴わないと遊戯になる。私は愛慾は心が触れるものであり、皮膚（粘膜共）が触れるものであると思う。幾多の句を読み、話を聞き、実態を見て来たが、遙かに文字ではいいつくせないあるものがある。それはそこに自分が登場していないからで、詰局愛慾は自分だけが知る自分のものであると思う。

その頃の女はいうがままになり

（路郎）

思い思われてやっと世帯持たれてからの日日好日の姿であると思う。私は愛慾を思う時何時もこの句が頭に浮かんでくる愛慾の句は美しい想像の世界を第三者にささぐれば、それで役目が殆んど達しられているのではないかと思う。

そのあとはその人が自分にくらべて夢を描いてもらえばいいと思う。

お互いに考えて見たいことだが、折角結ばれた愛慾は何時何時までもこれを入念に育て上げねばならない。それには昔の人はこんないいことを教えてくれた。情熱を燃やせ。知恵を働かせ、努力を惜しむなと——これを怠って愛慾にひびが入ると次の詩をかなえてあげることになる。

イギリス詩人ダンの「愛の制限」の一節

鳥がもし夫のそばをはなれて
どこかで泊って来たら離婚されるでしょうか
けだものでさえ結婚してから
ほかで恋愛もできるというのに
人間だけいけないのはおかしい

（永川玲二訳）

○ 大阪市　堀口塊人

だからこそ哀れなひと、と若い僧をして言わしめた私ははんとうに弱い哀れな女であるのか、それとも世評通りの人間であるのか。それは私自身にもわからない。

「姫路にはたしか時実新子という柳人がいましたね。一体どういう人ですか？」

「ああ、あれかいな。どうということはあらへん。平凡なオバハンや。小説のきれはしみたいなものを川柳やいうて出しよるが、あんなの川柳と違いまっせ。問題やないない。

たとえばこのような会話が風に乗って運ばれて来ても、私は泣きはしない。面と向かってなりと、あるいは卑怯にも大の男が蔭口きいての中傷にしろ、私自身に対してならどんな罵詈をあびせられても、私は泣きはしない。

その私が或る日のこと文字通り号泣した。何が原因か何の理由でか知らないが、「句集新子を破り捨てました」という一枚のハガキを失名氏から受取った日のことである。私は目を疑った。何度もその文字を見た。夢であってほしいと頬をつねってもみた。じーんと耳鳴りがして口の中がカラカラになった。次の瞬間、私は実に生まれてはじめてという大声をあげて泣いたのである。

「新子」が破り捨てられた！　私のいのちである句集新子。私はすぐにも汽車に乗ろうとした。恨みがあるならその人の前に躰を投げ出してどのようにも打擲してもらおう。しかし、「新子」を破ったことは決して許せない。元の姿にして「新子」を返してもらうのだ。「新子を返して下さい。新子を返して返して!!」慟哭の中で私はからだにはげしい痛みを感じていた。私にとっては自分の生身を撲たれるよりも句集を引裂かれる音の方が痛かった。けれど考えてみればどこの誰だかわかりはしない。汽車に乗って一体どこへ行こうというのか。又たとえ日本中を歩いて探し当てたとしても、「金を出して買ったものを自由にしてなぜ悪い！」と言われればそれまでではないか。バカな私。一冊の新子のために私は涙が涸れるまで泣いて、今もまだあきらめきれないでいる。かわいそうな「新子」。

反響と批判のおたよりはリンゴ箱にいっぱい！　句集を出してはんとによかった、うれしかった、と私は思う。しかし、句の道はどこまでもきびしく、そして孤独である。誕生のよろこびに酔うたその日に、もう「新子」とのサヨナラを書った私である。この友愛のリンゴ箱を心の襷に、その御批判の取捨をあやまたず、これからもまっすぐにひとすじに歩きたい。

「新子」からの脱皮を期待して下さるのはありがたいが、一夜のうちに蝶になるサナギになれない私はただ、一日一日を大切に、女として人間としていっしょうけんめいに歩くだけである。昨日の自分に劣る今日でないことをのみ念願として。

わてかつて醉ふてたさかい今朝の髪

はずかしながら小生の作、内容は申すまでもなく、ある若き日の、とある春暁の、思い出にて候、今でに、禿げたおっさんと、白髪のばあさんに、相成候、かつて、夏目漱石嘆じて曰く

生死因縁無了期
色相世界現狂痴

○　青森市　工藤甲吉

男ばかりが忘れずにゐる

（雀郎）

若いころ、私が口語歌をやっていたときの先生で郷土出身の鳴海要吉（一昨年七十六歳で死去）は、晩年、われわれが歌碑を建てるにさいし、その場所について意向をただしたところ、ある寺の境内を強く望した。そのわけは

世の嘲い迷いもよそにどうかして
あなたの墓のそばにねましょう

という歌でわかるが、先生には十二、三歳のころ、から生涯、心の中を打ち明けることもなく思いつづけた「久遠の恋人」が、あったのである。われわれには、その「久遠の恋人」の墓のあるその寺に先生の分骨を埋葬すべきかどうかに、大いに迷ったものだが、このこととこの句を思い合わせるとき、この句はまことに名句と言わざるを得ないのである。

「男いのちの純情は…」は、昔の流行歌の一節であるが、男とはそんなものであるということを、世の女性は、ようく知って置いてもらいたいものである。また、川柳をやり始めた昭和の初年、片っ端から先人の句を読みあさったころ、確か川上三太郎編「新川柳大観」「現代川柳一万句集」などの恋の句の中で、川上日車の句にいたく感動させられたことを今も忘れない。それらの句はいちいち思い出せないが

恋すれば苦し棄つれば物足りず

といった非常に激しい調子の句だったことが、記憶に残っていて懐しい。

○　熊本市　大島濤明

慾望、恋愛、セックスのそれ等は人間の本能であるだけ、誰もが心の奥に蔵しているものである、とは言えこれが余りに露骨であったり、表現が下卑であっては却って不快さえ感ずる。末摘花を見ても現代作であっても、読んでいて微笑を催すもの、噛みしめて味のある句にはつい心引かれる。末摘花の中で私が推賞したい句は

表畑ざわざわざわと二人逃げ

である、沢山の猥句の中で誠に上品であり、読んで少しの不快も覚えない。中七で麦の暢び具合が思われ、座五で羞恥と周章さとが窺われ、ほのぼのとした春の野良の陽射しと、のんびりした郊外の悠長が偲ばれる。

次に表現技巧のうまさに敬服する句に

ゑいやっと夜這いは足へ辿りつき

この句はその状況が如何にも巧みに詠破されている、上五の「ゑいやっと」でホットした様子が窺われ、座五の「辿りつき」で足のもとまで到着した苦心惨胆の様相がにじみ出て来るのである。

× × ×

古い川柳の友「小林若八」作句上手であり、猥句に至っては更に得意で「現代末摘花」と題して数百句をものしていた。その若八の作に

海水着女に無駄な皺がなし

の句がある。この句はよく味わい、よく想像すると女の肉体から性器までも連想させる、しかし一読して決して不快は覚えない。

因みに小林若八は大連に於ける川柳の草分けで私の先輩である。黙々として多くを語らぬが、咄とユーモアを飛ばす愉快な男であった。終戦と共に満州から引揚げ。郷里群馬県に余生を送っていたが一昨年他界した。同君の現代末摘花が今は如何になっているか、を憶い故人の冥福をお祈りする。

一鶴逝く

一鶴・杉本鶴吉君（不朽洞会員）が、四月二十一日午前十時十五分、貝塚市名越千石荘の病棟で逝去された。一鶴君は大正十四年五月七日岸和田市の生れ、昭和三十七年四月不朽洞会員となり、それより先に、千石荘での体温川柳会の重鎮として、梵鐘君らと活躍、川柳作句を楽しんでをられたが、四月十六日、急に一時意識不明となり、主治医の全力傾倒漸く意識回復し、酸素吸入を続行しておられたが、二十一日病革り溢然として逝かれた。哀悼に堪えない。

翌二十三日朝、キリスト教による告別式が執行された。享年三十八歳。

一鶴句抄

生きている意義へ感謝の箸を持つ

男の中の男みるよな夏の雲

もったいなくも朝風呂へ陽がおどりこむ

だんじりへ医局の窓もあけられる

夫人同伴ゾロゾロッと御訪米

竹の節みたいなものなりお正月

空気の重さよ辛うじて生きる身に

道ならぬ恋を作家はあきもせで

寝化粧のみだれ雪とけ見るごとし

二号の真実しげしげ見舞に来

キリストを話せば鼻であしらわれ

計算された愛のひややかさ

看護婦まで金持のベッドへへつらいぬ

闘病十五年目に突入

娑婆とはかくまで遠きものなるか

健康をよこせとストが出来るなら

ヒステリックな女患の笑い肌を刺す

一路集

曲り角

友淵貴山選

眉書がほしい男の曲り角　秀峰
躊躇している場合でなし曲り角　藤波
大それた事を十代の曲り角　同
曲り角ベタルは一寸思案する　祥月
いらいらがかくしきれない曲り角　圭水
ビタミンを愛用してる曲り角　同
裏町の曲り角にも陽があたり　周甫
賃上げのストも政治の曲り角　寿美司
曲り角分り自らハッスルし　辰始
出世街道曲り角には目もくれず　酔夢
停年を迎え一家の曲り角　代仕男
信心が湧く人生の曲り角　十九平
小走りに曲る和服へ目が走り　静波
倒産の噂あそこも曲り角　万竿
言い過た悔が尾を引く曲り角　和三郎
人の世に迷いの多い曲り角　ろ亭
曲り角曲れば富士の見える故郷　雄々
曲り角地蔵不運な目に出合い　春己
曲り角に来た人生を見直され　松風
演技力女優と妻の曲り角　晃男
曲り角に来たか近頃酒の量　雄声
十年目毎に出合った曲り角　恵二朗
あわてまいゆっくり行こう曲り角　同
地蔵尊曲り角へと御栄転　判志
曲り角車掌器用に釣銭をくれ　涼人
値切るのを妻にまかせて曲り角　隆史
曲り角そこで涙が堰を切り　千翁
矢印はこうおいでやす曲り角　光郎
曲り角へ来ている社運訓示する　保夫
曲り角地蔵へ新旧モメ続け　八九寸
曲り角へ来て半生をふり返り　天目
二度目の浪人また人生の曲り角　旋鳳
曲り角ここから地価もグンと落ち　愛鳩
曲り角バトン持つ手をふり回し　伊津志
曲り角からは人眼をさける仲　宗太郎
泣きながら曲り角まで送って来　たけお
不渡りを握り我が社が曲り角　季鳥
曲り角外科医がほしい土地に見え　新雪
曲り角に立って思案の腕を組み　杏花
振りかえる過去美しい曲り角　宗義
曲り角すこし丸味の径がつき　春子
曲り角知って若人突っ走る　旭峯
曲り角是れも試練と思えども　古心
曲り角なんぞのビラを貼るところ　卯之助
親が子に従う齢も曲り角　同
曲り角誰れともない手をはなし　素身郎
曲り角転んだ上を越えて行き　和郎
佳
色あせたのれん行かせぬ曲り角　宗義
もう一度胸に手をおく曲り角　野迷路
おみくじにからかわれてる曲り角　光道
曲り角此処から財布空になる　可住
敵意背に感じゆうゆう曲る角　静水
曲り角女は本気で死ぬと言い　九呂平
意地捨てて追いすがりたい曲り角　凡子
下積みは曲る角さえ見当らず　和郎
曲り角銀行に僕は用が無い　生薑
七人の敵に向かった曲り角　三五島
人
曲り角ポストの肌を撫でて折れ　滋雀
地
実印を変えても見たい曲り角　木魚
天
曲り角もう金策の恩忘れ　むじな
軸
言いなりになりたくは無い曲り角　貴山

混浴

後藤梅志選

思い出になる混浴のローマ風呂　秀峰
団体で来て混浴にはしやぎおり　光道
混浴の川湯を話す旅の味　辰始
混浴にひたりほろりとする心　祥月
新婚の旅で二人の家族風呂　藤波
ゆで蛸になっても混浴まだ浸り　光郎
混浴の岩風呂へ空想果てしない　保夫

明治・大正柳誌巡礼

奥津啓一朗

大正十四年四月十五日、川柳みやこ、七篇、四六判和紙袋綴三十四頁、東京市日本橋区薬研堀四五（坂下方）都川柳会発行、編集発行人前田源一郎、一部廿五銭。

坂下　也奈貴

妻の留守ただ一合の酔に寝る

前田　雀郎

夜鴉に女世帯は冴え返り

近藤飴ん坊（武玉川往来）正岡誇（川柳唐人語）川村花菱（鶴の一声）川上三太郎（花柳百態）藤田小次郎（近藤飴ン坊老の覚醒を悦ぶ）雑詠前田雀郎選、募集吟字佐美めなみ選（薬）等が載っている。

五月十日、阿まさけ、第一号四六判横綴十六頁、東京市外品川町北品川三ツ木九八八川柳あまさけ吟社発行、編集発行人二条孝徳、非売品。

野田　女神丸

ヒステリー泣いて笑って怒ってる

二条　一郷

銭湯へ子供は遊ぶ気で這り

藤原木娘（私が川柳への動機）野田女神丸（読んで呉れ給え）課題吟諸橋升八選（紙）藤原木娘選（意地）大出一尚選（遅れ）句会詠草等が載っている。

巻頭「あまさけ」発刊に就て

私等は川柳と言うものに就ては生い抜けの初心者ですそれで川柳誌等を出す

混浴の度胸女性の敵ならず　八九寸
混浴で女に石鹸借るなじみ　天目
混浴がまんざらでない苦笑い　千翁
混浴に顔赤らめぬ大年増　雄声
混浴へ背中の竜はうずくまり　旋鳳
混浴へ痔せた男の意くじなく　可住
混浴を楽しんでいる亭主族　歌子
療養の娘が混浴へためらわず　愛鳩
混浴の宿の女中の初々し　静水
混浴の女器用に磨きあげ　同
混浴はこわいと照れている若さ　九呂平
混浴へ男一人で来て慌て　宗太郎
混浴に恥じらいもなき妻の顔　凡子
混浴は女ばかりではいりかね　たけお
混浴に夫婦はなれて眼で笑う　李鳥
ただ覗くだけの混浴妻と来る　隆史
混浴と聴き一番に申込み　滋雀
北海の街で混浴あかおとしろ　亭
混浴のできる温泉宿をより　雄々
銀婚の妻混浴へ悪びれず　春己
山乙女乳房押さえて混浴す　晃男
女体ゆらゆら混浴の底が透け　静波
混浴にまだ恥らいのある夫婦　代仕男
混浴は年寄りだけの声となり　木魚
混浴は土地の人らし露天風呂　新雪
混浴に抵抗もなし老を知る　酔夢
野天ぶろ(おんせん)もなく入りまじり　寿美司
混浴をあてに来たのが二三人　むじな
混浴へとっさに困る目のやり場　素身郎
混浴へ子(はかか)わりもなく無邪気　夘之助
混浴の活字が太い案内書　三五島
混浴の土産話に座がはずみ　宗義
混浴の女もやもやもやと浴び　春子
混浴が目当山の湯よくはやり　杏花
混浴の端と端とに一人づつ　圭水
混浴も夜中のびのびして這入れ　古心
混浴へ子供を連れて気が軽し　十九平

佳

混浴の湯槽真ん中だけが空き　涼人
閉めてない家族湯に恋千潤びる　和三郎
混浴の湯槽タイルもピンク色　十九平
混浴場更けて女中の群となり　代仕男
混浴へシャツター切ったのも知らず　旭峯

人

混浴へ男一人はちぢこまり　忠博

地

混浴の話題子の無いことに触れ　恵二朗

天

混浴へ衆を頼んで女子大生　生薑

まきぞえ

小西雄々選

まきぞえをくわせた方が助けられ　柳宏子
麻雀のまきぞえ隣室夜をあかし　阿茶
まきぞえに出来ず子供に遺書をそえ　文秋
倒産のまきぞえ食ったないしょ金　どんたく
まきぞえに世間の目ただ笑うのみ　半月
まきぞえの潔白者が内気なり　新雪
まきぞえの瘤とも言えず労われ　木魚
まきぞえを食うた左遷の佗しい荷　代仕男
まきぞえと思う小言が耳を抜け　和三郎
まきぞえの繃帯(マイク)にかこまれる　春己
まきぞえになっても悔いぬ愛に生き　晃男
まきぞえの左遷ローカル線にゆれ　恵二朗
まきぞえで大物と一緒に写される　雄声
まきぞえの踏切事故で遅刻する　李鳥
栄転のまきぞえ食った平社員　保夫
まきぞえの残酷夕刊四段ぬき　八九寸
罪のない児を道連れにした心中　藤波
急停車ひたいの瘤をさすってい　歌子
まきぞえを食うて証人台に立ち　愛鳩
まきぞえにされた命の短かすぎ　静水
まきぞえが三文判だと言い逃れ　九呂平
まきぞえにされまい末っ子庭を掃き　凡子
まきぞえで野次もついでに引張られ　たけお
まきぞえでつかまったのは雑魚ばかり　むじな
下請を倒して終ったストライキ　宗義
部下の事故まきぞえくって勇退し　杏花
まきぞえの猫は蹴られた慌てよう　卯之助
急援も雪崩れに吸うて山怒る　生薑
判一つまきぞえ食ったあほらしさ　圭水

佳

大物をまきぞえにして名があがる　十九平
鰯網のんきな蛸が引っかかり　涼人
上の子を叱れば下の子へあたり　滋雀
見物がまきぞえ食って西成署　琴女
まきぞえになるまい栄螺(サザエ)ふたを閉め　松風
まきぞえに足をとられたストつづく　千翁
まきぞえを食い一封を包まされ　旭峯

人

まきぞえに一升提げて詫をいれ　古心

地

まきぞえにうちの子供も叱っとき　静波

天

税吏きた余憤に猫は蹴とばされ　光郎

軸

災難というまきぞえの多いこと　雄々

なんて陋分生意気な連中だなんて言われる諸君もありませうが、私等は私等として不出来乍らにも川柳と言うものを作って、そしてせめて半人前位に味う事の出来るように研究して見たいと思うのであります云々

第三号より堅に休裁替る、第六号（大正十四年十月十一日刊）以下不明。

柳志寸言

本多　柳志

◇昔は大学出に稀少価値があった。今は大学出でない方に稀少価値がある。

×

◇他人の作品をどうのこうのと、批評して先輩顔をする作家達よ。一ぺん貴方の作品を、見せてやって貰えませんか。

×

◇生きている人にも勲章が貰えるらしい。あんなものを白昼而も素面で、ぶらさげて歩く丈の、度胸と稚気があった連中の特権意識が、国を亡くしたのだ。気になる。

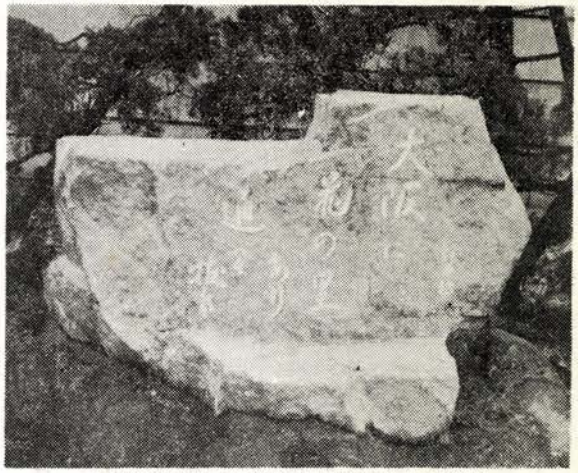
×

◇川柳作句のキーポイントは、事物の普辺性の中に特殊性を発見する事である。

×

◇文芸の世界では、うそのようなほんとうよりも、ほんとうのようなうその方が珍重される。うそをつくならはげないうそをつく事だ。

柳界展望



本田溪花坊氏の句碑が大阪造幣局内に建碑された（記事参照）

句会

▼本社六月句会は八日（月）午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。柳友お誘い合わせの上、多数のご出席をお願いする。▼七面短詩クラブ川柳部句会（和歌山市）は五月七日午後六時から奥新和歌の浦、魚又楼で開催された。▼南海電鉄川柳会（大阪市）五月句会は、二十一日午後六時から難波親和クラブで開催、▼コクヨ川柳会（大阪市）五月句会は二十九日（金）午後五時半からコクヨ株式会社会議室で開催。▼大阪逓信病院川柳会五月青葉吟行は三十一日（日）午後三時から奥新和歌浦、魚又楼で開催。▼川雑岡山支部句会は浜田久米雄国鉄退職記念句会として四月二十六日（日）午後一時から岡鉄クラブで開催、京阪神、米子、竹原からの遠来の出席者も多数あり盛会であった。▼川雑下関支部句会は四月二十六日（日）蘇人居で開催。▼川柳たけはら（竹原市）五月例会は四日（月）山内静水居で開催。▼川柳並木会（笠岡市）十周年記念、公民館川柳クラブ十三周年記念句会は四月二十五日（土）午後一時から公民館長ら来賓多数の出席の下に開催、木山遠二氏が代表で挨拶を述べられた。▼鈴木可香氏の還暦祝賀句会は四月二十六日（日）麦舟居で開催。▼「川柳人」三百八十七号は故井上信子女史の七周忌を迎えるに当たり、井上信子追慕句集として昭和三十九年四月十六日発行された。路郎主幹は同誌に故人を偲んで作品を寄せられた。▲堺市文化団体連絡協議会主催、食満南北翁を偲ぶ川柳句会は、六月十四日午前十時堺市南旅籠町、南宗寺において開催、兼題「酒」「作者」「宿替」「芝居」の四題、なお同日、同寺において「南北祭」として講演を初め舞踊吟詩等種々の催物の外、南北の遺品の展観等会場いっぱいに繰り広げられる由。

写真説明――前列左から雄々・日呂志・佐加恵・一声・月・水断・鮫虎狼　中列左から薫風子・正一・方大・水客・久米雄・東岬・葵丘・万的・静水・照路　後列左から客遊子・鉢月・忠三・素身郎・三林坊・和子・哲郎・鼓草・鵬士・宗義・演風・秋月・千翁・たつみ・幽谷・礎石・一路・白後子・柳五郎・筆舟・三平の諸氏。

風田久米雄退職記念句会―岡鉄クラブに於て（四月二十六日）

▼第十二回蟹の目川柳大会は昭和三十九年七月十九日（日）正午から金沢市山ノ上町小坂神社社務所で開催。兼題、屏風・鶏・和服・花紛・素足・罠・乱れる各題三句以内、投句は五十円封入の上、金沢市片原町三六蟹の目川柳社宛。▼本田溪花坊句碑建立記念句会が四月十八日（土）大阪造幣局クラブで開催され北川春巣氏が出席された。▼どんぐり川柳会（羽曳野市）春の川柳まつりは五月五日午後一時から羽曳野病院講堂で開催。当日、指導の川村好郎氏と同道で橘高薫風子が慰問して来た。▼川雑鳥取支部句会は五月五日砂丘に連らなる十六本松に吟行、快晴に恵まれ盛大であった由。▼高須唖三味氏を励ます会（東京都）が川上三太郎、村田周魚、冨士野鞍馬、根岸川柳、山路星文洞、塚越迷亭諸氏の肝いりで六月六日午後五時から東京都文京区高田老松町七六新江戸川公園（旧細川侯庭）松声閣で催される。五年前、交通禍で隻手になられた唖三味氏が古稀を迎えられたのを機に、今後の健在を祈る意味での集い。▼川雑備前支部創立十五周年並びに浜田久米雄帰郷記念川柳大会が五月二十四日午後一時から吉永町公会堂で開催され、本社から北川春巣副主幹が出席盛会だったと。

消息

▼路郎主幹夫妻は五月四日に京都の都踊へ招待され帰途、木戸へ立ち寄り京の川柳人に電話する予定が、木戸が店を開いていなかったので、久しぶりに丸山の平野家で、新緑を眺め芋ぼうの昔を萱乃夫人に語りながらの盃を傾けて帰阪された。▼阿部佐保蘭氏（東京都）は五月六日十寿会のメンバーと奥の細道探勝の旅に出られ、塩釜瑞厳寺から松島を遊覧、七日は平泉、中尊寺と訪ね鳴子温泉で旅塵を洗って一泊された。「芭蕉にはすまない汽車や船の旅」▼丸川初甫さん（青屋市）はこの

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社　大阪市北区源蔵町 5 (361)9373代

支局　東京都千代田区神田鍛冶町 2 (291)9629代

名古屋市昭和区村田町 2 (88) 9069

程鷺取鉄道診療所を最後に国鉄を退職、五月三日鹿児島、宮崎の旅を楽しまれた。「フェニックスの並木がつづく宿の窓」▼河相すゝむ氏（西宮市）は四月二十二日社用で尾道へ。

街は素通りして因島の日立造船所を見学、路郎先生の郷里尾道も近代化されて千光寺山にはロープウェイもあるとか、五月上旬には萩市へ公用私用の旅の予定で忙しい限りですと。「少少の疲れも旅の面白さ」▼飯降白香さん（奈良県）はあやめ池の方へ転職の心算でおりましたが、やはり室生村から離れることが出来ず、又逆戻りの生活を続けておりますと。▼小西無鬼氏（兵庫県）は四月篠山ロータリークラブで講演した川柳の話が好評を博したので、近日「老人クラブ」でくだけた川柳の話をする予定でおられる。川雑篠山支部句会も大木枝葉氏が一切の世話をして下さるので大いに軌道に乗っておりますと。▼大西八歩氏（鳥取市）は二月十一日に初孫が出来たので、現在新緑の空に鯉のぼりを泳がせてよきグランドパパぶりを発揮しておられる。▼麻生路郎主幹は五月十九日午後二時大阪府労働会館で関西国民文化会議主催の憲法をまもる学者と芸術家のつどいに出席された。▼伊藤茶仏氏（小松市）は公私多忙でご無沙汰をしたが、本年は還暦を迎えるので句集を思い立っているとのこと。母が満九十二歳で毎日お寺詣りをしておりますとて句を寄せられた「九十二の母に還暦てれている」▼黒川紫香氏（大阪市）は北区小深町三八株式会社新阪急ホテル資材部配給課長に就任された。同ホテルは八月に開業される由。▼島田兼孝氏（大州市）は愛媛県薬剤会長に当選就任された。夫人は大州市結婚相談所長をされていられる由。

句集

▼酒井路也著「家路」が昭和三十九年四月十八日富山市千歳町一丁目番傘えんぴつ川柳社から発行、柳歴十年の著者の四百六十八句が掲載されている。B列6号百三十頁、定価二百円。「心にはふるさとがなし赤い爪」

句碑

▼本田溪花坊句碑が大阪造幣局開局記念日の昭和三十九年四月四日、同庁舎東横の芝生内に建立、名物の「通り抜け」に一入風趣を添えることとなった。「大阪に花の里あり通り抜け」

弔

▼杉本一鶴氏（貝塚市）は千石荘で結核を療養中であったが、五月二十一日午前十時十五分死去された。年三十八。二十二日午前十時からキリスト教による告別式が行なわれた。哀悼。▼中島小石さん（堺市）の東京のご母堂が五月十一日、脳溢血のため永眠された。行年八十三歳。謹んで悼む。

改号

▼今西生薑氏（大阪市）は章雅と改号された。▼高野むじな氏（新潟県）は、もとの雅号「不二」に改号された。

転居

▼槇紫光氏は左記に転居された。
愛媛県周桑郡壬生川新田富士紡川新田社宅八号

電話開通

▼関戸宗太郎氏（小松市）宅に電話が開通した。小松二二局七八五七番。

正誤

▼本誌四月号三十頁下段五行目の句、失名とあるは新居浜市賀本昇氏の句に付訂正。（薫）

不朽洞会から

★常任理事会は五月六日午後九時から、千日前アメリカンで開催。
一、路郎先生喜寿、路郎、葭乃両先生金婚記念事業に関する件、
一、川柳まつり優勝楯返還、受与川柳大会に関する件、
一、その他の件、
右の諸件を審議午後十時散会した。
出席者、路郎師、葭乃女史、梅里、栞、好郎、多久志の諸氏。

★常任理事会は五月十四日（木）午後六時から尼崎日産自動車株式会社会議室で開催、
一、川柳まつり及び優勝楯の後始末の件、今夏の川柳大会に関する件、
一、その他の件、
右の諸件を協議午後十時散会した。出席者、路郎師、春巣、梅里、文蝶、栞、好郎、多久志の諸氏。（多）

不朽洞の人々

今西薬局主の今西清光氏

どうびんを頭と章魚は悟り切り

生薑改め（章雅）

曽祖父を入れて四代目、大阪は町人学校懐徳堂の育った処、修養にもなろうと鈍馬に鞭打ち川柳に精進している積もり。川柳を「愚の詩」と定義めいた事を放言、済度しがたい処もあろうが、自分では章魚になりたいものである。生薑をしょうがと読むのも無理があるのでこの際章雅と改めたい。

第百五十九回

大萬川柳

兼題「静養」入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数　五百七十六句
入選　四十四句

篠山　可住　静養へ秘書がてんてこ舞いにあい
大阪　凡子　静養へ逢うてはならぬ人が来る
広島　大八洲　静養の宿をゆすぶる総辞職
鳥取　一保　当選が決まりゆうゆう湯に浸り
新居浜　桂仙　静養に出たと言わして資金繰り
堺　慶之助　血税で悠々箱根の湯につかり
富田林　美房　静養の長さへサラリーだけ届き
和歌山　木魚　静養を訪えば看護婦またかわり
鳥取　法皇子　静養に行くに長編五、六冊
倉敷　素身郎　静養へひっきりなしにベルが鳴り
富田林　東雲楼　静養は知らず仕事の虫になり
大阪　進之助　親の愛秋まで転地せよと言う
堺　圭水　静養もうれしあなたが来てくれる
大阪　文秋　静養から帰る社長へ社の掃除
八尾　弥生　静養の眼に惜しげなく花は散り
岡山　十九平　静養にネームバリューが邪魔になり
西宮　多久志　静養を要すに妻が若過ぎる
仙台　光道　強いられた静養無精髭で居る
石川　宗太郎　保釈金積んで大物静養し
大阪　生薑　静養のつもりと左遷しょげてず
大阪　ゆきを　静養へまだ不渡りを知らさせず
森槻　静馬　静養どころか温泉呆けして帰り
笠岡　桃里　金運に恵まれ過ぎて静養し
秋北　好郎　静養の丹前のまま捕えられ
大阪　阿茶　静養は倒れたままの二号邸
児島　恵二朗　豪勢な静養一升飲んじまい
大阪　痴亭　二三日静養ですと堕ろして来
同　静養の孤独へ雨がしとど降り
大阪　市郎　静養の竿釣れても釣れいでも
同　とろろ摺る鉢持つほどの静養期
米子　雄々　静養をするほど役人仕事せず
同　静養のゴルフへ世間うるさすぎ
笠岡　遠二　医者の言うほど遊んでは居れぬなり
同　二目ほど静養中に手があがり
大阪　梅里　静養の分は揮毫で稼いどき
同　静養へインスタントも鼻につき
五客　大阪　市郎　静養に名をかり大臣策をねり
松原　万竿　ほとぼりのさめるあいだの静養か
富田林　八郎　あっさりと静養せよと献になり
笠岡　遠二　静養の大臣下手な句も作り
笠岡　真奇　どうしても母は静養してくれず
（人）

静養は漁師の真似もする社長
（地）
大阪　晃　静養に金魚の朱のあざやかさ
（天）
大阪　生薑　静養中ですよと妻のすげない手

大萬川柳ベストテン（五月現在）

一　**梅里**　七、〇　大阪
二　**きさ子**　七、〇　岸和田
三　**桃里**　六、五　笠岡
四　**生薑**　六、五　大阪
五　**方大**　六、〇　倉敷
六　**夢虹**　六、〇　豊中
七　**静馬**　五、〇　高槻
八　**柳志**　四、五　大阪
九　**遠二**　四、五　笠岡
一〇　**晃**　四、〇　大阪
一一　宗太郎　四、〇　石川
一二　光道　四、〇　仙台
一三　文秋　四、〇　大阪
一四　弘朗　四、〇　倉吉
一五　美房　四、〇　富田林
一六　真奇　三、五　笠岡
一七　春巣　三、五　大阪
一八　万竿　三、五　松原
一九　木魚　三、五　和歌山
二〇　市郎　三、五　大阪
以下略

次ぎの兼題「動章」五句以内
〆切　六月十日
発表　六月二十日
七月予告「仏像」
〆切　七月十日
発表　七月二十日
投句先
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇
大萬川柳会

風流
東野大八著
人間横丁
B6型　二五八頁
価250円
送費70円
★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）
大阪市住吉局区内万代西5丁目25
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(6081)振替口座大75050

いのちある句を創れ

花地柳壇

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 五月句会（大阪市）

5月6日　午後6時

会場——　千日前 自安寺

新緑もゆる若葉の五月句会。千日前の雑沓を縫うて、会場へ集まる人々、何れも川柳を持つ悦びの人ばかり、殊に閨秀作家の出席が殖えて来たのも目立って来た。

本夕の路郎師の柳話は「川柳は日記ではない」という演題下に「そうですか川柳」「報告川柳」より脱皮して、川柳は斯く作句するものであるとの懇切な、ご指導ぶり、新旧の人々——いずれも多大なる感銘を与えられた。のち席、兼題の披講に入り、本月の不朽洞杯は、南海川柳会の主軸、辻圭水氏の得らるるところとなって、「いのちある句を創れ」の盟約を三唱したのは午後の九時過ぎであった。（摩）

出席者——路郎、摩天郎、いさむ、野迷路、白溪子、圭水、瓢太、泉睦、好郎、滋雀、花梢、すみれ、四郎、清人、喜雄、市郎、痴亭、一栄、清子、舟遊、薫風子、多久志、みさ子、美房、進之助、金蔵、圭井堂、静馬、たつみ、永断、柳志、水客、白柳、凡子、トメ子、柳宏子、梅里、八郎、阿茶、句楽坊、有子、すすむ、栞、庸佑、季貴、葭乃、宏子

兼題「メーンテーブル」　川村好郎選

メンテーブルの御馳走だけは余っとり　どんたく
メンテーブルイエスイエスで切抜ける　黙平
メンテーブル左遷のような顔してず　圭水
メンテーブル新調しました訪問着　一栄
メンテーブルくそ「俺だって」俺だって　美房
メンテーブル乾盃をしてもう居らず　柳志
メンテーブルここは会費の出さぬ人　清人
メンテーブル馳走の味は覚えてず　一栄
メンテーブル元大臣とボスが占め　梅里
メンテーブルへ舞台の顔で礼にくる　梅里
メンテーブル代理の椅子の掛具合　栞
メンテーブルきれいな言葉さがし合い　水客
盃を無駄に貯めてる主賓席　柳志
メンテーブルの冗談から座が和み　多久志
メンテーブルのはかは勝手なこと喋る　水客
メンテーブル恰幅のないのがよく目立ち　阿茶
月ロケット先ずメンテーブルの上でとび　市郎
メンテーブルの真向いにて肩がこり　清子
メンテーブルおれの盃いったま、　静馬
メンテーブルを早く抜けたい二人なり　瓢太
ライバルのメンテーブルは遙かなり　野迷路
メンテーブル手形で悩む顔でなし　圭水
モーニングメンテーブルに名前無く　好郎

兼題「石」　正本水客選

石頭と云われながらも生字引　判志
石橋をたゝいて後手を追うばかり　句念坊
金できてこんどは石にこりはじめ　庸佑
足洗う水には惜しい細石　黙平
追い越した足石段を駆け降りる　八九寸
庭石の一つにもある裏表　柳宏子
いさかうて帰る舗道に石が無し　白柳
石一つ歴史の古さへガイドつき　たつみ
盲人の後から石にけつまずき　滋雀
旧跡の碑さえも邪魔がられ　阿茶
投石へ催涙弾が帰って来　泉睦
石なでて栄華を偲ぶ太閤記　柳志
石に腰おろして雲をみる余裕　栞
石一つ置き替えて見て日曝日　圭井堂
ずり落ちそうな石にのぼって撮るという　栞
城壁の石へ化学の聴診器　進之助
捨石を覚悟の若さ楯つきぬ　清子
神代から石を愛して来た歴史　金蔵
京都まで石を見に行くベレー帽　柳志
石丸るく丸るく清流逆らわず　いさむ
やがてビーナスとなる変哲もない石が　薫風子
原石のヒスイも混る見本市　柳宏子
思いっきり石ぶっけたき凡人の　圭水
石碑の読めない石を撫でゝみる　栞
盆栽の石は手頃の苔が憎り　白溪子
河川工事石をお膳の昼にする　市郎
たばこ屋のたての日覆の重り石　金蔵
石けつて歩く子供に連れがあり　白溪子
トラックに飛ばされる石に似た俺か　永断
石を蹴る心に空しさが残り　市郎
石だけの値打ちだんなあと庭師いゝ　みさ子
石垣のこんなすき間にすみれ咲く　清子
くやしさに投げた小石すぐ自責　花梢
石一つ庭に所を得た姿　すゝむ
石ころの散歩の足にけられて来　一栄
皇族下乗こゝから続く石畳　金蔵
織田作のにおい高津の石畳　滋雀
軽石は軽石の役あり職場の手　清子
黙りこくって石刻む人見てる人　薫風子
コツコツと茶席が遠い石畳　たつみ
石ころのように路傍の人となり　泉睦
石持てば子供の喧嘩めいてくる　白柳
ライターの石に眼鏡の要る年令　清人
雨垂れに五百羅漢の石の色　水客

兼題「手酌」　松江梅里選

飲み足らぬ手酌が銚子を振って呼び　宗義
独り者壁の美人と差しで飲み　静馬
これだけが働きがいと言う手酌　庸佑
こぼすまじ口が迎えに行く手酌　黙平
サービス料とられ手酌で呑まされて　すみれ
ホステスも手酌のママに近寄らず　清人
神さまの手酌を借りるすぎ水　摩天郎
本当の味を手酌に教えられ　水客
手酌でやってくれと一升あてがわれ　進之助
妻も子も手酌の父に慣れて眠る　永断
上役へ手酌をさせぬ気をつかい　白溪子
酒ぐせを知ったか仲居酌ぎに来ず　柳志
子が出来て二杯目からの手酌なり　舟遊
自惚れと一緒に手酌で待っており　柳宏子
一合の手酌が父を喋らせる　美房
此の方が好いと手酌でいける口　すゝむ
三味線が置けず手酌を眼で詫びる　圭井堂
ひとり飲む猪口にひとりの顔うつる　水客
傷心の手酌はそっと振りむかれ　滋雀
思い出し笑い手酌でつぎこぼし　多久志
末席は遠慮会釈のない手酌　柳宏子
うさ晴しするに手酌がつぎこぼし　進之助
サービスがわるいと手酌席を変え　宏子
心から酔えぬ手酌へほしい友　たつみ
末席の手酌へ女遠く居る　市郎
堪忍の手酌へ夜が白みかけ　泉睦
重役が何だと手酌酔っている　柳志
末席の幹事手酌で酔うていず　舟遊

一杯は義理でついだが放っとかれ　阿茶
末席の手酌へ妓詫びて酌ぎ　多久志
手酌でいいと嬉しい心押えてる　水客
手酌とはよきもの目ざし焼いてでも　白柳
勝名乗りうけて手酌の水うまし　梅里

兼題「親子」　**八木摩天郎選**

二代目に片意地丈こ引き継れ　句念坊
生甲斐は歯に衣着せもせず親子　旅風
嫁貰い親子は別の家に住み　半月
銀髪まで親そっくりな利発もの　八九寸
冗談の言える親子に有る平和　宗義
捨てられた子が母さんを恋しがり　すみれ
親知らぬ間に娘親になり　句楽坊
似ないでもいい処似てる子を叱り　永断
年とった時のサンプル母が見せ　どんたく
持つものを持ってこじれた親子仲　市郎
相談欄へ親子みにくい記事で載り　白溪子
進学へ親子の夢はくい違い　清子
親子喧嘩或日宿命かと思い　栞
母親の娘時代を鼻できゝ　花梢
親子とも川柳が好きお人よし　ふき
娘の縁で後妻になった未亡人　句楽坊
母なれば娘なればこその口げんか　美房
親子とも見えぬドライブ怪しまれ　失名
父一人娘一人口笛吹いて来　八郎
親と子の不器用笑う妻の愚痴　いさむ
性病の事も親爺にだけ話し　阿茶
母と娘で同じ人が好きとなり　圭水
子は首席親は遺伝にしてしまい　柳志
未明より嫁く娘に風呂を焚いてやり　八郎
子も親に負けず劣らずよく使い　白溪子
目に見えぬ親子のきずな動悸する　白柳
愛人の魅力へ親子の縁も切り　清人
強情は父にケチなのは母に似て　多久志
老いて子に従う唄も聞き覚え　柳志
各門を継いで親子が婿養子　泉睦
一本を遍路の親子分けて飲み　梅里
親と子が血で血を洗う流れ込み　梅里
寄付やめることで親子の気で揃い　静馬
妖艶な演技で競う嵯峨五十鈴　梅里
能面へ親子ぴったり呼吸が合い　清人
親と子の相違四ツ玉五ツ玉　進之助
子は妻の味方になって争えず　喜雄
むつまじい親子の膝のゆで卵　水客
子の肌着片親などと云わすまい　市郎
イメージの瞼の父の方がよし　栞
親子だと云うのに女将なぜ笑う　摩天郎

席題「空想」　**傍島静馬選**

空想家誰も相手にしてくれず　花梢
空想を実現させて漫画売れ　みさ子
空想が空想でない時代くる　瓢太
若き日の空想果しなくつゞく　清子
宝くじ買うて空想果しなし　凡子
空想は五十年後の月世界　市郎
空想へ自分の年令は考えず　清人
ハイティー空想だけはたくましい　一栄
空想のない日々の重労働　句楽坊
空想を語る瞳の活き活きと　柳宏子
空想は尽きず夜中の二時と聞き　多久志
空想とけなしてならじ子の希望　好郎
画用紙へ子の空想が出来上がり　白溪子
溜息が出て空想も行詰り　凡子
空想に正気かいなとつめってみ　圭井堂
空想やけどとアイデア打診する　柳志
空想に似た商法が図に当り　白溪子
空想の中の女は素直なり　梅里
空想は自由と無口な娘に育ち　水客
無精髭生やし空想たくましい　柳宏子
空想へ妻は淋しく手をこすり　柳宏子
空想に終る生活の設計図　舟遊
空想の夢タクシーへ金忘れ　泉睦
空想をけなして内職手を止めず　白溪子
空想は松下幸之助を抜く　圭井堂
空想家と云われ長屋にひそと居る　清子
空想に頼る夫を不安がり　梅里
空想はまだつゞいている目をつむり　進之助
最後まで空想聞いてたお人よし　静馬

「席題」てれかくし　**本多柳志選**

てれかくし話題さっとかえてくる　庸佑
てれかくし頭を掻いただけですみ　白溪子
ホテルから別々に出るてれかくし　好郎
てれかくし先生はチョクもてあそび　舟遊
良心が少しありそにホテル出る　市郎
てれかくしネクタイ結び直してみ　多久志
てれかくしハンカチだけが知っており　泉睦
てれかくし口程にない現代っ子　八郎
独り言いうて買わずにかえる客　梅里
てれかくし一寸ライター貸してんか　多久志
嬉し涙さとられまいと鼻をかみ　進之助
痛いとこ突かれて急に話題かえ　梅里
てれかくし喫んだタバコにむせかえり　柳宏子
てれかくし閉まった窓をあけに立ち　梅里
星空へ昼間干せないものを干し　市郎
満員車座り損ねた目のやり場　滋雀
てれかくしやたらにテレビ切り変へる　柳志

席題「隣席」　**河相すすむ選**

口笛を吹いて隣りへ坐りにき　水客
上役の隣席だけしか空いていず　白溪子
隣席の頭ます〳〵もたれて来　金蔵
隣席へ肩がこるのが来て弱り　庸佑
隣席の噂家まで持ち帰り　たつみ
隣席へ女女をいおわせる　摩天郎
隣席の美人の視線うごかない　一栄
隣席の主遂に来ず幕となり　瓢太
隣席へ杯せんがわりに座らされ　泉睦
隣席の知らない人から頼まれる　金蔵
隣席を考慮に入れていける口　八郎
隣席の下戸は黙って食うばかり　梅里
予約席気まずい人と並ぶ破目　静馬
お隣の空席二つ気にかゝり　市郎
隣席の二人はよく食べよく喋り　凡子
コップ酒隣も同じ反池田　清人
隣席を意識しながら洋書読む　多久志
緩衝地帯のように間へ坐らされ　水客
招待席隣は遂に来ないまゝ　すすむ

雑川　阿倍野支部句会　（大阪市）

金井文秋報

てれくさい話になって座を外し　圭井堂
通り雨都合の悪い傘を借り　梅里
お手盛の歳費は都合良くまとめ　良
四面楚歌死神に迄みはなされ　生蔓
老のひがみ勝手に四面楚歌にする　一栄
手を握るきっかけと云うさようなら　柳宏子
大根も焚けずに嫁に行くつもり　柳志
ほどほど暮すにしても金が要り　静馬
頭おさえてさようならを言いなさい　文秋
要領よく社用コースの枠で飲み　野菜
つわりとは知らずにおろしを食べさせる　あいき
寄り道のコース鏡に念を入れ　弥生
新入社出世コースに乗った意気　好郎
バイバイと電車の別れあっけなし　清子
末席のてれやへ指名容赦せず　泉睦
てれかたも母の芸妓に教えられ　専翁
人を皆燕雀にして四面楚歌　小松園
一丁羅てれる年でもない筈が　滋雀
姑は都合のよいとこだけ聞こえ　嘉代子
程々をモットーにして家平和　一代
腕章で社旗を待ってるてれくささ　白柳
ほどほどにしときなはれと眼で合図　恒明
さあらぬ程してて虚だけは押えて居　瓢太
信念に生きて覚悟の四面楚歌　双楽
美容食考慮に入れても大根足　八郎
二人だけになりたいコースそれていき　洋敏
偉そうに此の大根も髭はやし　悦子
勝負師の根生いつも四面楚歌　紫永
私鉄スト花見のコース変えさせる　宗義
着任へピンと感じた四面楚歌　庸佑

川雑 玉造支句会（大阪市）

西出一栄報

注射針夢の中でも身にこたえ　正彦
腫れものに触れもせぬ手を払われる　良
苛だてば日曜大工指をつめ　柳宏子
割引の前売切符にコブが居て　八郎
ふり向かれハッと気が付く独り言　文秋
すぐ立って行けば課長の独り言　珠笑
親が来た安堵迷い子住所云い　生薑
お婆ちゃんの迷子で笑いっぱ探し　一舟
迷い子を見せまわってる肩車　風仙洞
顔くしゃくしゃにして迷い子親を呼び　三時
迷い子札付けて迷い子泣いている　半月
迷い子へ苦言を添えて引渡し　清子
騒音になれて故郷の静か過ぎ　あいき
傾いた政治へ夜のダニ騒ぐ　六竜子
ほかすぞと云われておもちゃ片付ける　静馬
嫁がせて跡の始末に気が疲れ　一栄

川雑 ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

親切も限度を越えて立つ噂　柳葉
膀に落ちぬ親切もあり未亡人　拝山
親切も限度があると妻が妬き　泉水
親切な売子で不要な品も買い　カロ女
親切にすれば世間が妬いてくる　紅溪
逆境に友の親切忘られず　あき坊
親切に云うてくれるは女房だけ　浅太
親切が過ぎてうるさい人にされ　同
道きけば親切すぎて迷わされ　平八郎
粒ほどの親切大空高く晴れ　万里歩
親切が過ぎて母親不安がり　斧平
親切は通らず不徳と自嘲す　笑有
親切にしたりされたり旅の空　内海
夫が逝き世に親切の多いこと　英瀬
親切を無にして今更後悔し　紅茶
バスの中席をゆずって断られ　快夢起
道問へば曲り角まで来て教え　暁舟
親切で特価は看板だけのこと　雪女
御親切恩に着ますと口上手　北海
算盤に乗らぬ親切指で消し　三石
親切が過ぎて不仲の友が出来　魔花麗
親切にすれば惚れたと誤解する　同
血筋だよく似ていると祖母は云う　雪女
呼寄の女房を写真とくらべて見　三石
亡き妻の写真取り出し子らと見る　紅茶
陰膳の写真と話す母も老い　美潮
正直に写し写真屋叱られる　麝花麗
写真見て過去は追うまで現実に　内海
空白の恋として置く写真帳　笑有
この若き俺にもあった写真帳　斧平
八ミリがこちらへ向いて固くなり　万里歩
嫌な奴記念写真に威張っとり　平八郎
古写真おぼろ記憶の糸たぐり　北海
事故現場職務の鬼がカメラマン　浅太
一生と記念写真がケリをつけ　同
旅先で撮った写真に妻は妬き　あき坊
苦労のみしたと言わせぬ写真帳　紅溪
まだ若いつもりが写真承知せず　カロ女
写真屋のいつも取巻く地位となり　同
芸術にかこつけヌード写真覗み　泉水
写真攻めお宮の松も嬉しかろ　拝山
観光団高級カメラ派手に提げ　柳葉
写真屋のやたらに顎で顔を決め　暁舟
古稀すぎてヌード写真は手放さず　快夢起

川雑 京都支部句会（京都市）

田中烏雀報

彼女とうなぎを喰ってもつさりしてた　ゆきら
鰻が泣いてる出刃庖丁をとってる　極堂
落丁と知った辞典も使いなれ　紅鳥
落丁を取替えてさて読みもせず　烏雀
拇印おす指紋かすれて幸なき日　王石
探究の指紋に遠く女居る　亀一
停滞す言葉責任なきまゝに　尚平
仮面つけると思想の停滞が消える　枯粒
停滞をしている箒陽にあたり　司郎
テレビに声だして阪神ファンである　白史
母の瞳がたてえ応援してくれる　豊次

川雑 備前支部句会（岡山県）

横山一声報

宣伝の効果を社長信じ切り　伊久野
宣伝は只で呉れそなことをいい　浄美
植木屋の宣伝はどこには花咲かず　静子
酒のみへ酒の看板ばかり見え　久米雄
宣伝も花の下からくり出されの　のぶ子
神様も宣伝をして人をよせ　一声
宣伝のマイクにへそくり又とられ　幸仙
宣伝がよすぎていらぬものを買い　水仙
宣伝のつもりか娘つれ歩き　良江
宣伝は小供を先に釣っておき　秋月
家柄の宣伝ばかりして寂し　三六
宣伝が多くて講演いやすぎ　美枝子
コマシャールの同じ仕草が鼻につき　千秋
茶の会へ出す年頃を着飾らせる　胡風
よろめいた尾灯も角をゆれて折れ　あやめ
貨物列車の尾灯よろめき乍ら消え　東岸
帰りには捨てる桜の枝を折り　鼓山

川雑 篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼報

折角の帰宅へわが家みんな留守　小菊
折角待っていたのにと目尻上げ　千草
折角の桜さのうなら昨日ならみのる
折角の恋をボート屋呼び戻し　初音
折角出たのど自慢だが鐘一ッ　枝葉
決心はしても涙が先になり　一葉
どたん場に追いつめられて決心し　辻
決心はすれど続かぬ神詣で　花月
どうのこうのと決心のつかぬまま眠り　青峯
目のやり場に困る決心聞かされる　氷断
決心したか音痴も声を上げ　村菊
決心がはにかみ乍らプロポーズ　梅枝
決心がつかず五反にかじりつき　可住
腹を切る決心痛と知らぬまま　白猫児
大臣の卵もあらん巣立つ今日　無鬼

川雑 出雲支部句会（出雲市）

尼経之助報

開幕へ三味の音締めをしめ直し　李朋
新婚の二人朝から唄が好き　朱紅
伝統へ親方無心の鉋とぐ　重信
開幕が待てずぱちぱち拍手の音　祥月
出たらめも平気若さの中に居る　好江
開幕の時間狂って野次が飛び　甘茶
我が輩の恋も開幕の春　おさむ
真心に一度ふれて見直され　松風
年一度観爺頭を結いつけ　雅行
伝統の家を当主はもてあまし　岬月
もう一度笑って見せる時の人　晃男
発車ベル若い希望が破裂する　緑之助

川雑 土佐支部句会（高知市）

川竹松風報

お二階を見合に貸して遊ぶ　膳窓花
二階より下を選んだ老い夫婦　呑洋
夜中のサイレン二階の窓があき　勝喜
焼け死んだニュース二階がこわくなり　古城
お土産を下へ分けてる二階借り　幸葉
妾宅が見える二階のわび住い　天花
カーテンは白お二階はまだ若い　斐山
気にもしない顔叱られた通知簿　夢生
公約を議員気にしない気しない　松風
彼は彼私は私気にしない　美和
気にしない口で私気にしない腹の中　俊一郎
毒舌を気にしない嫁一家無事　勝子

世界のことより晩の飯のこと　紅雨
糸柳春を楽しむ景にすり　翠川
買わぬ気の覗くウインドウ春の柄　蟠蛇

日ノ丸川柳句会（鳥取市）

河村日満報

赤ちゃん（ライバルと）が出来て化粧も忘れがち　佳酔
新入社（ライバルと目と目が合った日のファイト）もうライバル（という）目付き　三恵子
ライバルの昇給ばかり気（にかかり）　多加子
二世誕生今日から生活（ずみ）になり　道子
ライバルがあり老雄の衰えず　蒼水
ライバルの前をはてしじ腰をかけ　芳道
ライバルの予定コッソリ調べ（とき）　多可志
ライバル（にこ）どもの数で追い越され　三歩
日満

大阪通信病院川柳会（大阪市）

森下愛論報

好奇心つい覗きみる　女部屋
ばん茶失礼とあわてゝ閉めた女部屋　風仙洞
女部屋思った程に花もなし　よしを
赤い座布団大きく一つ女部屋　敏行
おしげなく肢態を伸す女部屋　愛論
主婦の席は揺がぬ素足（のすわりだこ）　草右
素足の白さ美人に（みせて）前を行く　宏子
まだ動く海老が自慢の天ぷら屋　竹荘
天ぷら屋頭の毛まで匂いつけ　春雄
人気女優素足アップで写しみせ　かをり
歩き初め素足の指に力入り　ハナ子

南海川柳会（大阪市）

辻圭水報

（アンコールにもう一）（唄えぬ）一夜つげ　専翁
陽当りがよくて課長宅と知れ　和郎
ほほえみは社宅に残る（らくがき）絵　句念坊
上役の近い社宅は愚痴を云い　摩天郎
三十年社宅住いも今日限り　八郎
社宅の子万年手を知ずして　貴山
お隣りもの声に社宅の弱かりき　圭水

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

信仰をたねに難病つけ込まれ　半月
信仰は人にまかせて二号おき　紅月
無信仰な奴が太鼓をかきに行き　摩天郎
信仰を「けなす」間は未だ達者　六竜子
七十を過ぎて信仰だけに生き　茂夫
黎明の祈りひれ伏す大広間　東雲楼
（家あれば）うちわ太鼓から逃げるのに　幸吾
仏壇も焼いて改宗平気なり　圭井堂
花見など忘れて妻はふけて行き　すみれ
選挙なき年の桜の清らかさ　栄一郎
花見にも人に懐あてにされ　菊代
一人で見る花恋しい恋しい　美代
満開も気づかぬ恋は草むしる　きはち
桜のある道を通ってすれ違い　白柳
空ビンを枕に花見ほっとかれ　静林庵
社の発展職場結婚実を結び　八郎
新入社職場で昔の友に逢う　林松
職場（からは）せ参じたと数珠を借り　吉太郎
職場ではもっと魅力のあった夫　美房
一人生きる職場に女夢はなし　花梢
スカウトの多い職場の目が光る　万楽
遅刻した奴が一番先に去り　柳太
タイムレコードは正直一分過ぎ　清子
車内電報次の列車で来るという　太郎

諫早川柳会（諫早市）

川岡霊眼子報

（はしご）酒見知らぬ連れと（うまが）合い　五竜
（いつの）間にか連れが変った（はしご）酒　重信

飛・燕・往・来

★唐崎専翁氏より

（一）

第一信　新橋第一ホテルより

ワンペン啓上。予てご報告申上げました通り、急遽聖地巡礼の旅というのに加わる命運に捉われました。つまり欧米の文化精神発祥基地ともいうべきギリシャ・エジプト・イスラエル・ローマを中心としたヨーロッパ一帯に於ける宗教新旧基督教等の遺跡と学研の一行に参加させていただく旅です。日程約一ヵ月、行程約三万余キロ、道中は殆んどZ機を主とした空路と、陸路も時速百キロ標準の快速車です。道中に時間がかからぬので僅か三十日位でも、充分に探究と見学が出来るとのことです。昨日東京丸の内ホテルで、全国より集合の一行の結団式も、多数の来賓と共に盛大に挙行しました。東京の新聞関係や、エキュメニカル（欧米に於ける宗教各派の合同運動）提唱の現在として日本から最初の聖地旅行団であることとて相当注目されたらしく、欧州各地より歓迎の報告もあり、現にローマ法王も一行と面接懇談すべく期待しているとの報あり、その他の各地教会主脳者とも面接する等々の企画の下になかなか厳粛な話題でした。そして一行五十五名の中で団長一名副団長二名班長五名合計八名の役員選抜あり、その中での一班長として不肖専翁が当りましたのです。宝くじと違い責任重大のこととて極力辞退しましたが、司会格の明治大学院長武藤兄その他のお偉方の賛意に屈してお受けしましたが、私の班中には青山学院講師で聖書学の権威との馬場牧師あり大阪YMCA理事長山田兄あり、また他の班長は何れも篤学名士と牧師のみなるに拘わらず、私の如き者に当り初一歩から重責の十字架を負わされました。あまり甘い旅でもなさそうです。寧ろ苦い旅です。然しまた篤学士達の中に混じって私がかりそめにも役員として選ばれたとは或は何処かに年輪のよさがあったものと些か嬉しくもあり、一層の元気さを加えました。これというのも先生方を初め川雑社中の方々の日頃の薫陶の賜と感謝に堪えませんでした。以上ご報告かたがた改めて厚くおん礼申し上げます。

二十六日（四月）後二時二十分羽田空港を出発致します日航のZ機で一路西へ飛びます。東京の座席を降りたら明朝はアフリカの砂漠地帯カイロの郊外です。では元気で行って参ります。

東京新橋第一ホテルにて

天国へ社会の地獄抜け翔けて

唐崎専翁

路郎先生
葭乃先生

はしご酒柄だけの傘を持ち帰り　美恵子
忘れ物先に帰ったはしご酒　同
あと一軒覚えていない梯子酒　霊眼子
酔だをれ天下敵なしはしご酒　サワノ
臍くりで又飲み直すはしご酒　万象
知れ渡る甘党歯までかけた人　昇竜
呑めそうな顔で甘党歯が痛み　重幸
甘党が満足そうに指をなめ　五竜
代表で来てなぐさめる他人様　重幸
甘党がおいてけぼりの三次会　嘉納
お見合は甘党だった筈のパパ　霊眼子
呑めそうな顔でで甘党胃が痛み　重幸
甘党がきいて呆れた位上戸　茶坊
貰い泣きするなぐさめの声を呑み　重信
忘れたい事をなぐさめ言うてくれ　美須子
ラムネにも似てかたまりがのどふさぐ　霊眼子
女一人泣かせ栄転派手に発ち　五竜
栄転の祝目出度く酌ぎこぼし　万象
お別れも栄転なれば亦たのし　蘇範

多宝塔川柳会（下松市）

徳光秋人報

正夢になって感謝の免許状　功
電報へ今朝の夢見が胸を打ち　牛歩
父母の夢末はひばりか大鵬か　拾石
あご紐を掛け新妻に投げキッス　千代子
大国の紐で上手に踊らされ　夢八
小包の紐丹念に母は解き　多恵子
二階から買物をする紐が下がり　秋人
退院の荷風呂敷に紐を継ぎ　狂衣
動かせぬ証拠の紐にうなだれる　忍路
役得があるからバーの酒も呑め　多津朗
紐付けるまで待ち切れぬ児の晴着　涙草
役得が無くて会長廻り持ち　牛歩
安全の紐にゆらゆらマスコット　とし子

雑川　宇部支部句会（宇部市）

津秋六花報

面会がとだえて退院近うなり　岩泉
面会の子の弁当を分けて食べる　子
面会で同郷と知る国なまり　山峰
面会は鉄をへだてた母の顔　頼子
面会が許されひげが気にかかり　利子
面会の居留守の声に耳をたて　東村
面会という口実恋の花が咲き　玲子
嬉しさは愛児抱かれて会いに来る　猪三夫
肩書のない面会は居留守され　羊歳
面会へ団子をねだる程に癒え　猪三夫
面会と聞いて病気もみな忘れ　百歩
弁護士が面会に来て知恵をつけ　弘道
面会も病床も癌を口にせず　実男
面会の母に詫びてる鉄格子　南風
茶柱へ今日は面会に来る予感　六花

どんぐり川柳句会（羽曳野市）

古川静波報

壁白くカーテン白く乙女病む　のん子
灯のつかぬ窓が我が家よ独りもの　翠仙
にきび一つつぶして独身の夜長　アキコ
足重く財布は軽く朝飯り　ひろし
高度成長か知らんが財布軽くなり　宣子
財布をあづけるまでの仲になり　則子
片意地がめぐるチャンスを寄せつけず　カツ坊
ドタンバのチャンス代打がもうおらず　史好
ニコヨンに明日は晴れてほしい梅雨　静波
入院を明日にしみじみ子の寝顔　圭太
ながい患い折鶴となる薬包紙　くにを
退院の晴着夫の好む柄　孝子
嬉しさを明日まで待てぬランドセル　斯道

第二信　**エジプトにて**

世紀前の史蹟を探る余生かな

第三信**ギリシャアテネにて**

生命かけて廻る西方浄土国
着けばよし落ちたら万事窮す旅
眼は敏く心はうつろ蛇と鳩
永い夢ただ一日で来て終い
ピラミット駱駝の背で見て廻り
王候のミイラ儚なし生あらた
五千年きのうのように聞く談し

第四信　**ローマにて**

聖地巡礼の旅を終えて、今南欧を遍歴中です。相変らずバスの中で書くので醜筆更に拙くご判読願います。遙に社と柳友諸氏のご健祥を祈りながら今日はバチカン宮殿を参拝して後、ローマ法王パウロ六世に面接のつもりです。

二度訪えどローマは五千年の古都
何度でも飽かず頭の下るとこ
丸四年もローマの小女笑顔みせ
五月十一日十三時より一時間ローマ法王と謁見しました。

第五信　**パリにて**

悠久のセーヌの流れパリの都市囲み守
りつ自由育くむ
マロニエの花の下道風薫り自由に生き
ぬく若人の群
惜春の心はずませマロニエはパリの五月の街を彩る
マロニエの影のテラスに寄りつどい異国の友とコーヒ飲み合う
風かおる五月の空に聳えたつエッフェル塔に靄もかからず

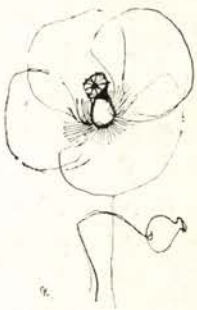
第六信　**ソ連上空機上にて**

一九六四・五・二四

白雲の小片散りゆくもと大小の連峯横たわる間に碧い湖沼の数々を抱えて緑とジャングルらしい山岳帯にさすがに世界有数の大陸を偲ばれる時に、青一色の太帯を解き捨てたような大川の流れは更にそれを裏づけている。コペンハーゲンの空港を出発以来約三時間ソ連圏内に入っている。さすがに恵まれた大国たるを想う。ソ連上空よりお二タ方のご健祥を祈りつつ。

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇　TEL(六二二)三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街　TEL(六三三)〇一四七番
串の店　南区畳屋町三ツ寺センター　TEL(三二)九一八四番

柳樽室



路郎生

★夏が駈足でやって来た。私は七月生れなので暑さには強い方だ。唖三味君が古稀を迎えたそうだがなかなか元気だ。日本柳界の老化問題も深刻を加えつつある際だ。お互いにガン張って欲しい

★編集局の強化も眼に見えて来たが、印刷能率が悪いので何とかしたいと思っている。もう暫く御辛抱していただきたい。

★本号にはパリパリの女流作家時実新子さんが「女として人間として」を執筆、イキのいいとこを見せてくれた。

★次号には高須唖三味氏が、雄筆をふるって「塚越述亭を語る」を書いてくれるからご期待を乞う。

★各地で盛んに大会が催されるのは意を強くするが、その割に雑誌の内容が向上しないのはどうしたことだ。中堅作家のフン起を切望する。編集にノツノツしているようではダメだ。

★夏が来ると私は旅を思う。海外旅行もいいが、内地にもいいところは幾らでもある。要は眼にある。温泉でとろけて帰るのでは何にもならぬ。近ごろ川柳界でも旧婚旅行がウンと殖えたようだ。若いのが相手にしてくれぬから老妻をでは老妻に気の毒だ。老妻だったら安あがりでよろこばれるなどと考えるようになってはおしまいだ。老妻たるもの、ウンとデラックスな旅をして、老いゆく夫に活を入れてやることだ。

★不朽洞会でも専翁が欧洲へ飛んだが旅先で、胴巻をベットの下敷にして忘れたままホテルを発ったそうだがなるべく夫人を心配ささぬ方がいい。

★私はこの夏を再び奥信濃へ中島紫痴郎氏を訪ねようかと老妻と談している。紫痴郎氏も元気だが、こっちの方がだいぶ怪しくなっているので、出かけようかと思っている。

★神経の鋭どい人と、緩漫な人とでは、句を作っても、文章を書いても、棧敷から芝居を見てる人と平場から見てる人の差違がある。雑誌はその双方の人の集合体であるから、それはそれなりに筋が通っていれば採用しているのだから、遠慮なく投稿してもらいたい。イヤに潔癖ぶって、一方的な句や一方的なエッセイだけで終始することはしない。下手な句や、合理的でない原稿はご遠慮を願うが投句者や投稿者は何と云っても先ず雑誌そのものに親しみを持って欲しい。他人のことにとやかく云いたい人はある程度のエチケットを守って筆を執って欲しい。バリザンボーや嘲笑は己れに出て己れに帰るのが落ちであると知るべしである。

編集局は法的な責任だけは作家と執筆者と連帯責任を持つが、それ以上は作家や執筆者に責任を持ってもらうことにしているので、気に要らぬ点は大いに抗議なり、反論なりをしていただきたい。そこにお互いが啓発されるであろう。

★**川雑支部句会**

——六月

★**京都句会**・16日(火)夕、題、和・容疑者・手製、所、四条縄手仲源寺、★**明和研究句会**・14日(日)一時、題、種・今日・素人、所、阪神電車鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、★**南海電鉄句会**・18日(木)六時、題、ミナミ・入歯・割当、所、難波高架下親和クラブ、★**阿倍野句会**・20日(土)六時半、題、厄介・習慣・用意・匂う、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万、★**玉造吟行句会**・14日(日)午前十一時、題、市バス・ガラス・熱(ネツ)、所、来迎院(市電守口下車、京阪バス佐太天神下車約十分程)弁当各自持参、★**富柳句会**・7日(日)一時、題、悪銭・内助・約束、所、公民館

★たぬきざんまい

新刊紹介

富田狸通著

二十八畳の部屋に過去四十年間に蒐集した狸の器物其他が千五百余種ズラリとならべられてある。その中にうずまって天下をヘイゲイし広げも広げた八畳敷の雑筆。読むより外に手のない本だ。狸寝入りをせずに読むべし読むべしと提灯を持っておく。B6版二四頁、価三五〇円。発行所松山市道後湯之町狸のれん。

★**後瀬**　俳句集——

山崎冬尊著

俳誌「早春」の重鎮、山崎冬尊氏の第二句集、著者は目下、高血圧で静養中であるがしかもこの著を上梓して世に問う。あくなき芸術心の発露を思わされる。巻頭に快心の作を掲ぐ「囀りや辛夷刻々日の表」。B6版二三四頁、価六〇〇円発行所大阪府池田市本町早春社。

柳人交歓暑中見舞広告を募る

八月号へあなたの暑中見舞広告を

★一口金三百円。幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は七月五日着便。

★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

川柳雑誌社

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B6型函入

価380円

送料90円

★著者は曽て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した—今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す—ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る—凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

橘高薫風子著　麻生路郎序

川柳句集

価250円

送料60円

▼著者は新進作家で、纖細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精進を続けてる前途ある好作家である。

発行所　**川柳雑誌社**

元気でいこう
元気をつかむ

疲労・肩こり・神経痛

結合新活性ビタミン剤

ノイビタ®

フジサワ

会長・麻生茂乃女史

川雑 婦人友の会会員を募る

川柳雑誌社内 川雑婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区二ツ井戸町23

山川阿茶

麻生路郎著

新川柳鑑賞

好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

句帖

あなたの句帖が再版されました

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何回かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又仲友への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下ない

一冊八〇円（送料二〇円）

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区万代西五丁目二五
電話 大阪 柳 6081
振替口座 大阪七五〇五〇

募集

課題吟募集

階級（十句以内） 若本多久志選
頬ずり（十句以内） 長野文庫選
禁酒（十句以内） 本多柳志選
（六月十五日締切）
碧い目（十句以内） 戸田古方選
異端者（十句以内） 河村日満選
ヘター（十句以内） 水谷竹荘選
（七月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（補遺廿句以内） 麻生路郎選
人生譜（補遺十句以内） 北川春巣選
川柳塔（補遺十句以内） 河野春三選
文章（評論・研究・感想其他） 麻生路郎選
七月十五日締切

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が出来る。
▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 三十九年 第六号
定価 一二〇円（送料六円）
（禁転載）
半カ年 七五六円（〒共）
一カ年一、四四〇円（〒社員）
昭和三十九年五月廿五日印刷
昭和三十九年六月一日発行
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅九年六月一日発行　（毎月一回一日発行）
編集兼発行人　麻生路郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪（6）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価百二十円（送料六円）

一家そろつてホーライ党

廣東料理 豚饅 燒売

蓬莱

大阪なんば・TEL (641) 551—2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位綜合ビタミン・ミネラル剤
ポポン-S
20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円

シオノギ
塩野義製薬株式会社

大和文華館
日本建築の特色に近代美をいかした建物で絵画・彫刻・書蹟・陶磁漆工・染織など　国宝や重要文化財をふくむ逸品を集めた　すばらしい美術館です
春秋には　特別展観が開かれます
近鉄上本町から奈良ゆき急行28分
京都から奈良ゆき特急30分　西大寺駅のりかえ5分　学園前駅すぐ

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味わい方—
価 二五〇円
送料 七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂
東京都新宿区払方町27　振替東京29507